千葉県警機動隊　われらがシンボル⑪

強く、正しく、すばやく、という、同機動隊の隊訓を県章に高く突き出た矢印が象徴している。雄々しく、勇敢であれとの願いである。

はげまし

はげまし　第11号
発行日　昭和50年4月30日
発行所　機動隊員を励ます会
東京都中央区八重洲5－1－28
〒104　ミツヤビル3F
☎03(272)3848

一年の豊かな実り示す集い

昭和50年度総会・懇親パーティー華やかに開く

昭和五十年度の機動隊員を励ます会年次総会および懇親パーティーは、さる四月二十三日、東京・平河町の都市センターホールで盛大に開催された。今次総会は、既報の会歌レコード完成と合致したため、懇親パーティーでは作曲者の藤山一郎氏をお迎えして、警視庁音楽隊、婦人警官鼓隊のコーラスをバックにその発表と歌唱指導を行なうなど、これまでになく華やかで楽しい集いとなった。

ひろがりゆく底辺

定刻三時をやや回って、司会の鈴木実氏が開会を宣言。ます、代表世話人、大内俊司氏が立って、要旨つぎのように冒頭のあいさつを行なった。

「会員は現在すでに約五、〇〇〇名を数え、当初の八倍強にもなっているが、これは一つの輪がまたつぎの輪へとひろがるようにして、会の精神が人から人へと理解され、共感を拡げていった結果である。支部もすでに大阪、九州が誕生、名古屋にも支部発表の機運近く、このように広い底辺に支えられた運動として発展してゆくところに意義がある。

ひきつづき同氏より、初年度における会の活動状況の報告とこんごの活動計画の説明があった。ついで松田大刀雄氏より、初年度（自昭和四十八年十一月八日、至昭和五十年三月三十一日）の会計報告があり、津田宗三郎氏からこの決算内容が正確にして妥当であることを認める旨の監査報告があった。

司会者は会計報告についての賛否を議場に諮ったところ、満場一致をもってこれを承認した。

以上をもって総会を終了しひきつづき、懇親パーティーへと移った。

ホールゆるがす大合唱

まず、警察庁、警視庁の来賓、各機動隊の隊長、隊員が盛大な拍手に迎えられて入場、これより和やかなパーティーが始まった。

最初に、東京から村山文雄氏、大阪から高島浩一氏が代表して、こもごもはげましのことばを述べた。

これに対し、浅沼清太郎警察庁長官が、来賓を代表してあいさつを述べた。

九州支部代表の自見真清氏の音頭による乾杯ののち、エレクトーンのマーチ演奏によって、藤山一郎氏を先頭に、警視庁音楽隊、婦人警官鼓隊が入場。早速、音楽隊のブラスバンド演奏、婦人警官のコーラスをバックに、「機動隊員をたたえる歌」「機動隊員を励ます歌」二曲を藤山一郎氏が力強く歌い上げ、会員の前に初めて披露した。

会歌発表後、作曲からレコード制作、当日の発表、歌唱指導に至るまでいつさいに尽力された藤山一郎氏に、大内俊司氏より当会からの感謝状が手渡された。

ついで、歌唱指導に移る。藤山氏の巧みな指導で、来会者が唱和、最後はブラスバンド演奏で全員の大合唱がホールにこだました。

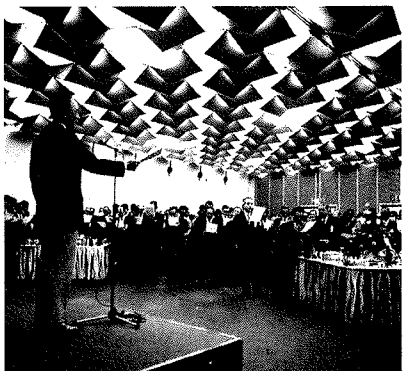
歌唱指導を終って、藤山氏が「この曲の生みの親は私だが、生みの親より育ての親のたとえもあるように、皆さんで愛唱してひろめていってほしい」と結んだ。

ここで、要務のため遅れて来会した土田国保警視総監があいさつを述べた。

このあとは、和やかな懇談となり、そこかしこのテーブルで会員と隊員の親しい交歓がくりひろげられた。宴たけなわのころ、藤山一郎氏が、「酒は涙かため息か」「東京ラプソディー」などのヒットソングをとくに披露し、満堂をわかせた。

かくて、総会、懇親パーティーはかつてない盛り上りのうちに幕となったのである。

▲浅沼警察庁長官



▲藤山一郎氏による歌唱指導

▲土田警視総監

今月のことば

草の根運動への期待

仕事場と家庭の間を寄り道一つしないで往復する人種のことを伝書鳩などという。

仕事と家庭が人間の生活の中枢を占めるのは当然であるが、伝書鳩スタイルに終始するというのは、いかにも貧しい人生である。

そこで、交友、趣味・娯楽などをひっくるめた遊びの場がある。仕事、家庭、遊びというこの三つの場を結ぶ三角形の辺上を行き来する、というのが現代のごく普通の日本人の暮しぶりであろう。

そして、この三角形から一歩外へ出ると、何の場ももたないという人が案外少なくないのではあるまいか。

かつて、米国のある中産階級の家庭にしばらく滞在したときの経験であるが、その家の主人は、仕事とかかわりのない何かの社会事業的なものに関係していて、毎週一度はその集会に出席していたし、その夫人も教会を中心とした公民運動のメンバーで、よく会合に顔を出していた。

これは何もその家だけの事情でなく、近隣の家ではだれもが何かの形で、そうした活動の場をもっていた。子供たちまでが、ボーイスカウトを通じて、社会奉仕を行なっている。

日本人の場合は、一般に自分が属する集団への帰属意識は旺盛で、そのかぎりにおいてはたいへん勤勉で責任感も強いが、それよりいちだん高次の立場――いわゆる公民としての意識が稀薄であるということがよく指摘される。日本人の公徳心の欠如などということもその一つのあらわれであろう。

自分の仕事や家庭以外で何か世のため人のためになることに積極的に参加する気持をだれもがもてば、私たちの社会はもっともっと住みよいものになるだろう。

「機動隊員を励ます会」もそのような意味の一つの運動である。発足一年にして会員は全国で五千人になんなんとしている。これからもまだ増えつづけるだろう。会当局としては、あらゆる機会にその本来の仕事である機動隊員への励まし活動を推進してはいるが、何分にも隊員の数は多く、全国に分布している。

ただ会員として名を連ねただけでも意義あることだが、この上に願わくば、会員一人一人が、それぞれの地域で機動隊員への励ましを実行していただければ、会の存在はさらに意義あるものとなろう。このようにして、会の精神が草の根運動のように全国くまなく浸透してゆくことを期待したい。

親しめる楽しい会へ

このたびの総会で目立ったのは、女性会員の来場者の姿が多く見受けられたことだった。その中には、つい先日、劇作家・花登匡氏との結婚で話題をまいたばかりの女優、星由里子さんの姿などもあり、会場に華をそえていた。これは大内俊司氏のあいさつの中にあった会員の底辺のひろがりを物語る一つの例でもあろう。

パーティーの合間に、機動隊員の方々に感想をきいてみると、異口同音に「実に楽しい会である」という答が返ってきた。ゲストの藤山一郎氏までが、まことに楽しかったということばを残して帰られた。

当会も発足して二年目に入る。機動隊員を励ますという当会の本旨にそった活動はもとよりのこと、本当に楽しい会として隊員の方々に親しまれることもまたあり方として必要なことであろう。今次の懇親パーティーはその意味でも実りある催しとして、来会者に多大の印象を残したようであった。

機動隊物語(10)

レールを染めた鮮血・三河島列車事故警備

日本の鉄道史上最大とも言うべき、死者百五十三名、重軽傷者三百三名という大惨事が起こったのは、昭和三十七年五月三日、午後九時三十七分頃であった。

五月のゴールデン・ウィークに入り、人々の心には安らぎが満ちあふれた矢先の出来事であった。

事故発生と同時に、千百六十余名の警備要員を動員し、初動措置の万全がはかられた。当番勤務の二機一個中隊をはじめとして、一機一個中隊を急派し、救助活動を行ない、さらに、全機動隊の当番中隊を招集したが、事態の重大性により、午後九時五十二分には全機動隊非番寮員の緊急出動を行なった。

隊員達は、現場に到着するまで事故の内容、被害状況等については知らされなかったが、夕闇の中にけたたましく鳴る警察車両、救急車のサイレン、人々の叫び声に、隊員一人一人は、事態の重大さを感じとった。

輸送者からとび降りた隊員達は、命令一下、救助活動に入った。

漆黒の闇の中に、ポツリ、ポツリと点在するうす暗い街灯に照らし出された線路に上ると、上り、下りの二台の電車が脱線しており、線路上には鮮血が飛び散り、手足を失ったり、頭から鮮血を吹き出している重傷者が、線路上、車内でうめき、はいずりまわる。なかにはすでに死亡していると認められる者も多数横たわっている。二日後に控えた「子供の日」のために買ったと思われる真新らしい人形が、染血に染まり、〝悲しみの五日〟を想像させる。

準備したタンカは、みるみる真赤となり、隊員達の制服、軍手も血だらけとなる。

一人一人も救けなければ、と隊員達の心は焦る。

誰が言いだしたのか、「戸板だ！」の叫び声に、全員が近くの民家に直行する。家人に借用を申し入れ、承諾なかばにしてその家には一枚の雨戸もなくなる。二人一組となってころがるように線路上に戻る。重なり合って倒れている重傷者の間を「すぐに助ける、頑張れよ！」と声をかけてまわる。返事をする者、うめく者、泣き叫ぶ者。もつれて転びながら輪送地点に到着する。救急車を待つ重傷者のうめき声は、次第に小さくなる。「元気を出せ」と励ます。救急者が到着するたびに歓声があがる。やがて一般のトラックも参加し、警察と近隣住民の一体となった救助活動が続けられ、疲労と空腹のうちに救助活動は終った。

二日後、五月五日の空に朝日が昇った。空にたなびく鯉のぼりの緋鯉の〝赤さ〟が妙に気になる子供の日であった。

第四機動隊チームに栄冠

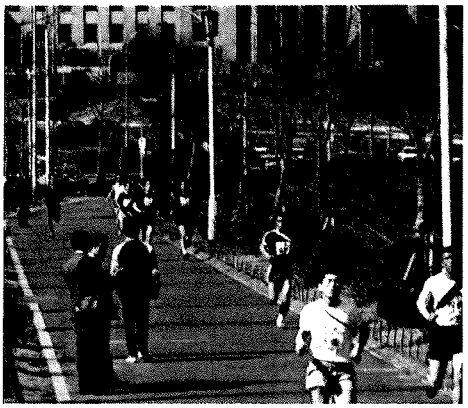
警視庁機動隊対抗駅伝競走大会

快晴にめぐまれた三月二十二日、警視庁機動隊対抗駅伝競走大会が行なわれ、桜田門を出発点として皇居外周約五キロメートルに、各隊六組がリレー形式で六周および三十キロメートルにその覇を競った。また、当会から中野　進氏ら数名が参会し、祝辞を述べた。

同大会は、昭和三十八年に第一回大会を行なって以来、毎年継続して行なわれてきたが、昭和四十一年大会以後、本大会まで諸事情により中断されていたもの。それだけに各隊出場選手は、勝敗のみにこだわることなく、大会の、「気力・体力を練磨し、各隊の融和と士気高揚を図る」という精神に徹し、大会の盛り上げに互いに協力する場面も多々見られた。

午前九時を回ったところで大会前のセレモニーを終え、各隊チームの第一組走者それぞれ五名がスタートラインについた。チーム編成は、幹部一組、本部一組および中隊四組の合計六組である。その中の幹部組は指定の第一走者であり、また、一組は五名で成っている。

出場各選手の熱い視線と初夏のような陽ざしに押し出されるように第一陣がスタート。ドッと歓声が湧く。桜田門を出て第一地点にあたる坂下門を通過してもまだまだ足どりは軽い。隊員に比して年令も高く、ほとんど練習する機会もなかったため、途中で息切れするのではないかと心配の声もあったが、そんな声をよそに中間地点となっている第三地点の乾門もなんなく通過。



天候が非常によく、額からの汗もワンピッチごとに胸元にしたたり落ちる第五地点の半蔵門あたり。もうひと踏ん張りで第二組走者へのバトンタッチだ。コブシをにぎって力強く上腕をふりあげラストスパート。第一機動隊チームが先頭で桜田門をくぐった。続いて第九機動隊、第七機動隊。

競技規定によると、次位走者チームにバトンタッチするには前走者の一組五人が入線しなければならない。従ってその組の一、二名だけが他の組の走者を大きく引き離して入線しても他の三、四名が入線するまでスタート地点で五人とも待たなければならないことになる。

二周・三周は順位が目まぐるしくかわり、四周目に入ってトップに立った第四機動隊チームが最後まで首位を守り続け、一時間五十五分二十四秒のタイムで優勝、これに遅れること二十七秒で第一機動隊チームが準優勝、三位は第七機動隊チームであった。

各隊ともチーム編成にあたり、必らずしも同等能力の選手を送り出したというわけではない。あるいはただ優勝することのみに目標をおけばそういう編成の仕方も可能であったろう。だが、真に隊のチームプレー、隊員間の融和を図るという大目標の前に選手の選出も充分に配慮されたに違いない。競走中、何組かのメンバーの中で、遅れ出す選手がいた。他のメンバーは彼を囲むようにして励ましながらリレー点まで走った。各選手のこうした行為は、関係者の温い拍手と声援をさそった。

こうして競走は終了し、すぐさま表彰にうつり、警備部長のあいさつをもって大会を無事に終了した。

機動隊員を励ます会発足一周年を祝して

警察庁長官　浅沼清太郎

機動隊員を励ます会の発足一周年にあたり、心からお祝いを申しあげます。

また、この一年間、機動隊員に示されましたご激励の数々に対し、深甚なる謝意を表する次第であります。

世間には、いろいろな人の集まりがありますが、イデオロギーにとらわれず、名利を求めない純粋な運動は、案外少ないように思われます。これは、「不言実行」をもって奥床しいとする日本人の国民性とも関連があるように思えますが、良識ある国民の多くは、いわゆるサイレント・マジョーリティに属するもののようであります。機動隊員を励ます会の会員の方々も決して例外ではないと思いますが、それにもかかわらず、あえて本会を結成され、多忙な時間を割いて、機動隊員に対する支援と激励の活動を展開してこられましたことは、わが国治安の現状と、機動隊の任務に対する深いご理解によるものであり、しかも、その活動の環を、広く全国に拡大されてこられましたそのご努力に対し、心から敬意を表するものであります。私は、警察は、「国民とともにある警察」でなければならないと考えておりますが、そうした意味で、貴会の存在はまさに国民と機動隊とを結ぶ「かけ橋」の一つであり、まことに力強いものを感ずる次第であります。機動隊員にとりましても、何ものにもまさる心の支えとなり、励ましになっていることと思います。

ところで、機動隊員は、皆、若い有為な青年達であります。今日もまた明日も、市民生活の平和を願って、心なき一部の人々のいわれなきそしりに耐えながら、黙々として任務の遂行に若き青春をかけております。

会員の皆様方には、これら機動隊員の真摯な姿を暖かく見守っていただき、機会あれば気軽に接していただいて、意のあるところをお伝え願えれば、貴会の存在を身近に感ずるようがともなり、勇気づけられることはかりしれないものがあると思うのであります。

"備えあれば憂いなし"と申しますが、会員の皆様方のご期待におこたえするためにも、機動隊は、警察における集団警備力の中核的組織としてたゆみなく研さんを積み、これからの難しい時代に対処してまいる所存であります。

終りになりましたが、貴会のますますのご発展と、それにおこたえする機動隊員の一層の健闘を祈念して、私の祝辞といたします。

会員と隊員のひろば

機動隊と私

第八機動隊　小沢　茂

私が初めて機動隊に入隊したのは、第一次羽田事件のあった昭和四十一年で、いわゆる「過激な街頭闘争」が開始された時期でした。

その当時、機動隊の装備は決して完全とはいえず、出動のたびに投石や角材を直接受け同僚の中にも負傷する者が続出しました。そして、闘争は日を追ってエスカレートし、火炎ビンや爆弾、あるいは銃器を使用する事件までも発生するようになってきました。

しかし、このような情勢の中で、装備は逐次改善され、現在のように充実してきたのです。

だが、これまでになるには、多くの先輩の貴重な体験と、血のにじむような苦労があったことを忘れることはできません。変化する警備活動の中で苦労した苦い経験から、警察官全体の要望として装備の開発、改善が行なわれ、現在の警備に生かされているのです。

そのようなことから、私達は今、自信を持って警備にあたることができるわけですが、私は、どんな警備に従事していても常に考え実践していたことがあります。それは「正義の姿勢を崩さない」ということでした。社会生活の規律から逸脱し、平和を愛する善良な国民を不安に陥し入れる暴挙に対し、身を挺して厳然と立ち向う、ということなのです。

そして私が、ずっとこれを信念に持ち続けることができたのは、機動隊に期待する国民の暖かいまなざしがあったからなのです。警備にあたっていると、「ご苦労さん」「頼みますよ」などと語りかけられ、激励されてもらったものです。私達にとって、この言葉ほどうれしいものはないのです。

バ声の中で、石や火炎ビンを投げつけられじっと身を固くして耐え忍びながら、時としては弧立感に押し流されそうになる場合もあります。しかしそのような時の励ましは、私達に計り知れない勇気と、力を与えてくれました。

数多くの激しい警備を経験し、無事任務を果たすことができたのも、この「励まし」が心の支えとなっていたからと思います。機動隊は、若者の修練の場であると同時に社会人としてさらに大きく成長するための場でもあります。

励ます会の皆さんが、「機動隊」から受けるイメージは、出動服に身を固めたいかめしい隊員の姿であろうと思います。しかしその中味は、ごく普通の若者の姿なのです。訓練や柔剣道に汗を流し、勤務が終れば夜間大学に通い、また昇任試験に向って勉学に励み、時には酒をくみかわして語り合いながら、社会人として、あるいは一人前の警察官として成長していくのです。

私もこのような環境の中で、多くの人の指導を受けて成長してきました。これも国民の皆さんの強い励ましがあったからと感謝しています。これからも、私達機動隊員は、励ましを心の糧として、さらに努力する覚悟です。

警視庁チーム大活躍

第27回全日本フェンシング選手権大会

去る三月二十三日から四日間にわたり、三重県鳥羽市市民体育館において行なわれた第二十七回全日本フェンシング選手権大会に出場した警視庁チームは、団体個人の両部門で大活躍、団体全種目（フルーレ、エペ、サーブル）を制覇するという実業団チームではかってない偉業をなし遂げた。

その内容は、過去六回もの優勝経験をもつサーブル・チーム（警視庁教養課・佐藤乃行、第四機動隊・秋保　篤、大塚　清、板倉英行各選手）が二年ぶり七回目の優勝を遂げたのをはじめ、同個人戦でも秋保　篤選手が優勝、大塚清選手が準優勝するなど、警視庁チームが上位を独占した。また、フルーレ、エペの団体戦（秋保　篤、田中　誠、大塚　清、板倉英行各選手、他方エペは田中　誠、可児正樹、坂下俊雄、板倉英行の各選手）でも優勝を決め、まさに警視庁の全盛時代が訪れたことを告げる本年の選手権大会であった。

隊員対抗　紅白柔剣道大会開く

大阪府警第二機動隊

さる四月十五日、大阪府警察第二機動隊において、新旧隊員対抗の紅白柔剣道大会が盛大に開催され、日頃腕におぼえの猛者が業を競い合った。

当会からは大阪支部の世話人、平井達三氏、川淵長一氏ら数名が参観、あいさつを述べた。

会員告知板

●会員増幅状況

五十年度総会もとどこおりなく行なわれ、会員の皆様方も新らたな決意を秘め、本年度のスタートを切られたことでしょう。

二年目を迎えて会員数もつぎのように着実に伸びつづけています。

法人会員	二六七
特別会員	五二七
一般会員	三〇五四
合計	三八四八

（四月二十一日現在）

●寄稿歓迎

編集部では、常時、会員の皆様方からの寄稿をおまちしています。

会員として、また市民としての立場から機動隊についてのご意見・ご感想や機動隊とのかかわりがあった経験談、あるいは本会に関するご意見ご希望など、幅広くお寄せください。採用文については紙上にてご紹介します。

なお、紙面の都合により四百字詰原稿用紙で三枚以内とします。

●五十年度会員継続手続を未了の方へ

会員継続手続きを希望しながら、まだ未了の方は至急手続きをすまされますようお願い申し上げます。

寄付金報告

去る三月十二日の九州支部発会式および四月二十三日の昭和五十年度総会にて次のような温かい寄付がありましたので報告申し上げます。

九州支部発会式にて東海レベラー鋼業㈱松本三良社長より十万円の寄付。総会時に匿名にて一名の方から四千円、三名の方から各千円計三千円の寄付。

機動隊めぐり(11)

千葉県警機動隊

——ここ十年というもの、成田に明け、成田に暮れる毎日でした。その成田国際空港もほどなく開港しますが、一番機が飛び立つまでは、まだまだ気をゆるめずに任務にあたっていきます——と、成田空港開港を目前に控えて、感慨深げに、また、開港までのわずかな残りの日々に、なおいっそうの決意を秘めて、こうおっしゃるのは、千葉県警機動隊長・鎌田隆太郎さん。

"成田に明け、成田に暮れる"とは、まさに至言。ここ数年というもの、一日も欠かさずに、ここ千葉県警機動隊から部隊が成田に向けて出ているのである。

昭和二十七年九月に誕生以来、東京のベットタウンを抱える千葉県において、住民の生活の安寧のために、夜に日を継ぐ訓練を続け、また、さまざまな警備にあたった。

そして、昭和四十四年には、警視庁のそれぞれ独立した機動隊組織とは、多少趣を異にするが、神奈川県、埼玉県、福岡県などと同じように、千葉市内に第一機動隊、習志野市に第二機動隊と二つに分かれたのである。

——成田における一連の反対闘争警備のために、わが隊は、常時動いていますので、おそらく出動の回数や時間では全国一高いでしょう。たとえば、現在はいくぶん小康状態を保っていますが、それでも、毎日の警備はかかせませんでしょう。

三百余名の隊員を抱える千葉県警機動隊にも、悩みがないわけではない。ひとつは、隊庭が狭すぎること。ひとつは、日頃の警備に追われ、他の機動隊のようにクラブ活動の強いチームができないということである。

——成田の警備も、もう十年になります。苦しいことも多かったですが、ひとつ喜しいことは、昔からの隊員が、成田が開港するまでは、がんばってくれていることですね——

ん——なるほど出動状況を示す表を見てみると、全出動の約七十パーセントが治安警備で占められており、これもやはり全国一の数字だという。

——このような状態ですので、ややもすると、毎日の警備に追われて、日頃の訓練がおろそかになりがちですが、この点は十分に留意して、少ない時間の中で、いかに効率よく行なっていくかに頭を痛めています。それに常日頃、隊員達に言うんですが、市民を護る責務として、何か事あれば、いつでも飛び出せる覚悟を持っていなければいけない。そのためには、一個の警察官として、機動隊員として肉体的にも、精神的にも強く

警視庁
第七機動隊

われらがシンボル⑫

「若獅子７機」のニックネームを図案化したもの。百獣の王、獅子の如く雄々しく、かつ積極果敢であれ、という意味で、シンボルとしては２代目。

はげまし

はげまし　第12号
発行日　昭和50年５月23日
発行所　機動隊員を励ます会
東京都中央区八重洲5－1－28
〒104　ミツヤビル３Ｆ
☎03(272)3848

女王晴れの六日間の守護

内外に威信高めたわが警備陣

時もよし、新緑映える五月晴れの日本をはじめて訪問された英国女王エリザベス二世陛下とエジンバラ公は、かって日本を訪れたどの国賓にもまさる日本国民あげての歓迎につつまれ、五月七日から十二日の六日間にわたる日程をつつがなく終えて帰国された。その間の模様については、すでにテレビ、新聞等によって周知の通りであるが、さわやかなクイーンズスマイルの記憶も新たないま、万全の警衛警護警備によって、女王ご夫妻のご訪日に輝やかしい成果をもたらした大きな薩の力の一つとなった機動隊をはじめ警察陣のご苦労のあとを振り返ってみよう。

延べ五万人の大動員

英国女王エリザベス二世陛下およびエジンバラ公フイリップ殿下は、政府招待の国賓として、さる五月七日に来日され、同月十二日に無事帰国された。これに伴ない、お出迎え、お見送りその他の諸行事のため、天皇皇后両陛下、皇太子同妃両殿下の行幸啓および皇族殿下のお成りなどの機会も数多かった。

警視庁では、この警衛警護警備に関し、早い時期から慎重に計画を練り、万全の態勢を敷いてその日を迎えた。

女王ご一行が京都方面へおもむかれた五月十日を除き、五月七日には一三、〇〇〇人、八日に一〇、〇〇〇人、九日に一一、〇〇〇人、十一日に六、〇〇〇人、十二日には一〇、〇〇〇人と五日間で延べ五〇、〇〇〇人の警備人員が動員されたのである。

機動隊員ももとより、一機～九機に特科車両隊を加えた十個機全員が動員され、製備の枢要を担った。

折悪しく交通ストと時期が重なるという悪条件の中で、隊員の多くは連日隊舎に泊りこむなど、文字通り不眠不休で任務に当った。

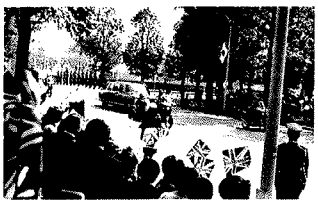
このたびの女王ご一行のご訪日に対しては、ごく一部の極左分子を除き、マスコミをはじめ日本国民全般はきわめて好意的であり、その点、思想的政治的な背景による集団的な反対行動の懸念は比較的少なかったといわれる。しかし、時候は木の芽時ではあるし、精神異常者等による突発的な変事の心配は絶えないわけで、それらは事前に察知しようがないだけに警戒が困難である。

しかも、このたびの警備はのちに述べるように従来のやり方とやや異なる方法が要求されただけに、警備当局としても慎重な上にも慎重を期したのであった。

柔らかくて厚い壁

このたびの女王ご夫妻のご訪日をお迎えして、わが国の警備陣はこれまでにない難しい一つの条件を課せられた。それは新聞等でも伝えられたように、女王が沿道の民衆と女王ご夫妻を警備陣の人垣でへだててしまうようなものものしい警備を好まれず、いわゆる「ソフトな警備」を希望されたことである。

先の米国フォード大統領の訪日の際も大警備陣が展開されたが、このときは警備陣を表面に立てての集団的な態勢がとれた。しかし今回の場合、ソフトな警備をということで、女王ご夫妻に近いサイドの警備には婦人警察官を多用する、道路際の警備陣は女王ご夫妻と沿道の市民の間の視界を妨げないようにすべてしゃがんだ姿勢で配置につく、群衆の中には多数の私服の警備員を配する、といった苦心の方法が練られた。



このような方法が、人垣をつくって群衆を完全に遮断してしまうようなハードな警備態勢をとるよりもはるかに多くの困難をともなうであろうということは容易に想像がつく。

事実、機動隊のある関係者からのちに聞いた話では「一人一人が絶えず周囲に細心の注意を払い、姿事の起る気配を感じたらそれを未然に阻止しなければならないわけで、集団の力に頼るというより、個人の注意力を最大限に要求されるといった面が大きくなりこれまでの経験にないほどシンの疲れる警備だった」ということであった。

しかし、こうした苦心の警衛警護警備活動は、「柔らかくて厚い壁」と評され、結果的に大きな成功をおさめた。そのソフトな警備方法のおかげで女王の行く先々で沿道の市民たちはあのクイーンズスマイルを手にとるようにそば近くで見ることができ、また女王ご夫妻も日本国民の好意あふるる歓迎の気持を肌で感じられたことだろう。

女王ご夫妻ご帰国後、英国の各新聞もこぞって女王ご夫妻と日本国民の交歓ぶりを伝え、日英親善に測り知れない大きな実りをもたらしたこのたびのご訪日の成功をたたえている。

機動隊員諸氏本当にご苦労さま！

さて、このようにして無事大任を果たしたばかりの五月十四、十五の両日、機動隊員を励ます会を代表して、世話人各氏が東京では警視庁の十個機、大阪では大阪府警の二個機のすべてをそれぞれ慰労訪問した。

大任を終えて心なしか表情も和む各隊の隊長さんの感想は、異口同音に、「ともかく何ごともなく過ぎて本当によかった」ということにつきるようであった。天候不順のさ中女王ご一行のご滞在期間だけは一日も雨にたたられず「女王晴れ」ともいうべきさわやかな天気がつづいてよかったというのも一致した感想であった。

隊員が一つの不平不満もなく、実によくやってくれた、という点も各隊長さんの指摘するところであった。

こうした警備陣の活躍は、女王ご一行からも感謝され、そのしるしとして、女王の身辺警護に当った石川警部が女王からカフスとサイン入りの写真を頂戴した、ということが新聞で報道された。その折石川警部は「なろうことならこれらの品々を、警備に当った五万人のすべてに分けてあげたい」と語ったと伝えられている。

たまたま石川警部は警視庁特科車両隊の出身であり、同隊佐藤隊長は、感激の面持で「あのことばこそ私たち一人一人の気持です。このたびの成功はだれという、ことでなく隊員全員の日頃の訓練による一致協力の賜物です」と語っておられた。おそらく各隊の皆さんの気特を代弁することばとして、とくに紹介した次第である。

最後に、女王ご夫妻の宿舎であった迎賓館の警備という最も重要な任務の一つに当られた警視庁第四機動隊の島津清隊長から本紙にメッセージを寄せていただいたので、ここにご紹介して結びとしよう。

「わが第四機動隊は、第五機動隊とともに迎賓館警護の大任を命ぜられた。女王陛下御一行の身辺の絶対安全を確保するとともに一般の人々との接触の機会をできる限り多くするよう、そのため親しく、スマートにかつ内に厳しく警護するという点に重点を置いた。若干の事犯を除いては無事に女王陛下ご一行が羽田をたたれたときいたとき、肩の重荷がとれた一種の安堵感と大任を無事に終えた充実感とが入り混った虚脱状態に一瞬陥った次第である。

また、六日の間、中隊長以下全隊員が、女王陛下警護という大きな重圧をはねのけ各各の任務を完遂し、隊としての責務がまっとうできてうれしい」

今月のことば

若者のしあわせのかたち

先ごろ、自衛隊員の意識調査が行なわれ、その結果が新聞に発表されたのを目にした。

あまり記憶がさだかではないが、その中で任務に関する意識の項目で、国防という任務に自分の生き甲斐を覚えていると回答したものが、たしか三〇％程度の割合いに低い率だったように覚えている。

たまたま、ある機動隊の隊長さんとお会いしてよもやま話をした際に、この話が出た。

この隊でも、隊長さんが独自に同じような隊員の意識調査を試みたそうである。ところが、ふたをあけてみたら、この隊では自衛隊の場合とは逆に、隊員全員といってもよいほどの高率で任務に対する高い意識を示す結果が出た、ということであった。

機動隊員の志気がきわめて旺盛であるということは、これまで隊員に数多く接してみて、つとに感ずるところであった。

たまたま、一つの隊だけでの調査であるにせよ、この結果は、これまでの印象を裏づける実証といえそうである。

自衛隊員と機動隊員との間に、このように意識の開きがあるというのは、両者の質の違いによるときめつけるのは酷であろう。防衛という、いまのところでは実体のない平和国家日本の任務についている自衛隊員に比べ、機動隊員は日々、市民と肌を接し、現実の任務と取り組んでいるからである。

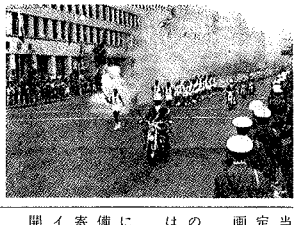
それにしても、機動隊員の練度の高さ、志気の高さは世界有数といってよいであろう。国際的な行事のたびに、このことは海外にも喧伝されている。

ひるがえって、今の若者一般を見るとき、現在の自分の仕事に生き甲斐をかけている者が果たしてどれほどいるだろうか。仕事に生き甲斐をもち得るということは、いまの時代ではむしろ稀有のことなのかもしれないのである。

とすれば、機動隊員の若い諸君は、世間一般の若者が経験しない苛酷な任務を課せられている反面、世間一般の若者には望めないしあわせをもち得ているともいえるのではあるまいか。

機動隊物語(11)

さわやかな思い出・オリンピック東京大会警備



機動隊創設以来、数ある警備実施の中で、厳しく、また悪らつな事件は数多いものの、心に残るようなさわやかで、楽しい警備は五指にものぼらないだろう。

昭和三十九年十月十日、この日は、いまでも体育の日として国を挙げての祝日となっているが、あの第十八回オリンピック東京大会の開会式である。この警備は、機動隊の長い歴史の中でも、さわやかな思い出として、今もなお語り継がれている。

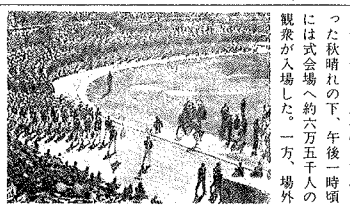
さて、このオリンピック東京大会は、十月十日から二十四日までの間、東京都ほか四県にわたって開催され、都内では国立競技場をはじめ十八会場と甲州街道八王子自転車ロードレースコースで計九十四ヵ国、七千四百五十三名の選手役員が参加して競技が行なわれ、観衆は六百九十九万人にのぼり、名実ともに当時としては史上最大のスポーツの祭典となった。

この開会にさかのぼる三十五年から警視庁では、オリンピック東京大会準備促進委員会を設置し、着々と警備体制の整備を図った。警備計画は、三十七年第一次試案、第二次試案を作成し、検討を重ねた。翌三十八年の毎日マラソン、国際スポーツ大会、自転車競技のリハーサルなどの警備結果について仔細に検討を加え、三十九年一月、部隊編成と担当区域についての計画案を策定し、同年六月、警備対策計画を各部署に通達した。

このように入念な準備計画のうちに、いよいよ東京大会はスタートした。

大会の期間中、数々の競技に対して警備部隊も懸命に警備活動を続け、大会の成功に寄与したのであるが、そのハイライトは、なんといっても開会式であった。

十月十日、底抜けに澄みきった秋晴れの下、午後一時頃には式会場へ約六万五千人の観衆が入場した。一方、場外に集まった観衆は、この頃をピークにして約八万人に達し、ほとんど飽和状態を呈したため、安全確保に入場券を持たない観衆を警備部隊が青山通りと新宿御苑に分断誘導した。



式の成功の裏には、絵画館前の統括指導本部を頂にした各部隊の活躍を忘れることはできない。

大会期間中には各会場警備部隊へ、公安、刑事、防犯の各部私服員も加わり、一般犯罪の予防検挙にあたったほか、制服部隊、機動隊員等による諸警備が続けられた。

このオリンピック大会を通じ、隊員がそれぞれの分野に活躍したことにより、諸般の対策がきわめて円滑に推進され、日本の警察の威信を全世界に高めたことは、大会の成功とともに、大いに誇るべきこととして忘れることはできない。

会員と隊員のひろば

女王陛下と後姿

調布市　昆　伸行

五月一〇日、午前八時。甲州街道は、空前のゼネストでまったくのマヒ状態。車の長蛇の列が、調布付近から延々と新宿まで続いていた。

わずか一〇〇メートルを一〇分間もかけて進むノロノロ運転に、筆者も少々グロッキー気味。交通状況を刻々と知らせるカーラジオの音も、何か空々しくさえ聞こえた。

と、突然、後方からけたたましくサイレンの音が鳴り響く。ふり返ると、第七機動隊と書いた隊員輸送車が次々と通り過ぎていった。

横にいたオープンカーの若者たちは――ちえっ、いい気なもんだぜ。機動隊は楽だよな。などと話し合っている。

正直、車が少しも進まないのにいらいらしていた筆者も、その若者たちに同調したわけではないが、渋滞をすいすいとスリ抜けてゆく機動隊の車をうらやむ気持ちにもなったのである。

そして二時間後、ようやく都心にある会社に到着したが、ストの影響で出社した社員は約半分。これでは仕事にならぬと、女子事務員を誘って午後からお堀端の散歩としゃれこんだが、三宅坂付近にくると、妙に機動隊の車が目についた。

――そうか、今日はエリザベス女王のパレードがあるんだ。

なるほど、機動隊車が急いだわけだと、うかつにもそこで合点した次第だが、沿道にはすでにポツリポツリと人が集まり、機動隊員はその整理に忙しく動き回っていた。

女子事務員の強い要望もあって、二人、人ごみの中でパレードの来るのを待っていたが、ふと前を見ると、先ほどまで立っていた機動隊員の姿が消えている。あれっと思い、下の方を見ると、機動隊員は金モールの礼装を着けた警察官のもっと手前で、我々の方を向き、さらに中腰になって警備体制に入っている。

筆者はこの姿を見て軽いショックを受けた。中腰になっているのは、まぎれもなく我々がレードをよく見えるようにするための配慮であろう。

おそらく、われわれがこの付近に来る数時間も前から、若い機動隊員たちは警備をしていたはずだ。群衆の平常身しかも見えないのでは警備の難しさもさだめし倍加するだろうし、それに女王の姿を見たい気持だってあるだろう。

筆者は中腰・後向きの隊員たちに同情の念を感えた。と同時に、朝方の機動隊車に対する感情を恥じずにはいられなかった。

やがて、白バイを先頭にキャデラックのオープンカーに乗ったエリザベス女王が、満面に笑みをうかべ、沿道の市民の歓迎にこたえて、ゆっくりと通り過ぎていった。

機動隊の皆さん、あなたたちの姿は、きっと女王の目にもうつったはず。心の底で深く感謝していたに違いない。

帰り道、連れの女性に朝からの出来事を聞かせたら、えらく感動した様子で、

――機動隊のイメージ、断然変わっちゃったわ。と話してくれた。

このわずか十五、六分のパレードで、機動隊の理解者がまたひとり増えたことに、筆者はなぜかとてもうれしい気持になり、帰路を急いだのであった。

機動救助隊員として

第九機動隊第二中隊　新谷　清彦

巡査部長

都民から「レスキュー一一〇」の愛称で親しまれている警視庁機動救助隊、交通事故、火災、エレベーター事故、生き埋め事故等、身の危険にさらされている人々の救出を目的とする機動救助隊。今や機動隊の顔である機動救助隊の班長として、安全、確実、迅速な救出、二次災害の防止を目標に救出救護の向上を図り、自信のある現場活動が行なえるよう隊員ともどもきびしい訓練を積み重ねている現在であるが、私の過ぎし日、理想の姿を回想してみたいと思います。

〇月〇日、本日はわが第九機動隊第二中隊は当番日であり、私以下五名はレスキュー班の指定を受けた。

午前九時に就動し、中隊長に挨拶した後、レスキュー車に搭載されている装備資器材の異常の有無を点検し、いつでも出動できる態勢をととのえ訓練中、午前十一時、隊内マイクにより「九機レスキュー出動、場所、大塚署管内神田川、水死体が浮かんでいる。」との出動下命を受けた。

我々五名は、直ちにレスキュー車にとび乗り、ジャガーの旗をなびかせながらサイレンの音もけたたましく緊急で現場へ向った。到着後、直ちに隊員にそれぞれの任務分担を指示し、約七メートル岸下の水深八十センチの水面に浮んでいる水死体の引上作業を開始した。

三連はしごを伸張し、私以下三名が水面に降り、作成したつり担架で水死体を岸上に引上げた。この間約十分。やがて現場の野次馬三十名位がいたが、その中から「警視庁のレスキューはやることが早いなあ。たいしたものだ。」の声を耳にするとともに、大塚署の刑事課長から感謝の言葉をいただき帰隊の途についたが、この時のさわやかな気持ほど警察官であることに生きがいを感じる時はない。

なお、本事例については、機動救助隊本来の任務ではないが、レスキュー車には各種の資器材を装備しているため、また、隊員も各種の技術を修得しているために、特命を受けて出動したものである。

その後、午後六時〇分、板橋署管内において「折からの強風により、アパートの屋根の上に設置されている看板が、道路上に落下しそうになっており危険である。」との再度の出動下命を受け、これの落下防止の措置をとり帰隊し、一日が終った。

私が機動救助隊員を命ぜられたのは昨年の十月である。

昨年成要領、あらゆる場面を想定した救出要領等の基本訓練を一週間みっちり教え込まれた後、機動救助隊員になったのであるが、まだ日が浅く、また現場での救出活動の経験も少ないため、さらに訓練に訓練を重ね、都民のための機動救助隊員として、よりよい活躍ができるよう研鑽努力して行きたい。

特別寄稿　山岳遭難事故

北海道警察機動隊　笠原紘一

我々機動隊員の仕事も多種多様で、私の仕事の一分野に山岳遭難救助活動がある。有事に備え、我々隊員は「山」を知るため公私を通じ広い北海道の山々を利用し訓練に励んでいるが、過去にたずさわった事例を紹介したい。

下界ではもう師走の声がきかれる頃、山は厳冬である。

I県のKさんは非常に山が好きで暇をみては単身で山に登っているという。出張で北海道に来て仕事も終りI県に帰る予定であったが、休暇を利用して北海道の代表的なA岳に単身で登った。登山を開始したころは青々とした空でA岳の頂上もすぐ眼前に見えたという。夜遅く旅館の主人から地元警察署への連絡によると「A岳に登ったが下山時間をすぎても帰ってこない」というのである。もうそのころは登りはじめたときと天候は急変し悪化していた。我々救助隊は応援要請を受け直ちに出動し、現地の山小屋に向って出発した。

捜索隊員は次々に山小屋に集まり、レスキュー車は、ヘッドライトを照らし、サイレンを鳴らしながら、夜食後すぐ就寝するが寝静まった夜中に目をさますと、音をたて、うなりをあげている玄関の外で父親と弟は大声で山に向い救助の名前を幾度も幾度も叫び、兄の名前を幾度も幾度も叫び、元気でいてくれと神にすがっているかのようである。これを見ていたのは私一人であったが、思わず涙が出てもらい泣きをした。

「なんとか天気だけはよくなってもらいたい。」冬山で野宿しても風さえさえていればII三一四日はもつ、頑張っていてほしい。」と私自身神に祈るしかなかった。捜索隊員は朝も暗い三時頃から目をさまし天気はどうか、捜索可能かなど心配したかいもなく、一メートル先も見えない猛吹雪が続く。下界では想像を絶するような山の天気である。初冬では気圧の谷に入り一度山が荒れ狂うと一週間は二週間は手のつけられない猛吹雪が続く。しかし人間一人がこの吹雪の中にいるかと思うといてもたってもいられず自然の恐ろしさを感じさせないではいられない。天気のよい夏であれば頂上もすぐ眼前にあり、二時間足らずの道程のハイキングコースである。だが自然の掟はなまやさしいものではなかった。

三日目、四日目と同じ状態が続いた。捜索隊もあせりの色が見えはじめ、山岳会、その他地方の捜索隊の応援を得て百人近い大捜索隊を編成、わずか五〇〇メートル先の避難小屋の偵察に出かけた。積雪は二メートル以上をこえ、視界は吹雪のため二～三メートル、風は二〇～三〇メートルさらには突風が吹きつける。捜索隊が一列になり、ルート旗を五メートル間隔くらいで立てながら方角を定め前に進む。わずか十五分くらいで行くところを二時間以上をかけ、小屋にたどり着いたが空しくも小屋にはは誰一人として入った人はなかった。残念ながらKさんはまだ先の頂上の方にいるのである。まだ先を捜索隊は限定され、かんじんのKさんがたどった道程の足取りを想像しAのKさんの足取りを想像しA岳周辺の地形、天候、捜索人員などにより綿密な計画が立てられた。だがその計画もむなしく、吹雪はいっこうにやまず追い打ちをかけるかのようである。

連絡を受けたKさんの年老いた父親、弟は二日がかりでI県からかけつけた。父親は捜索隊に「なんとかして下さい」と言葉少なに話すが無情にも天候は回復しない。父親は気丈にも捜索隊員等の前で「息子がバカなことをしてしまいました。どうか私に免してかんべんして下さい。」と深々と頭をさげ何度も繰り返す。息子のことを思うといてもたってもいられないのであろう。

捜索一日目、二日目と吹雪のため捜索範囲は限定され、かんじんのKさんがたどった道程の足跡は消えてしまう。

K

はげまし

はげまし　第13号
発行日　昭和50年6月23日
発行所　機動隊員を励ます会
東京都中央区八重洲5―1―28
〒104　ミツヤビル3F
☎03(272)3848

岩手県警機動隊　われらがシンボル⑬

警察の象徴の旭日章の中心に描かれてあるのは、岩手県のマークである。県民の治安を守るために全力をつくすという意気ごみが感じられる。

創設27周年を迎えた警視庁機動隊

記念観閲式とパーティー開く

警視庁機動隊は、さる五月二十六日をもって創設二七周年を迎えた。これを記念して同日朝、神宮外苑絵画館前において記念パーティーがそれぞれ盛大に挙行された。二七年といえば永からぬ歴史であるが、その間に遭遇した無数の警備事件、災害救助その他幅広い面でのめざましい功績を通じて、機動隊の名は世界に喧伝されるに至っている。機動隊員を励ます会の会員もこの二七周年記念行事に招かれて参会したが、人員、組織、装備などあらゆる面における機動隊の年来の充実ぶりを眼前に見て強く印象づけられたのであった。

観閲式当日、会場に当てられた神宮外苑絵画館正面に国旗掲揚台と向い合って、観閲台が組まれ、その横にしつらえられた来賓席の一角にはとくに機動隊員を励ます会の会員のための席が設けられており、招きを受けた大内代表世話人をはじめ約十名の会員がここに列席して、観閲式の一部始終を見守った。

組織と力を印象づける威容

定刻午前七時、儀杖隊の栄誉礼に迎えられて観閲官（土田警視総監）臨場とともに開式宣言。総員起立、警視庁音楽隊の国歌吹奏につづいて、国旗掲揚台にするすると日昇旗がひるがえる。

ついで、観閲官への人員報告、オープンカーによる部隊査閲と式はとどこおりなく進行し、当日のハイライトともいうべき分列行進に移った。

警視庁音楽隊の吹奏するマーチに乗って、徒歩部隊（婦人警官部隊、表敬部隊、特殊部隊、雑踏部隊、治安部隊など機動隊の精鋭が堂々の分列行進、さらにレスキュー部隊、レインジャー部隊、大震災対策部隊、爆弾対策部隊、車両部隊と隊列はつづく。

当日列席した当会会員にとって、それは見守るうちにおのずと身のひきしまるような光景であった。また、つぎつぎと眼前を通過する隊の編成には、雑踏整理といった日常の警備から治安維持、災害対策、爆弾対策に至るまで、およそ考えられるあらゆる事変に対処でき得る機動隊の組織力の充実がうかがわれ、まことに心強いかぎりの威容であった。

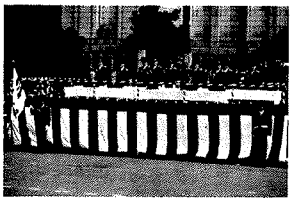
その後、式は観閲官訓示、阿部東京都公安委員長あいさつ、全隊員による出動の歌合唱、国旗降納、儀杖隊栄誉礼とつづき、観閲官退場をもって終了した。

交歓　深む　励ます者と励まされる者

当日夕刻からは、半蔵門会館に機動隊関係者を集めての記念パーティー。これにも招かれて当会から大内代表世話人以下数名の会員が列席した。

菊岡警視庁警備第一課長の司会により、まず村上警備部長があいさつ、ついで来賓祝辞として、土田警視総監のスピーチのあと、当会を代表して大内代表世話人が指名され、わずか三百五十名の会員をもってスタートした機動隊員を励ます会が一年余にして四千五百名もの会に発展、各地に支部も結成されるなど全国的な市民運動としての大きな成長ぶりを披露、「微力ながら少しでも皆様の心の支えとなれるよう、ありがとう、ご苦労さまといい合っていこう」と結んで、警視庁関係者、歴代の機動隊長、現職の機動隊長、隊員など満場の参会者から感謝の拍手を浴びた。

このあと、会はさまざまな余興などもまじえてリラックスしたふんいきとなり、参会した当会会員は各所で機動隊員らと歓談、励ます者と励まされる者の交歓を深めたのであった。



今月のことば

いまこそ〝初心〟にかえれ

初夏を感じさせる宵。築地のさるところにて、斉藤英四郎氏が経済同友会副代表幹事に就任したことについての励ます集いがもたれた。

集った人々は、財界でも著名なA氏、B氏、C氏、D氏らをはじめとするそうたるメンバーであった。かくいう筆者が、幹事の役割をしていた――。

宴もなかばになった頃。C氏が筆者の名を名ざしにして「――あなたとは、かなり長いつきあいになるが、いままで、あんまりいいことをしてきたと思っていない……。しかし、去年、あなたが世話人になって催した大内俊司さんが、警視総監賞を受賞したときの激励パーティーは、たいへんよかったナ！……」と、発言したのであった。

〝毒舌家〟で通っているC氏の突然の言葉だけに、十数人の出席者は、グラスをおいてきいたのであった。

斉藤氏は「――その通りで、大内君は、実にいいことをしてくれた。私も、よろこんで発起人の一人となったが、こんなに長い間、もくもくと、機動隊員を励ます仕事をしてくれていたことを知って、あらためて、大内君を尊敬したのですよ……」と云った。A氏も、同様の賛辞をおくった。筆者も、会員の一人として、ほのぼのとした気持になるのであった。

おそらく、本会の会員は、いろんな〝義理〟から、さいしょは、入会したのにちがいない。目下の、不況下では、おそらく、部下たちに、経費節減を〝厳命〟している立場であってみれば、本会の会費の〝額〟はともかくとして、チェックの対象になるにちがいない。当然のことである。しかし、自分の交際費はゼロにしても、本会の〝会費〟だけは、なんにも優先して、振り込みをさせている筈である。

はじめは、〝義理〟で入会しても、若くてまじめな機動隊員をこの眼でみ、いくらかでも、殉職した隊員の遺族の激励の一助になっていることを思うと、「ああ、よかったナ！」と清らかなよろこびにもえている筈である。

そして、さらには、そのためにも、自分の会社をいい会社にしよう、という意欲にかられている筈である。

いつか、筆者は、この欄で、本会は、名を求め利を求めず、〝陰徳をつむ集団に〟と書いたことがあった。かなりの反響もあったようだ。

――代償を求めたときには、すでに〝徳〟ではなくなってしまうからだ。〝取引き〟になってしまうからだ。〝取引き〟は商売だけで十分である。本会は、どこまでも、いつまでも純すいであってほしい。

都市センターホールで、会歌の発表会があったとき、筆者も出席した。実は、あの藤山一郎氏指揮の歌をききながら、思わず、目頭が熱くなった。オーバーな表現かも知れないが、本会がつづくかぎり、この祖国日本は大丈夫だと思った。そのためにも、この運動の輪を、より多く日本国民の間にひろめていくことである。

私たちは、そのためにも〝初心〟を忘れてはならない。

50年度会費未納の方へのお願い

昭和四十九年十二月末日までに入会された方で、新年度（昭和五十年度＝昭和五十年四月一日より）会費未納の方は、左記要領にて早急にお手続き下さいますようお願い申し上げます。

記

1納入方法　同封の振込用紙二枚のうち、いずれか便利な方の銀行のものをご使用いただき、お振込み下さい。なお、すでに納入ずみの方には振込用紙は同封いたしません。

2納入金額　左記金額のうち、あなたが該当する額をご納入下さい。

●法人会員＝六万円
●特別個人会員＝二万二千円
●一般個人会員＝三千円

3会員番号記入のお願い

お振込みの際、振込用紙所定の個所に、必らずあなたの会員番号をご記入下さい。あなたの会員番号は、この新聞の帯封の宛名の下に印刷してあります。

★　★　★

名古屋支部発会の気運高まる

七月中にも支部発会式の運びへ

当会では、昨年十二月には大阪支部、今年三月には福岡支部と、地区会員数五〇〇名達成を区切りに、つぎつぎと支部発会式を開催してきたが、名古屋地区においても着々と会員数が増加しつつあり、地区会員五〇〇名の目途も時間の問題となった。

すでに支部世話人として、松本三良氏につづいて、伊藤稔、加藤勤、金田高昭、加納保成、川村政雄、滝上俊一、永井健雄、長坂迅治、渡辺省三の各氏も名を連ね、名古屋支部発会に向って気運が盛り上っており、七月中旬にも発会式開催の予定で、目下準備をすすめている。

機動隊物語(12)

夜空を焼く火柱

宝組倉庫爆発事故警備

昼間の喧騒な東京も夜のとばりが降りると、たちまち静かな眠れる都会へと姿をかえる。

そんな東京の夏の夜空に、大音響とともに真赤な火柱がたち昇った。昭和三十九年七月十四日午後十時の出来事である。

十時過ぎ「大井競馬場付近で火災」の第一報が隊員達に告げられると、すぐさま輸送車を駆って出動に移った。現場までの道々、隊員達の胸には、「また火事か、たいしたことはないだろう」という軽い気持があったのだが、いざ現場に到着してみると、空を覆うような黒煙と真赤な火柱が夜空高く舞い上り、時々聞こえてくる爆発音に、一瞬にして隊員隊の心には異様な緊張感がみなぎった。

火災の発生地点は、大井競馬場と鮫州自動車試験場の間の埋立地に建てられた倉庫地帯で、高速一号線の下、海岸ぎわにあるため民家は少ないが、倉庫が油脂類の貯蔵庫のため火勢からして相当の爆発事故であり、被害はさらに拡大する危険性があった。

その上、現在火の手が上っている宝組倉庫は、ロケットの燃料にもなる硝化綿やラッカー、シンナー等の爆発物が格納されており、それが二十棟軒を並べていた。

このような状況の中で、まずやじ馬や住民の避難誘導だと、全員分隊単位で迅速に行動し、火勢で熱くて近よれないほどの現場付近から整理にあたった。

やじ馬の中には、真夏の夜とあって裸の者もいれば、相当酔っている者もいたが、これを強力に規制整備を行なった。ちょうど現場から二百メートルほど群衆を整理した午後十時十五分頃、突然、大爆発とともに空高く八十メートルの火柱が上り、半径百メートルにわたって火の玉、油の雨、木片等が飛び散った。

群衆は、この大爆発に恐れをなし、靴、下駄等をぬぎ捨て、車やオートバイを放置してわれ先に逃げ去った。

やじ馬を整理した地点に仮設された消防本部がこの爆発ですっ飛ぶと同時に、爆発前の火勢が落ちたため倉庫のすぐ近くで消火活動に入ろうとしていた消防士十九名が殉職するという大惨事となった。

しかし、もし群衆の整理があと十分遅れていたら……。

その後も隊員達は整理線の確保、交通整理と全力を尽くす一方、全機動隊は、所轄隣接署や関係機関と協力し、交通規制、避難誘導、救護等犠牲の拡大を防止し、また、広報活動を活発に行なって、住民の不安除去に努めたのである。

火は明け方までくすぶり続けたが夏の太陽がのぞく頃、ようやくその勢いは静まった。

警視庁第七機動隊新庁舎落成す

好天に恵まれた五月二十七日、阿部賢一東京都公安委員長をはじめ土田国保警視総監、槇野　勇前警視総監ら多数の来賓・関係者参集のもとに、警視庁第七機動隊の新庁舎落成式が行なわれた。

なお、当会からも伊藤達也氏が出席し、祝詞を述べた。

落成祝う二〇〇名の盛宴

式の開会は午前十時三十分。その定刻より早目に来場した来賓の方々を接待係の隊員が新庁舎の各部屋を案内していたが、とりわけ警視庁の中で随一といわれる二七〇畳敷きの道場が人目をそばだてた。

定刻の十時三十分。二階の総合教場に参会者が集合すると津村博道副隊長が開会の辞を述べ、続いて全員で国歌斉唱。

阿部賢一東京都公安委員長、土田国保警視総監らが次々と登壇しあいさつをした。ついで綾田文義副総監の音頭で乾杯、懇親会に入った。

この合間に、下稲葉耕吉警察庁長官官房長、岡崎忠郎建設省関東地方建設局長、調布市長代理、当会の伊藤達也氏らがそれぞれ祝辞を述べ、和やかな宴をいっそう盛り上げた。

こうしておよそ一時間あまりの落成式も終焉に近づき、柴田　典隊長が謝辞を述べ、堀口隆二第八方面本部長が、万歳三唱の音頭をとって閉会となった。

若獅子の夢実る

新庁舎の裏側に武蔵野のせせらぎが流れる。ごく最近までその澄みきった水の流れが隊員の心を和らげていた。しかし、今度の新庁舎落成によって隊員の気持もすがすがしくなった。とは隊員自らが語るところである。

新築なった庁舎は、延べ約六、四〇〇平方メートルあり、給食設備能力は一度に三〇〇名分が可能であるという。また、新庁舎東側壁面には登はん施設が、さらに庁庭東南隅には鉄骨の近代的レンジャー塔が設置され、レンジャー・レスキュー訓練ができるようになっている。こうした施設も地理的に三多摩地域を預る第七機動隊なればこその感が強い。

最後に隊員が新庁舎完成を機に、いちだんと結束を強めなみなみならぬ決意を披瀝した誓いのことばをご紹介しよう。

「憧れの近代的庁舎完成、この感激、この喜びを胸に秘め、前進することを誓う」

隊のプロフィル

S.44.1.10.　第一機動隊の一角に創設
その後、調布市小島町に移転
S.44.12.23.　調布市上石原にプレハブ庁舎完成、移転
S.48.10.29.　同所に新庁舎建設工事着工
S.50.3.26.　同竣工
S.50.4.8.　新舎庁にて業務開始

機動隊員を励ます会に感謝

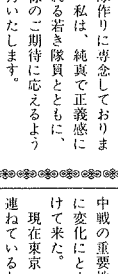
千葉県警察本部長　赤木恭二

機動隊員と同じ年代の若者から、罵声とともに、雨、あられの如く投石されたり、火炎びんを投げつけられても、ぐっと歯を食いしばり、一言の不平も言わず耐え忍び、あるいは、寒風肌を刺すなかで、灼熱の真夏の太陽の下で、昼夜をわかたず、若き情熱と職務感に徹して真剣に活躍している機動隊員の勇姿を、私は長い間まのあたりに見てきて、心から感動を覚え、真の機動隊員の姿を、一人でも多くの市民の方に理解していただけたら、どんなにか彼等の励ましになることと常日頃から思っておりました。

そんな折に、本会が全国機動隊員の慰問を兼ねて、千葉県機動隊員の表彰式を行なわれたことは、誠に有難く感謝に堪えないところであります。

千葉県機動隊は、昭和二十七年に発足以来、第一次、第二次安保斗争をはじめ数多くの不法事案の取締りに挺身し、また、一昨年行なわれた「若潮国体」においては、集団警備力の威力を十分に発揮し、特に、ここ十年近い年月は、主として新東京国際空港建設に伴う集団暴力事案の取締りに従事してまいりました。

この取締りに際し、不幸にして神奈川県警機動隊員三名の殉職者を出したほか、多数の負傷者を出すなど、厳しく困難な任務を、機動隊員としての誇りと自信をもって、血と汗と涙で遂行してまいったのであります。



県内におきましては、今後も爆弾事件、内ゲバ事件などのほか、新東京国際空港の開港に伴う不法事案の多数が予想されますが、隊員は、日夜訓練に訓練を重ね、強じんな体力と旺盛な気力を養い、これらの事案に対処するため、精強な機動隊作りに専念しております。私は、純真で正義感に溢れる若き隊員とともに、皆様のご期待に応えるよう努力いたします。

今後とも身命を賭して活動する若き隊員に暖かい思いやりと限りないご理解を賜わり、ご支援下さるようお願いするとともに、本会ならびに会員皆様のご発展を祈念いたします。

私は、常に部下職員に対し、「安全で平穏な県民生活の確保」こそ警察の使命であることを強調し、「忠、恕」の精神を心の支えとして、市民に接し、市民から親しまれ、愛され、市民とともにある警察を確立するよう要望しておりますが、特に隊員に対しては、強く、明るく、正しくそして親切な、いわば現代の「桃太郎」隊員としてのなることを期待しております。

県内におきましては、今後とも爆弾事件、内ゲバ事件などのほか、新東京国際空港の開港に伴う不法事案の多数が予想されますが、隊員は、日夜訓練に訓練を重ね、強じんな体力と旺盛な気力を養い、これらの事案に対処するため、精強な機動隊作りに専念しております。私は、純真で正義感に溢れる若き隊員とともに、皆様のご期待に応えるよう努力いたします。

今後とも身命を賭して活動する若き隊員に暖かい思いやりと限りないご理解を賜わり、ご支援下さるようお願いするとともに、本会ならびに会員皆様のご発展を祈念いたします。

会員と隊員のひろば

白鳥のように

東京・X

先日、ニューヨークからアメリカの友人が初めて日本を訪ねて来た。羽田空港に出迎えて帝国ホテルまで送ったが、途中、彼は物珍らしげに車の外に目を走らせていたが、急ぎもせずにポケットから地図を取り出した。東京都の案内図である。

「ひとりで東京見物をしてみたいが、安全なところを、この地図に書き込んでくれ」

真剣な面持ちでいう彼の言葉に私は一瞬どういう意味かと返事につまった。

「身の危険を感じないところだよ」

「冗談じゃない。東京は何処を歩いても安全さ」

「世界最大の大都会で何処を歩いても心配ないって！本当かい」

彼は驚き、かつ、感心しながらニューヨークの事情を話したのである。

街を歩く時には十ドル紙幣を一枚胸のポケットに常時用意しておくのが常識という。街には麻薬患者が多勢いるので、万一、たかられると急いで胸ポケットから十ドルを渡して許してもらう。この時、内ポケットから財布など取出そうものなら財布ごと奪われる。悪くすると、隠し持ったピストルを取り出そうとしていると誤解され逆に殺された例もある。それでいて犯人は仲々逮捕されない。まして、頻発する窃盗、空巣、かっぱらいは警察に届出ても、事故証明を発行するから保険で保証してもらえば、と積極的な犯人捜査は望めぬという。だから、自分で身を護ることが一番大切で、女性はハンドバッグに香水用の小型スプレーを忍ばせ持ち歩く。スプレーには香水ならぬ目つぶし用の薬水を入れた護身用品である。それにこれまた護身用の呼子笛がよく売れているという。

そんな話のあれこれを聞いて、今度は逆に私が驚かされたのだが、治安の確立された日本の有難さが、つくづく思われている。

先般、来日されたエリザベス女王の観迎は五月の爽やかな気候のように見事にはたされたが、その陰に不眠不休の警備に当たられた多くの警官がおられた。日本全国を震憾させた爆弾犯人も見事に検挙された。国民の間には警察への信頼は一層高まってきているにちがいない。

平和のシンボルの様な悠々たる美しい白鳥も水面下でせわしく動かす水かきの足がある。平和な生活を支える警察の陰のご苦労こそそれである。

一週間後、アメリカの友人は日本を去って行ったが、最後に「深夜でも女性がひとりで歩いている日本の治安が羨やましい」と言った。

治安になれ治安の有難さを忘れ勝ちな私達だが、あらためて、この言葉をかみしめたいものである。

二・四三メートルの空中戦

警視庁特科車両隊　水上茂

「二・四三メートル」、これは実業団バレーボールのネットの高さである。一般に日本人の男性の平均身長が一七二センチとすると、手をのばしても、二〇センチはあいている計算になる。

我々特科車両隊員で構成する警視庁バレーボール部の平均身長は、一八〇センチであるから、手をいっぱいのばしても一〇センチくらいはあいていることになる。その二・四三メートルのネット上で、スパイカーは相手ブロックと交戦するのであるから、まさに空中戦になるわけである。

そのかけひき、気力、力量の差により、自軍コートにボールが落ちるか、相手コートにスパイクが炸裂するかが明暗の別れ目なので、バレーボールを志した者が一様に力を入れるのがジャンプ力の鍛練なのである。

勿論、レシーブ、サーブ、その他に重要な技術はあるが、強いチームは一九〇センチクラスの長身者をそろえているのをみても、いかに高いところで勝負をすると有利であるかということは言うまでもない。

我々警視庁バレーボール部も、発足して来た四年目であるが、数々の試合の中で、空中戦の重要性を痛感し、徐々に変化にとんだ戦術を身に付けて来た。

現在東京一部リーグに名を連ねているわけであるが、六強チームの中には一九〇センチクラスの大砲を備えているチームもある。その中にあってわがチームの一番の長身者は一八四センチなので、要るに「チビ」なチームなのである。

そのチビチームが高度、威力ある空中戦で勝つには、重爆撃機に立ち向う小型戦闘機のように、きびきびと、すばやく、また変化に富んだ攻撃を行なう空中戦において勝利をおさめることが勝利への秘訣である。

われわれは、かつて千葉県下において、日本リーグの日本鋼管チームと対戦したことがあったが、沼倉、三森、といった世界的に有名な選手を相手に変化に富んだ攻撃で譲弄させたことがあった。これは、重爆撃機に立ち向う零戦といった空中戦さながらのかけひきであった。結果として、破れはしたものの、ネット上のデットヒートは、バレーボール協会も絶賛するほどの戦いぶりであった。

このように、我々バレーボール部は、現在日本リーグ、実業団リーグを射程圏内に入れ日夜練習に励んでいる。発足して四年目にしてここまでこぎつけることが出来たのは素質に恵まれた選手がいたこともあるが、より以上に、上司、隊員諸兄の温いバックアップのもとに、練習に深い理解をいただいたお陰だと深く感謝している。

これからも現状に甘んじることなく、血と汗を流し、空中戦の技術を磨き、気力を増々充実させ、機動隊員の根性マナーのすばらしさを全国の人びとに見ていただくため頑張りますので、今後ともよろしく御声援の程をお願い致します。

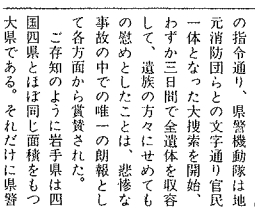
大阪府警発足二〇周年記念式典開く

今年で発足二〇周年を迎えた大阪府警察では、来たる七月一日午前一〇時より、大阪商工会議所七階大ホールに関係者多数を集めて二〇周年記念式典を開催する。なお機動隊員を始め会からも大阪支部世話人が招かれて列席する。

当会に礼状が

去る五月七日に初めてわが国の土を踏んだ英国女王エリザベス二世陛下の警護警備に苦労と功績に対し、当会より警視庁所属の十個隊および大機動隊二個隊を慰問、後日、その礼状が当会宛てに届いているのでここに紹介しよう。

なかでも、佐藤益雄警視庁特科車両隊長より寄せられた礼状によると、炉過器およびウォータークーラーを設置、隊員一同のますますの団結と努力との礎としたい、とのことであった。また、大阪府警機動隊二個隊を代表して雨宮和雄大阪府警本部長より同様な礼状が届いている。



告　示

赤木　勉（会員番号＝は三三〇八六）は、当会の会員証を悪用し、会の精神を著しく汚す行為があったことが判明いたしましたので、昭和五十年六月十六日をもって、同人を当会から除名いたしました。

この事実に鑑み、当会では当分の間、会員証の発行を全面的に停止することといたしました。なお、すでに会員証をお持ちの会員各位には、かりそめにも会員証の悪用、会員としての地位の利用などの行為が絶対にないよう十分にご注意下さい。場合によって、除名にすることもあります。

機動隊めぐり(13)
岩手県警機動隊

今回の訪問先は、みちのく岩手県警機動隊。岩手山と連なる奥羽山脈の頂きには残雪こそあったが、中腹はすでに青山へと衣がえし、北国にも初夏の訪れを知らせていた。

四方色濃い緑に囲まれた隊舎を訪れると、満面に笑みを浮かべて迎えてくださったのが高橋松夫隊長。

今年三月に着任する前は、少年補導官をなさっていたとかで、なるほど口調や物腰に柔和さが感じられる。

岩手県警機動隊長としては十二代目にあたるが、隊の発足も昭和二十三年と古い。

その間幾多の困難な出動を要請されたが、今なお隊員の間で語り継がれているのが昭和四十六年七月三十日、盛岡市以西上空で勃発した自衛隊機と全日空機の接触墜落事故である。

全日空機の乗客は全員死亡、墜落現場が山間部であったため遺体収容は相当の困難が予想されたが、県警本部の「何よりも遺体収容を優先すべし」の指令通り、県警機動隊は地元消防団らとの文字通り官民一体となった大捜索を開始、わずか三日間で全遺体を収容して、遺族の方々にせめての慰めとしたことは、悲惨な事故の中での唯一の朗報として各方面から賞賛された。

ご存知のように岩手県は四国四県とほぼ同じ面積をもつ大県である。それだけに県警機動隊の警備エリアもめっぽう広い。さらに、東に陸中海岸と北上山脈、西に豪雪で知られる奥羽山脈、中央には大河北上川を控えているため、山の遭難や水難事故などの救助活動も大きなウェートを占めている。

それだけに隊員の日常訓練も水泳やスキーは必修科目。とくに冬期間は、岩手山や八幡平での山岳遭難救助や、豪雪地帯の西和賀に出動し、三メートルもの積雪に埋もれた孤立部落を巡回したり、小学校の屋根の雪降ろしなどにも活躍している。

大都市の機動隊とは違い、大規模なデモ規制や国賓・要人の警衛警護といった、直接市民の目にふれる出動の機会は少ないが、しかし、市民の日常生活に、より密着したところで活動している点が地方の機動隊の特長ともいえよう。

スポーツも、県警や管区内での対抗試合が少ないため、もっぱら市民相手の朝野球が盛んで、出勤前の早朝五時頃から白球を追いかけているが、現在連戦連勝の無敵ぶりとか。

最後に高橋隊長姿勢を正してこうおっしゃった。

――県民のために粉骨砕心努力するつもりです。これが私たちの任務なのですから。

岩手県の雄大な自然と、県民の暖かい声援に育まれた岩手県警機動隊は、今年、二十七周年を迎えようとしている。

神奈川県警
第二機動隊

われらがシンボル⑭

中央の「2」の数字は第2機動隊を表わす。左右の羽根は荒鷲をあしらっており、勇壮に飛びたち、正義を貫き、悪に立ち向かう意味である。

はげまし

はげまし　第14号
発行日　昭和50年7月23日
発行所　機動隊員を励ます会
東京都中央区八重洲5―1―28
〒104　ミツヤビル3F
☎03(272)3848

スワッ！直下型地震発生

震災警備総合訓練実施す

〝川崎市を中心に直下型地震の危機〟この話題は、最近のマスコミをにぎわし、その可能性の有無についてさかんに論争されたが、どうやらこれは杞憂に終ったようである。しかし、危険がないとわかつたいまも、地元川崎市内では、避難袋、避難はしご、防空ずきん保存用食糧等が飛ぶように売れているという。

このような状況下に、去る七月十二日(土)警視庁では、多摩川・六郷橋を中心として、大がかりな震災警備総合訓練を行ない、住民の不安を一掃するとともに、迅速かつ適正な警察活動の実をまのあたりにみせたのである。

また、この訓練には、文字通り〝励ます〟ために、当会より会員達が多数つめかけ、訓練ひとつひとつに声援を送った。

この震災総合訓練は、京浜地区に中規模程度の直下型地震が発生した場合を想定して行なわれたもので、土田警視総監を査閲官、村上警備部長を統裁官として参集訓練、重要防護対象等警備訓練、避難誘導訓練、および実技訓練を第一京浜国道から多摩川河原六郷橋付近に至る広範な区域において近隣住民の協力のもとに大がかりに行なわれた。

当初予定では、機動隊、特科車両隊をはじめとして、警視庁本部、方面本部、管内警察署等、警察関係一万五、〇〇〇余名、近隣住民三〇〇名の参加を予定していたが、多数住民から参加希望があり、その数は、五五〇名にものぼった。

〈住民を安全地帯へ誘導〉

この訓練は、前週七月五日に行なわれる予定であったが、折り悪く豪雨に見舞われ順延されたもの。

定刻六時半、誘導避難訓練が、すでに六時頃より参集していた地元住民の参画を得てはじまった。

まず第一京浜国道一画の信号機を止め、通行車両をストップさせるとともに、これを左側に停車、この間緊急自動車がサイレンの音もあわただしく走り抜ける。

一方、被災者を六郷橋方向に道路の中央を通って避難させ、六郷神社境内に安全に誘導を終えた。避難した住民達には、ここで訓練参加証が与えられ、三角巾の使用方法等の実演が行なわれた。

この三〇分間にわたる訓練の間、現場近くでは、広報車ヘリコプター等により震災訓練中であるとの広報活動が続けられ、通行車、住民等に協力の要請を行なうとともに、婦人警官が通行車、通行人等にアンケート調査を行なったのである。

〈思わず上がる感嘆の声〉

実技訓練の行なわれる多摩川堤・六郷橋付近には、訓練のはじまる七時半頃から近隣住民、報道陣がつめかけ土手の上に下に鈴なりとなった。

六郷橋に励ます会の会員達がかかげた「機動隊の皆様ごくろうさま」の垂れ幕の見守る中、査閲官・土田警視総監と統裁官・村上警備部長を乗せたヘリコプターが到着。訓練がはじまる。

数ある訓練の中でもハイライトとなったのは、欠損橋梁により残されている被災者に対し網ばしご、エアーマットを使用しての救助作業。

隊員達の扮する仮想被災者四〇名が網ばしご、ロープ、カラビナ等を用いて六郷橋より降下、そしてエアーマット上にも飛び降りる。この時ばかりは、土手に陣取る見物人の間から思わず声が出るほど果敢なものであった。

そのほか、緊急用電源装置を投光器に接続しての点灯訓練、ろ過機を搬送、器材を設定し、泥水を吸み上げ、ろ過の訓練、倒壊家屋、車両からの救出・搬送訓練等々、雄壮でかつ緻密な訓練がくり広げられ、見ている者の驚嘆の声をさそった。

また、報道関係者達の間からも〝全体にキビキビしており、まさに訓練されたものの機敏さだ〟と声が上り、評判の高い訓練であったといえよう。

最後に訓練に参加した全隊員達を前に、査閲官として一部始終を見守っていた土田警視総監はこう結んだ。

「地震の危機ということが、最近言われているが、諸君はこの一日だけでなく、たゆまない訓練に励んで欲しい。警察官の使命として市民を安全かつ確実に誘導し、秩序を守ることは言うまでもないが、この訓練をひとつのカテとして地震が万一発生した際には的確な行動と措置をとってもらいたい。これには、もちろん住民の方々の協力も必要だが、これら住民すなわち都民の期待と信頼に応えられるよう諸君の日夜にわたるたゆまない努力に期待する。」

今月のことば

ある日曜日の風景

さる日曜日、むすこ夫婦の住まいをたずねて行ったところ、つぎのような風景を見た。

おつむの半分白くなった婦人が、孫らしい一歳足らずの男の子を抱いて、四、五歳の少年たちが楽しく遊んでいるのを眺めている。そのうちに子どもたちは、かたわらの高い石のへいによじ登って遊びはじめた。

ところが、いちばん先に登りついて喜んでいた子が降りるだんになって、どうしても降りられなくなってしまった。べそをかきはじめて、孫を抱いている婦人におろしてくれと頼むのだが、婦人も一方の手に孫を抱え、片手ではどうすることもできないでいるところへ、たまたま年のころ二十四、五歳の主婦らしい女性が来あわせた。

すぐに男の子をだきおろすかと見ていると、その女性は「坊や、自分でおりなさい。前を見ておりないとだめ。はい、今度はうしろを向いて、座って、つぎにへいの縁を両手でしっかりにぎって、つぎに片足を下におろして、はいもう一方の足をおろして。そうそう、下をちょっと見なさい。心配ないでしょう。手を片方ずつはなして……」といった具合いに、まことにうまく自分自身力でおろさせてしまった。無事におりついた男の子が、おばちゃんどこの人？と聞くと、すぐそこよとだけ答えて立ち去った。

どこまでも自力でやり遂げるように忍耐強く指導したその姿は、世間でよく近頃の若い人はなどと批判がましくいわれているのと大違いで、本当に感心させられた。何でもないのどかな風景だが、私はそこに現代の若い人の頼もしい実像をまのあたりに見た思いで、これなら将来の日本は心配ないと感じたのであった。

孫を抱いた婦人も、「私の若い頃と違って、この頃の若い方々は、子どもに自分の力で何ごとをさせるのですね」と感心して話していた。

私たちが激励する機動隊員も、同じようなしっかりした考え方の若い人たちであり、だからこそ安心して日本の治安を託してやれないのである。

このような休日ののどかな市井の風景は、いまの日本では二の当たりまえのことのように見られるが、実は人が気にもしないほど日本は治安のいきとどいた国なのだ、ということを改めて考えさせられた。それがのどかであればあるほど、警察当局の日夜のご苦労のほどをしのび、いっそうの感謝の念を新たにした次第であった。

名古屋支部発会式開く

七月二十九日、名古屋市で

先号にて既報のように、当会名古屋支部発会の機運熟しかねてその準備をすすめてきたが、いよいよ来たる七月二十九日(火)午後三時より、名古屋駅前トヨタビル6階トヨタホールにて発会式および懇親パーティ―を開催する運びとなった。

当日は同地区会員に加え、愛知県警察ならびに機動隊関係者多数をお招きするほか、東京本部、大阪支部、福岡支部の各地区から世話人多数が参会する。

第一機動隊寮祭開く

さる七月十一日、警視庁第一機動隊の隊庭にて、恒例の寮祭がにぎにぎしく開催された。参加者は寮生約一六四名を中心に、ゲストとして近隣の会社、銀行などのOL約二〇〇名。平素は男ばかりの殺風景な隊庭も、この日ばかりは華やかなふんいきに包まれた。当会からも招かれて大内代表世話人をはじめ世話人および会員数名が激励参加。千代田隊長あいさつ、来賓の警視庁村上警備部長あいさつにつづいて大内代表世話人が立って日頃の隊員の労苦に謝意をこめてユーモアたっぷりにあいさつし、満場の拍手を浴びた。

このあと、隊庭中央に設けられたやぐらをめぐってのにぎやかな盆踊りに、隊員心づくしのおでんや焼鳥に舌づつみを打ちながらの歓談に、隊員と市民がひとつとなっての楽しいお祭りとなった。

機動隊物語(13)

血ぬられたキャンパス

早稲田大学紛争警備

早稲田大学創立八〇周年記念事業の一環として建設されることになった第二学生会館の管理運営権をめぐって端を発した大学当局と一部学生との紛争は、その後学費値上げが発表されるや、一般学生もその渦中に巻き込まれ、延々一五五日にも及ぶ長期のストライキや授業放棄、試験ボイコット、大学本部および各学部の占拠、バリケードの構築という形で展開された。

日韓闘争のヤマ場を越した昭和四十年十二月八日から反代々木系学生約三〇〇名が大学本部に侵入し、その出入口に机や椅子でバリケードを築き、全員同館一階ホールにすわり込み、ビケを張って占拠するという事態を皮切りとして、遂次闘争は拡大していった。

四十年十二月二十日、大学当局は、かねてからの懸案であった学費値上げ案を決定し、これを発表した。この決定に反代々木系、日共系とも態度を硬化させ、冬休みが明けて新学期が開始されると、両派の活動がにわかに活発となり、四十一年一月十一日、公開質問状を発表して学園ぐるみの闘争に発展させ、一月二十日から全学ストライキに突入した。

このような状態から、大学当局は、学期末試験は四月以降にすることを決定し、説明会を開いて学生の説得にあたったが、聞き入れるところとならず、不調に終った。

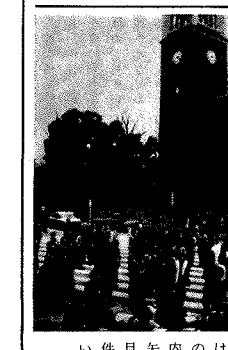
この間、国会稲門会も積極的に双方の調整に乗りだしたが、これも失敗に終った。

入学試験の期日も迫り、苦悩した大学当局は、二月十九日警察の出動を要請した。これに対し警視庁では、大学の自治的な措置とその推移を見守ってきたが、不法事犯が続出し、学生同志の流血事件も発生するに至ったので、二月二十一日、機動隊および方面機動隊を出動させ、不法占拠を行なっている学生を学外に排除した。しかし、警察部隊が学内から撤収すると再び学園は学生によって占拠された。

大学当局は、この事態を憂慮し、二十四日からの入学試験だけは確保したいとして、再び警察部隊の出動を要請した。この要請に基づき部隊は、二月二十二日、学内の建物を占拠している学生の排除を行ない、これに抵抗した学生を公務執行妨害等で計二〇三名を検挙、前回と合わせ計二〇七名の検挙を行なった。

二十四日から行なわれた入学試験は、妨害や混乱もなく終了することはできたが、学生の闘争はいぜんとして続き、期末試験は構内において実施することができず、一部は近くの高校を借用して行なわれ、とくに保善高校における分離試験では、無届けデモを行なってのの妨害が行なわれたが、これも排除、期末試験は、無事終了した。

この事件は、この後の一連の学内紛争の嚆矢として注目される事件だったといえよう。



特別企画

機動隊員と会員の座談会①

隊員と会員おおいに語る

去る七月一日（火）機動隊員と励ます会会員による座談会が催された。これは、隊員のナマの声を聞くことにより、機動隊員に対する新たな認識と理解を深め、さらに隊員の訴えたいこと、考えていることなどを本紙を通して広報する目的で企画されたものである。

座談会は午後六時から夕食をはさんではじめられたが、話が進むにつれて、談論風発、予定の時間を多少オーバーするなど、終始なごやかな雰囲気の中で行なわれた。

なお、この模様は今後三回にわたって本紙に連載する予定なので期待されたい。

司会　本日はご多忙の中をおいでくださいまして、ありがとうございます。私は本日の司会を務めさせていただきます高橋です。よろしくどうぞ。

さて、皆さますでにご存知とは思いますが、当会は、昨年の三月二十二日、大内俊司氏を代表世話人とする市民の自然な発意の盛り上りの中で誕生しました。そして今日までの間、政治・思想などを抜いた市民の善意の集まりとして、その輪を広げ、会員数も四、五〇〇名を数える大組織にまで発展しましたことは、皆さまの暖かいご支援のお陰であると感謝いたしております。

この間の当会の活動等については、機関紙「はげまし」によって、逐時紹介されていますが、会員の中から、機動隊員の方々をもっとよく知りたい、何かよい企画はないものかという要望が多数あり、その一環として、本日の座談会の運びとなった次第です。

ですから今日はリラックスした気持で、いわゆるフリートーキングでいろいろなお話をしていただきたいと思います。

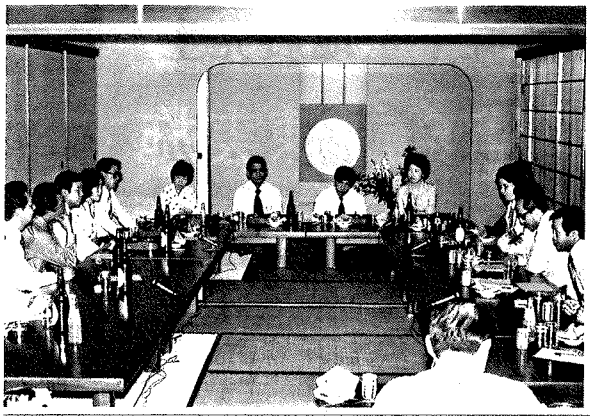
まずはじめに、出席の皆さん、それぞれ自己紹介をしていただきましょうか。

西本　隊員の中では私が一番年長者のようですので……（笑）

私は、第七機動隊で操車主任をしています西本警部補です。名前は篤弘と書いてかずひろと読みます。どうも、名前負けのようでして（笑）もっともちゃんと「かずひろ」と呼んでくれるのはうちの家内ぐらいのもんで（笑）大半はあつひろですね。機動隊は今年で三年を迎えますが、警察官としては古参で、この間警視庁勤続二〇年の表彰を受けました。

西本夫人　西本の家内で美智子と申します。

西本　これも名前負けです（笑）



木下　第三機動隊の木下充郎です。年をくってから警察に入ったものですから経歴はまだ四年余りで、いま一所懸命頑張っているところです。

木下夫人　私は周子と申します。よろしくお願いします。

岡本　第一機動隊の岡本久一です。警視庁に入りましたのは昭和四十七年で四月です。将棋や碁が趣味でして、勝負をかけることが好きです。

一場　第一機動隊で技術主任をやっています一場武英です。警視庁に入りまして今年で一〇年を迎えます。

奥沢　会員の奥沢明男です。会員でありながら勉強不足で機動隊についての知識はあまり持っておりません。この機会に認識を新たにしたいと思っています。

鈴木　会員の鈴木多賀子です。私、以前納涼大会やもちつき大会に二、三回機動隊を訪問したことがあるんですよ。三人の子供を持つ主婦でもあります。

伊藤　会員の伊藤宏です。今日は初めて機動隊員の方々とお話しできるということで、喜んで参上しました。

神田　会員の神田ゆかりです。いろいろ皆さんのお話を聞かせていただきたいと思っています。

出席者（敬称略）

西本　篤弘（警視庁第七機動隊）
西本美智子（西本夫人）
木下　充郎（警視庁第三機動隊）
木下　周子（木下夫人）
岡本　久一（警視庁第一機動隊）
一場　武英（警視庁第一機動隊）
奥沢　明男（会員・会社役員）
鈴木多賀子（会員・主婦）
伊藤　宏（会員・会社員）
神田ゆかり（会員・OL）
西田　鉄男（編集委員）
榎谷　周二（編集委員）
藤野　富蔵（編集委員）
司会　高橋　繁（編集委員）○

無事故一、〇〇〇日を達成

司会　ありがとうございました。ところで隊員の皆さんは実際にどのような仕事に携わっているのですか？

西本　操車という意味は、実際に車を操ることで、車種は皆さんよくご存知のバス型から、浅間山荘にも出動した旧陸軍の戦車みたいなものまであります。機動隊の場合は、このような特殊車両を目的地まで事故なく運ぶという大きな業務内容がありますので、結局車の専従運転担当ということで操車係があるわけですね。私は、その主任をやっておりまして、もう実際には運転せず、いわば安全運転管理者の補助役的な任務についています。手前みそになりますが、わが第七機動隊も、第三機動隊に続いて、先日無事故一、〇〇〇日を記録したばかりです。

奥沢　一般隊員の皆さんも、そのような特殊免許を持っているんですか。

西本　一般隊員は別ですが、実際にどのような仕事に携わっているのですか？

西本　道路交通法上からいえば、大型二種免許があれば運転できます。でも、ご存知のようにあの車は頑強にできていますので普通の乗用車とちょっと接触しただけでも、相手はへこんでしまう。ですから、操車実務三年以上を経験した者が初めて任せられるというのが実情です。

木下　私は一般中隊ですので、主に大使館とか総理私邸、また要人の警護などにあたっています。これが四、五年前だったら過激暴徒集団のデモ警備がほとんどだったでしょうが……。

神田　警護の時は出動服ではなく普通の服装なんですか。

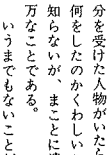
木下　そうですね。デモなどの警備出動とは別ですので、普通の所轄警察署と同じような制服で、拳銃も身につけます。

司会　よく大使館の門などに立っていますが、あの方たちは大体機動隊の方なわけですか。

木下　ほとんど機動隊ですがアメリカやソビエトなどの大きな大使館の場合は、所轄と一諸に勤務しています。

一場　私は技術係の主任をやっています。技術係を一口で説明するのは難しいんですが、そうですね、皆さんとなじみの深いレスキュー車、これは火災の現場とか、エレベーターに子供が入って途中で止まってしまったといった特殊な事故の場合に出動するグリーンの車なのですが、それに関する資料、エンジンカッターやチェーンソーなどの保守管理、それから爆弾事件に対処する遠隔操作の処理機車とか特殊な技術を要する資材について総括的に受けもつ係といえばおわかりいただけると思います。

岡本　私の場合は三小隊という警護小隊に属しています。警視庁の警護課を応援する仕事なのですが、それが場合、警視庁庁舎の警備を一八名でやっています。本家本元の警視庁の警備ができることは、大変光栄だと思っています。



不本意なマスコミのとらえ方

鈴木　機動隊と所轄警察とでは仕事の内容が違うのですか。

西本　原則的には隊組織で動く、つまり集団の力を最能率に発揮するために機動隊があるわけです。

もっとも、先ほど話があった大使館、官邸などの常駐警備や、これからシーズンとなる夏の防犯パトロールといった出動は、ある意味で交番的な勤務と合致します。

しかし、実際には機動隊の仕事はもっと広範囲で、たとえば私たちの隊は多摩地区が担当ですが、子供が川に溺れたり、ハイカーが遭難したりすると、ソレ行けッとレスキュー隊などが出動するわけです。

鈴木　私たちのかなり身近かなところでも活躍なさっているんですねェ。

西本　コマーシャルをするわけじゃないんですが、隊から二〇メートルばかり離れたところに今年の四月、小学校が開校したんです。そこで、子供の交通事故を絶対に起こすまいと、隊員が自発的に交通整理を買ってでて、毎日の登下校時に実行しているんです。

私いつも不本意に感じているんですが、マスコミ、特に新聞などは〝鬼の機動隊〟〝大日本機動隊〟といった見方で機動隊をとらえている。もちろん、この方がニュースバリューがあっていいんでしょうけど、機動隊即強い鬼というのがキャッチフレーズになっているみたいで心外ですね。

隊によっては、小学校から中学生までを対象にして、週に二回、少年柔剣道の指導をやっているところもあるんです。そういう地域住民に対するサービスなども、マスコミ扱ってくれたらなァと常日頃考えているんです。

鈴木　そうですね。そういう点は「はげまし」を見るとよくわかるんですけどね……（笑）

以下次号に続く

沖縄海洋博に応援部隊出発

「海――その望ましい未来」をテーマとした国家を上げての大事業、沖縄海洋博は、去る七月二十日から六ヵ月にわたるスタートを切ったが、これに先だって、七月十三日、警察庁警備局佐々警備課長を総指揮官とする警備応援部隊が、沖縄に向けて晴海埠頭を出発した。

部隊は警視庁機動隊五〇〇名、管区機動隊一、九〇〇名、計二、四〇〇名の混合編成で七月十五日に沖縄に到着、皇太子殿下ご夫妻の沖縄県ご訪問の警衛警護、開会式の警備を終えた後、七月二十一日に帰隊した。

なお、当会ではその重要任務の無事達成を願って、応援部隊を激励した。

会員と隊員のひろば

会の精神を汚すな！

東京・K生

本紙先号によると、何か不祥事を働いて本会から除名処分を受けた人物がいたらしい。何をしたのかくわしいことは知らないが、まことに遺憾千万なことである。

いうまでもないことだが、本会の精神は、日頃、治安の維持に身命を賭して報われることの少ない機動隊員の皆さんに、その労苦によって護られる側の市民としての立場から、感謝をこめてご苦労さまとねぎらい励ますことにつきるのであって、それ以外にいささかでも見返りを期待するような気持をもつことは許されない。まして、会員たる資格をおのれの利益を図る目的に利用したり、会員証を悪用したりするのはもってのほかの行為である。

「李下に冠を正さず」という。本会は警察関係者と交流するという性格の会であるだけにとりわけえりを正して、慎重に身を処してゆかなければならない。

大方の会員諸氏は、その趣旨に賛同し、純粋な気持から入会された方ばかりだろうと信ずる。例外的な不心得者が一人でもあれば、会員全体が甚しい迷惑をこうむることにもなる。このたびの不祥事を他山の石として、会員一人一人のいっそうの自粛を声を大にして呼びかけるべく、あえて一文を呈した次第である。

機動隊めぐり(14)

神奈川県警第二機動隊

神奈川県警第二機動隊を訪れたのは、関東地方に本格的な夏の到来を告げた、梅雨明けの七月中旬。春には見事な花を咲かせるという桜並木を通って庁舎の玄関に到着した。

訪問したのが、ちょうど昼頃であったため、川村晃隊長をはじめとする幹部昼食会に、記者、はからずも参加させていただき、のっけから食卓を囲んでのなごやかな取材となった。

しかし、テレビニュースが沖縄海洋博に反対する極左学生の不穏な動きを報ずると、全員がハシを置き、緊張した面もちで視線をテレビに移すなど、その片時も職務を忘れない態度には、いまさらながら感服させられた次第であった。

さて同機動隊は昭和四十五年四月、警察組織の改正によって、神奈川県警機動隊が、第一機と第二機に分割した時点をスタートとしているが、同県警機動隊としての二五年余におよぶ活躍が脈々と受継がれており、発足後五年という歴史の浅さは微塵も感じられない。

「神奈川二機」の名を全国に知らしめたのは、昭和四十七年八月からはじまった米軍相模補給しょう戦車搬出阻止闘争警備においてである。当時を記憶している隊員によれば、八月から三カ月間は昼夜を問わずの休みなし連続警備によって、家に帰れぬ日さえ何日も続いたという。

また、同年七月には、集中豪雨によって川の中州に取り残された高校生約一〇〇名をレインジャー部隊が濁流の川をロープで渡って激励、ヘリコプターで全員救出されるまで一糸乱れぬ行動へと導いたことは、あまりにも有名な話である。

川崎・横浜の二大都市、そして山岳や海岸を有する大県神奈川を警備するだけあって、同機動隊には、航空・潜水・山岳・特別の四レインジャー部隊が配置されている。中でもご自慢は特別レインジャー部隊（レスキュー）が、今年三月に購入した最新型レスキュー車。現在警視庁が使用しているレスキュー車のいわば改良型で、全国でも唯一の二、五〇〇度の耐熱性能をもつカイノール服をはじめ、四一もの装備を搭載している。京浜工業地帯、石油コンビナートを警備エリアにもつ同機動隊にはかかせない新兵器として今後の活躍が期待される。

一万二、〇〇〇坪の広大な庁舎敷地には、バレーコート、テニスコート、水泳プール、グランドが完備されているだけあって、スポーツも盛んで隊長室には数多くの優勝旗や盾が飾られてあった。

隊訓にいわく

一、容儀を正し規律を守れ

一、責任を自覚し全力を尽せ

愛知県警察機動隊　われらがシンボル⑮

バックのエンジ色が「誠」を意味し、警察マークに愛知県の象徴を重ねて、県民と一体となり、誠意をもって治安を護ることを象徴している。

はげまし

はげまし　第15号
発行日　昭和50年8月23日
発行所　機動隊員を励ます会
東京都中央区八重洲5―1―28
〒104　ミツヤビル3F
☎03(272)3848

全国に灯った市民の灯

═名古屋支部発足す═

去る七月二十九日午後三時より二時間にわたり当会の名古屋支部発会式が、名古屋市中区にあるトヨタビル六階のトヨタホールにて、およそ三〇〇名の来賓・隊員及び会員らを集めて、盛大に行なわれた。あいにくこの日は新幹線の事故に見舞われ、東京本部・大阪支部の一部の世話人が欠席せざるを得なかったことを除き、式はとどこおりなく進められた。

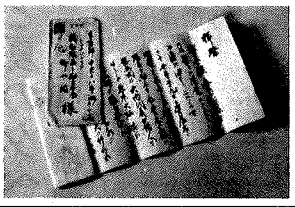
支部発会の喜び

開会定刻の午後三時、発会式に参集した世話人及び会員らがいならぶ中を、司会者の後藤顕正氏の合図で隊員らが入場、これを会員が拍手をもって迎えるという和やかな雰囲気のうちに式がはじまった。

司会者の指名を受けて同支部の世話人の一人である加藤勤氏が支部発会の喜びの第一声を発した。続いて大内俊司代表世話人の祝辞が予定されていたが、冒頭の不測の事故のため金田高昭氏が代理で祝辞を次のように述べた。「昨年三月に当会が東京本部において産ぶ声を上げ、同年十二月には大阪支部、さらに今年三月に福岡支部がそれぞれ開設された。こうした動きをよそ目に見、何とか一日も早く当支部も発足したいと望んでいたが、形式的に追随するより、内容的に充実した支部として発足しようと今日まで満を持していたところ、ここにめでたく発会の運びとなった。」

会場は大きな賛同の拍手でしばし揺れ動くかのようだった。

このあと、来賓のあいさつがあり、まず寺田愛知県警察本部長が登壇し、機動隊発足二十三年のあゆみを概述、「県民から親しまれる機動隊、御会の期待と励げましに応えられる機動隊、をモットーに今後もさらに努力してゆきたい」と結んだ。つづいて真渡中部管区警察局長代理があいさつを終えたところで、自見寅清氏が音頭をとり一同乾杯、しばし歓談が続いた。



名を惜しめ、花と誇らん　機動隊

そこかしこにできた歓談の輪の中から、佐久間礼三郎岐阜薬科大学学長が指名され、次のようにあいさつを行なった。

「昭和四十二年ごろから、全国いたるところの大学が、学園紛争などにより機動隊に一度ならずお世話をかけているが、当大学は今日に至るまで、そういう理由による機動隊導入はただの一度もない」とセスチャーたっぷりに述べ、一同の爆笑を誘ったあと、「その大学の学長である私が、今日、ここで『機動隊員を励ます会』の催物があると聞いてかけつけた次第で、たったいま会員にさせていただきました。というのは、数年前の夏、本学の学生が柳川で水難事故を起こし、必死に捜索したが何としても発見できず、思い余って岐阜県の機動隊にお願いしたところ、わずか十三分五〇秒で発見された。急流で、下手すれば己の身さえ危険であるにもかかわらず、遭難した一人の学生のために勇敢に救助活動をされた機動隊の方々の努力を目のあたりに見、機動隊というのは、学生を警棒で殴打するばかりでなく、むしろ我々の救助と安寧のために尽力してくれるのだと認識を新らたにし、翌日、早速全学生に訓示したのであります。こういう訳でありますから、今後、もし学園封鎖などにより機動隊のお世話になるとしたら、それは私の退任後である」と述べ、万雷の拍手を浴び、「最後に、『機動隊員を讃える歌』の各最終章をもじって、一句作ったので披露させて頂きます。

『名を惜しめ
花と誇らん
機動隊』」と詠んで結んだ。

こうして佐久間学長のことばがおわったあと、全会場はひときわリラックスし、また信頼に溢ふれた雰囲気をかもし出した。

この後、歓談の花が咲くなかで、隊員・会員らによってアトラクションがつぎつぎと繰りひろげられ、多くの喝采を浴びていた。

式も終りに近づくと、鈴木邦英愛知県警察機動隊隊長が答礼のあいさつにたち、「市民の生活の平安は我々の力によるほかない、という自負とともに、明日に向かってさらに深心の努力を惜しまない」と力強くあいさつをした。

最後に、名古屋支部の世話人の一人である木村利秋氏が万才三唱の音頭をとり、発会式をしめくくった。

また、退場する際、会員が隊員を迎えたように、こんど隊員が二列縦隊に並立し、会員を拍手で送り出す、といった具合に、最後の最後まで隊員と会員は一体となる、和気あいあいとした光景が見られた。

当会の全国的活動を期す

金田高昭氏の祝辞にもあったように、新幹線の事故によって東京本部・大阪支部の一部の世話人が出席できなかったとはいえ、名古屋支部発会式は、時とともに底辺を広げつつある会の充実を背景に、大きな盛り上りをみせた。

このようにして会の精神が寸分の狂いもなく各支部に脈々と流れ出ていることはまことに喜こばしいことである。本部とこれらの各支部とを結ぶ線が、会の動脈となり、今後、一層の活躍が期待されるところである。

なお、後日愛知県警察機動隊および同県警察本部より当会あてに礼状が寄せられた。

今月のことば

終戦記念日に思う

戦前の日本人は、労をいとわぬ勤勉をもって知られていた。

しかし、この誇るべき日本人の性情は、戦後、価値観の一変にともなう思想・教育等の変革とともに大きく変化してしまった。その戦後日本人の中で、もっとも労を惜しまず、職務に精励しているのは、警察官と消防官の方々で、しかも日本中でもっとも規律ある秩序を保っている人々であり集団である。

この方々を、それとはまったく正反対な連中が、やれ権力の番犬とか、ひどいのになると人民の敵のように非難攻撃し、数あるマスコミの中ではその提灯もちをする傾向すらないではなかった。この法律を無視し、質より量でなんば暴力集団と化している連中は、警察官や機動隊員を日頃は蔑視しておきながら、個人的生活においては、筆舌につくしがたい被護をうけている事実に気づかないのは、まさにエゴイズム日本の典型である。

昼夜を分たず、生死をも忘れて、社会の秩序を守り、国民の安全を護っておられる警察官の方々、その無私の心とご労苦があればこそ、われわれ国民はそれらの連中をもふくめて、安全な日常生活が送れるのであって、この尊い努力に対する感謝の心がなければ、これは人間ではないし、罰が当る。

とくに、赤軍派だとか、ゼンガクレンとか、カミナリ族などの狂気の行動に対処するわが機動隊の方々のご辛苦や心情を思うと、どんなに感謝してもしたりないほどである。

人間が犬に噛みつかなければ、犬が人間を噛んでもニュースにはならないとするマスコミの風潮は、とかく批判が先に立ち、警察や機動隊の人々のかくれた労苦や美談は目の目を見ない。

とくに、まったく卑劣きわまる一連の人質犯罪や、直接関係のない人々まで殺傷する爆発魔事件、たとえば今回のクアラルンプール事件における極悪殺人犯の釈放要求は、絶対に許すべからざる行為である。

これらの風潮をもたらした大きな要因の一つは、やはり教育の不備であろう。

過去のすべてを否定し、自由を放恣とはき違えたかのような教育の横行によって、戦後の日本人は、感謝報恩の心をふくめて、多くの長所・美点を失いつつある。この是正こそが、われわれ国民の使命であり、精神であり、基本的命題であってわが機動隊員を励ます会の存在価値もまたここにあると思う。

一人でも多くの会友を得て、日本人の心の誤まりを正したいと、切望してやまない。

臨時総会開催のお知らせ

当会では今年も秋十月を期して臨時総会を開催する予定です。まだ細目の決定を見ておりませんので、詳細につきましては次号にてご案内申し上げますが、とりあえず左記の通りそのようすをお知らせいたします。

なお、これに引きつづき大阪支部においても、十一月を目途に支部会開催が予定されており、以下、福岡、名古屋の各支部会も順次開催が計画されています。詳細はその都度、本紙紙上にて予告いたしますので、会員各位はお見逃しなきようご注意下さい。

臨時総会予定

とき　昭和五十年十月
ところ　東京都内

機動隊物語(14)

無惨に散った機体　カナダ航空機墜落事故

飛行機事故というのは、不思議なもの、一度これが起こると、決って二度、三度と続く。

昭和四十一年は、わが国の航空界にとって、まさに厄年ともいえる年であった。

この年の二月四日、全日空機事故が発生し、それからわずか一ヵ月後の三月四日午後八時十五分頃、濃霧のたちこめる羽田国際空港C滑走路の南端（岸壁）に着陸しようとしたカナダ航空機（CD四〇二便）ダグラスDC8型ジェット機（香港を発ち、東京に向っていたが、東京付近は濃霧のため、東京国際空港管制塔から沖縄に寄るよう指示を受けていたもので、乗客は六二名、乗務員一〇名、計七二名が搭乗）は、着陸に失敗し進入灯に主脚をひっかけ、防波堤に激突、炎上し、六四名が死亡するという悲惨な航空機事故が、夕闇が完全に覆った東京の空の下に発生した。

火は、空港消防隊によって午後九時一〇分頃鎮火した。

ほとんどの搭乗者が帰らぬ人となった中で、奇跡的にも命の助かった八名の負傷者は、蒲田消防署等の救急車、およびパトカー等で空港近くの高野病院に収容する一方、死体は、大師橋近くの正蔵院、自成院、および真光院に安置された。

午後八時二五分頃、通信指示室より「飛行機が火を吹きながら羽田空港近辺に落ちたらしい」との通報で、警視庁では、機動隊員五六二名を含む一、六四〇名の警戒員とパトカー七三台、投光車六台、放水車二台、救急車二台、指揮官車五台、キッチンカー一台、東京水上署警備艇七隻を現場に急行させた。

事故発生と同時に、空港は集まってくる野次馬で混乱状態となってきたため、空港警察署長は、空港長と協議し、午後九時三〇分六守橋および稲荷橋において空港入場者の立入制限を実施し、また空港付近の車両が大混乱をきたすのを予想し、羽田街道の一般車両の交通を規制し、大森六丁目交差点でストップした。

現場防波堤近くには、事故のすさまじさを物語るように航空機は無惨にもバラバラに飛び散り、海上にはたくさんの遺体が漂うという修羅場の様相を呈していた。

午後十一時頃現場一帯に散乱した遺体の検証が終了し、空港付近の雑踏もおさまったので、部隊は逐次解散、三月五日午前一時半頃、一部の現場保存要員を残し、本警備を解除したのである。

後日、本警備における遺体の取り扱い、収容ならびに遺品の収集等、日本の警察活動の思いやりと手ぎわのよさに外国人関係者が口をそろえて賞賛したことは、この警備における大きな成果のひとつであった。

特別企画

機動隊員と会員の座談会②

木下夫人　主人を見たとたんポーッとしちゃって

西本さん　私たちは知り合い結婚です

出席者（敬称略）

西本　冨弘（警視庁第七機動隊）
西本美智子（西本夫人）
木下　太郎（警視庁第三機動隊）
木下　周子（木下夫人）
岡本　久一（警視庁第一機動隊）
一場　武英（警視庁第一機動隊）
奥沢　明男（会員・会社役員）
鈴木多賀子（会員・主婦）
伊藤　宏（会員・会社員）
神田ゆかり（会員・OL）
西田　鉄男（編集委員）
榎谷　周二（編集委員）
藤野　富蔵（編集委員）
司会　高橋　繁（編集委員）

縁談がありましたらよろしく

司会　私事で恐縮ですが、私の家内は涙腺が弱いものですから、大がかりな騒擾事件がテレビで放映されると、すぐ泣き出すんです。大変ご苦労なことだとご同情すると同時に、私だったら機動隊員のところへはお嫁にはいかないと。（笑）まことに勝手な一市民の言いぐさだと思うんですけど女の目から見たそういうとらえ方も現にあるわけです。

今日は奥さん方がいらっしゃいますので、そういう職業の方と結ばれたいきさつなどをお話しいただけませんか。

西本夫人　私、本当のこといますと、昔の警察官は制服を着て「オイコラッ！」なんて言ってましたので、あまりよくは思ってなかったんです。（笑）ですから、お巡りさんのお嫁さんになるなんて想像もしていなかったんですが、家同士がつき合っていたもんですから自然と……。

でも、当時主人は、安保の警備でケガをして病院通いを続けていたんですが、その姿を見て考え方を変えなくちゃいけないなと思いました。

私の友達なんかは、お巡りさんは給料が安いからなかなか紹介しにくいなんていってるんですが、反対に、ぜひお巡りさんじゃなければって言ってくれる人もいるんです。

結局はそれぞれ個人の考え方の相違じゃないのかしら。

西本　私たちの場合は知り合い結婚なんです。（笑）

木下夫人　私たちの場合は、出身は同じなんですが、知り合いではなくて、全然知らない同士なんです。

伊藤　ではお見合いだったのですか。

木下夫人　ええ。それで会ったとたんポーッとしちゃって（笑）お巡りさんというのを全然忘れちゃったんです。この人なら一生ついていけるんじゃないかと思って……。

木下夫人　私、本当にいいとこにお嫁にきてよかったと思っています。（笑）

奥沢　今日はハンサムな方ばかりいらしているから。（笑）

司会　機動隊はほとんど男の方ばかりなのでお嫁さん探しが大変だと思うんですが。

岡本　私は警察学校を卒業して最初に配属されたのが深川警察署なんですが、女房とはそこで知り合いました。うちのヤツにいわせると恋愛結婚です。（笑）

子供も一人おりまして、といっても下の方は四日前に生まれたばかりで、（拍手）まだ名前も決まっていません。もちろん将来は警察官にさせたいですね。

西本　え――。手前みそになりますけど、機動隊には若くて優秀な隊員が揃っておりましたらよろしくお願いいたします。（笑）

木下　所轄ですと、通勤の途中とか、巡回連絡の家庭訪問でたまたまそこにお嬢さんがいたとかというきっかけがあるんですが、なにせ機動隊は男世帯ですから。

司会　本会はまだ独身女性が少ないんですが、だんだん増えますので、その節はよろしく……。（笑）

出動後のビール一本が……

伊藤　機動隊員の方はある意味では命がけの仕事をなさっていると思うんです。私などは毎日のんきに暮らしていますので（笑）なぜそのような危険な職業についたのだろうか、また何に支えられて毎日の激務を遂行なさっているのかと、いつも疑問に思っているんですが。

西本　私は昭和三十三年に第一機動隊に入隊したんですが、それまで行きたくて、行きたくて……。それでようやく入隊したと思ったら第一次安保の警備で運悪く角材で頭をなぐられましてね、一時的に視力が落ちてしまったんです。

その時は、正直いって機動隊に入って失敗したなと感じたんですけど、いま考えてみると、やっぱり入隊してよかったと思います。

同じ世代の人間が集団となって一つの大義のために仕事をする、そして一緒に食事をし、寝る。こういうことは、やはりいい思い出になるんじゃないでしょうか。

ただ玉に傷は、あまりにも女性がいないことでしょう（笑）それを抜きにしたら、男の世界で……いいですねェ。

鈴木　年末のおもちつき大会におうかがいした時、夜中に出動なんて起きるのがいやでしょう、そういう場合、帰ってきて一体楽しみはなんですかとお聞きしたんです。そうしたら即座に、ビール一本があれば、それが楽しみですなんておっしゃっていましたけど。

西本　そうですね。本当にくたくたに疲れて帰ってきたら何しろ一杯飲んで、早く寝たいと思いますね。

鈴木　決して仕事がいやだなんておっしゃいませんでしたね。むしろ仕事があった方が緊迫していい……と。

西本　人間は、ある意味において適度の緊張感が継続した方がいいのかもしれませんね。

さわやかな、規律ある生活

鈴木　それに隊員の方は、皆さん規律正しくて節度がありました。ですから、最近の若い男女も、機動隊に入って一年か二年みっちりそういった生活を送ると、また変わった若者ができるんじゃないかしら……。

西本　同感ですね。自分自身のためにもいいんじゃないかな。

西本夫人　先日、電車の中で二人の学生が話してたんですが、学校のテストに、「現在の日本の警察について」という作文がでたというんです。

それで、警察は政府のイヌと書けば大丈夫だよなどと言い合ってるんですよね。私それを聞いてすごく腹が立ちました。

二人の学生もさることながら、先生たちは一体何を教えているんだろうって。

いま日教組問題などで教育のあり方がクローズアップされていますけど、若い人に対する教育ってすごく大切だと思いますね。

鈴木　だから、私は子供に対して、いまはやりの自由教育ではなく、忍耐や規律を育てる意味でも、ある程度制約された中で生活する訓練をさせたいと思っているんです。

司会　文部大臣が喜びそうな話ですね。（笑）私なんかも実際に機動隊に行ってみますと、鈴木さんがおっしゃったように、規律があって確かにさわやかな印象を受けます。

昔の軍事訓練などとは、まったく違った観点から、若者がそのような経験をすることは必要でしょうね。若者というと、今日は神田さんしかいらっしゃらないんだけど、若者代表としてはいかがですか。

神田　私の個人的な意見なんですが、そういう規律正しい生活をするということには大賛成です。

私は高校時代にちょっと奉仕活動をしたんですが、その活動がいかに地味でみんなに認められないかという経験をしたことがあるんです。

機動隊の方にもそういう面が精神的にすごくあるんじゃないかしら。それが会員になって痛切に感じるようになりました。

今度、機会がありましたらぜひうかがわせていただきたいと思っています。

西本　どうぞどうぞ、きっと大歓迎ですよ。（笑）

次号に続く

沖縄警備の激励に礼状寄せらる

去る七月二十一日、沖縄海洋博の開会式の警備及び皇太子殿下ご夫妻の沖縄県ご訪問の警衛警護などの諸警備を終え帰隊した管区機動隊・県警機動隊・警視庁機動隊の各隊より、当会あてに礼状が寄せられた。これは、当会が同応援部隊の出発に先立ち、任務の無事達成を願って激励したことにこたえたものである。

スカッと夏の夕べ

警視庁第二機動隊

去る七月二十一日六時より隊庭にて察祭が行なわれた。この日は午前中の好天とはうって変わって午後から急に暗雲が覆い、大雨をもたらした。

同隊は〝かっぱの二機〟と異名をとっているからではなかろうが、過去の察祭も雨で延期あるいは中止になったこともあった。今回もまた延期になるのでは、と心配されたが、五時ごろに雨もあがり開催となった。

東海林隊長の開会のあいさつのあと、各中隊の対抗演技が行なわれ、会場をうずめた約一〇〇名の来賓・隊員から喝采を浴びていた。また、この合間にとくに招待された若い女性客と隊員とがペアーを組んで〝ゴー・ゴー〟ダンスを楽しむ光景も見られるなど、この日の天候とはまったく逆にスカッと楽しい夏の夕べを過ごした。

なお、当会からも数人の世話人と会員が招待され、察祭のお祝いを述べた。

機動隊めぐり(15)

愛知県警察機動隊

取材を行なった日は快晴に恵まれ、愛知県に独特の酷暑に見舞われた。この地域は、夏はたいへんな暑さで、また逆に冬はきびしい寒さになるという。

さて、国鉄名古屋駅から車でおよそ十五分、北区水草町に愛知県警察機動隊の隊舎がある。その隊舎に着くと、表門をくぐり約三〇メートル前方の隊舎の玄関先に一人の人が立っているのが目に映った。この方が同県機動隊を預る鈴木邦英隊長であった。四十八年十一月、隊長に就任して以来およそ二年間、数々の警備を指揮し、ときには隊の行事をともに楽しみ、隊員からの信頼も厚い。

「隊員が非番の時に、ゆっくりとくつろげるように隊舎と寮とは別な敷地をとりました」とは鈴木隊長の弁。これはほんの一例で、隊長の隊員に対する配慮はまことに細やかで、隊員もこうした隊長の意を汲んでか、モラールはひじょうに高い。また、隊長を頂点とする同隊の団結の堅さの一大要因となっていることは言うまでもない。

隊の特徴は、大きくわけて二つある。すなわち、一つは『文』で、一つは『武』である。『文』はもちろん『学び』のことで、同県での昇任試験ではならして一割強の合格者が出る。また、年に一度の弁論大会に見るように、隊員自身に広範な勉学にいそしむ気構えが醸成されている。他方、『武』の面では、隊旗祭における柔・剣道大会をはじめ、警備の合間を見ては各種の大会を開催し、隊員の心身両面の鍛練に力を注いでいる。

隊庭は恵まれているというほどの広さでなく、隊員も大都市を預かるには決して満足な員数ではない。それでも警備に関しては手抜かりがないのは、これらの隊及び隊員の特徴を巧みにとらえているからである。

昨年、鈴木隊長は警視庁のレスキュー一一〇にヒントを得て、特別機動隊を編成した。自ら警視庁第五機動隊で受けた研修の成果である。これも同隊の特徴の一つといえよう。

「ハイジャックは、爆破事件と同様に気骨の折れる警備です。名古屋空港をかかえ、予期はされましたが本当に困ったことです。困惑に耐えないといった表情で鈴木隊長は語った。たび重なる事件の発生に、隊員らはかえって意気があがっているとはいえ、やはり不測の事件だけに頭が痛いというのが偽わらざる気持ちなのだろう。

しかし、県民は概して同隊に協力的であるという。昨年の七月、常滑市を襲った集中豪雨の警備にあたり、近隣の住民から『ご苦労さん』といわれ、一時の休憩の場を与えられた時、隊長はじめ隊員らは『何としてもこれらの住民を守ろう』と固い決意で行動したという。

中国管区
機動隊

はげまし

はげまし　第16号
発行日　昭和50年9月25日
発行所　機動隊員を励ます会
東京都中央区八重洲5―1―28
〒104　ミツヤビル3F
☎03(272)3848

われらがシンボル⑯

全隊的なシンボルマークは目下のところ発案されていないが、動作・関係・精神の各面で機敏・融和・忍耐を隊訓に、励んでいる。

治安警備機動隊合同訓練実施す

警視庁機動隊は、さる九月十九・二十日の両日、戦闘的デモ規制を目的とした治安警備合同訓練を実施した。これは、今秋に予想される極左系学生集団の過激な行動に対処する警備訓練の一環であるが、最近、爆発物などの事件が続発しているため、参加した機動隊員にも緊迫感が感じられ、熱のこもった合同訓練となった。

訓練は、九月十九日が奇数隊、二十日が偶数隊と特科車両隊とに分かれ、練馬区北町の陸上自衛隊練馬駐とん地で実施された。

この訓練は過激派集団が集会後、いわゆる「むかでデモ」といわれる戦闘的デモ行進に移ったと想定し、おもに出発時、デモ、解散時の警備体制にポイントをおいて進められた。

まず午前九時、白ヘル、覆面姿に扮した機動隊員による仮想デモ隊が出発、車道いっぱいに広がろうとするが、すかさず機動隊が車両展張などを活用した圧縮規制を行ない、さらに多頭デモの阻止に全力を尽くす。その後デモ隊は、むかでデモに移るが、機動隊は、先頭部の完全押え込みを中心とする徹底した併進規制によってこれを阻むなど、残暑の中、全員汗だくになっての気合の入った訓練が展開された。

また、デモ規制と合わせて、最近エスカレートしている投石、火炎びん、長物、爆発物などによる過激な行動を阻止するために、デモ隊と武器持ちとのドッキング防止などを含めて、これらの制圧、検挙訓練も同時に実施した。

さらに、訓練の合間をぬって、催涙ガス筒投てき競技・通信てい伝競技、右移動むかで競争、個人装備着装競走、乗降車訓練などの、各隊による対抗競技を行ない、隊員の志気を高めた。

なお、今秋は各過激派セクトとも、より過激な行動を宣言してる上、国際反戦デーを中心とした一連の動きも多く予定されているので、機動隊員の方々にはまことにご苦労なことではあるが、より一層の厳しい警備体制を期待するものである。

今月のことば

「出合い」

出合いは偶然ではあるが、良い人に出合うということは一生の幸福である。人と人の出合いは運命的で、良い人に会ったということで、自分の人生が大きく左右され、また人間形成の上にもプラスになる。

「ものを習わば一流に」と、習いごとをなすにも良き師を選ぶことは必要である。先に述べたように出合いは偶然であるが、良い人に出合うためには、これを求める必然が自分になければならない。そうでなければ、たとえ良い人に出合っても、その人と縁を結ぶことは出来ない。良き師、良き友、良き配偶者に恵まれることは、この上もなく幸福なことである。

いかなる人々との出合いにも、茶道の「一期一会」のことばのごとく一生に一度の茶会ということで、茶事は、そのつど、一生に一度と考えて十分に誠意を尽くし、後悔のないようにしなければならないのである。

これは茶道に限らず、人生の道すがら会い別れる、すべての人々に対して、このような心掛けをもつとともに、出合いを通して人間性豊かな人と交わることのできることは、とりわけ幸せなことである。

「袖すり合うも他生の縁」といわれるように、その人と出合ったことによって多少どころか一生涯貫き通すような仕事に恵まれることもあり、また素晴しい趣味に生き得ることもある。

私達が励ます機動隊の方もどうか人と人との出合いを大切にしていただきたい。この機動隊の方々も法治国家の縁の下の力持ちのようなものだと思う。人はみな日本は平和で結構だという。しかしこの平和はどうしてなりたっているのであろうか。いうまでもなく警察当局また機動隊員諸君の一人一人の陰の力である。それは警察という大家族の長である警察庁長官あるいは警視総監そして先輩その他諸々の人々との出合いにより、それぞれなくてはならない役目を果たしておられるからである。そしてよりすばらしい人間性を育くまれ、かくれた活躍をつづけていただいているわけである。そこに人生の真の味わいがあり生きがいがあるのではなかろうか。

私もこの「励ます会」に入会させて頂いたご縁を決して無駄にすることなく日日の務めおろそかにせず、二度とない人生を悔いなく、有意義に生きて行きたいと思っている次第である。

当会に感謝状授与

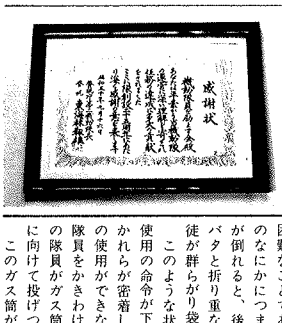
警視庁第二機動隊

去る九月十六日、警視庁第二機動隊隊舎において、同隊の「発足二十五周年記念式典」が行なわれ、武士、東海林親雄隊長より、功労者、協力者など九名に対して感謝状が授与され、当会にもその感謝状が授与された。

式典は、来賓、関係者およそ一〇〇名が出席し、隊舎二階の特設会場にて行なわれた。中野忠義副隊長による開会の辞につづき全員で国歌斉唱。このあと東海林親雄隊長があいさつに立ち、同隊のあゆみを披瀝、また最近の警備情況をふまえて、「隊訓にある融和・団結のもとに、いっそうの尽力を惜しまない」と結んだ。つづいて優秀隊員の表彰が行なわれるとともに功労のあった九名の受賞者に対し、隊長から感謝状がつぎつぎに手渡された。

その後、村上　健警備部長、初代隊長渡辺　清氏、当会より松田太刀雄氏らが登壇し、それぞれ祝辞を述べ、最後に全員で隊歌を合唱して閉会となった。

式典のあと、場所を隊庭に移し、記念植樹、レスキュー見学が行なわれ、ふたたび特設会場にて祝賀パーティーが開催された。



十月臨時総会のお知らせ

前号の紙上にて、臨時総会および懇親パーティー開催のあらましをお知らせしましたが、その詳細が左記の通り決定いたしましたのでお知らせいたします。

なお、同懇親パーティーにおきまして、機動隊員の方々によるいろいろなアトラクションを行なう予定ですので、振ってご出席下さいますようご案内申し上げます。

記

一、日時　昭和五十年十月二十三日(木)
●午後三時　総会開会
●午後三時三十分　懇親パーティー
一、場所　半蔵門会館大ホール　(二六五)七六〇一
東京都千代田区隼町一―一
一、出席会費　千円(当日会場にて納付)

機動隊物語(15)

雨・あられの投石

一一・一二羽田事件警備

佐藤総理の沖縄、小笠原問題折衝訪米にあたり、社会党、共産党、日中友好、国賀促等約一、七〇〇名は、昭和四十二年十一月十二日、羽田空港内において訪米抗議集会を行なったのをはじめ、三派系全学連約一、〇〇〇名は、激しい街頭武装闘争を展開するとともに、午後三時すぎには、滑走路内に侵入し、ゲリラ活動を行なったのである。

とくに、三派系全学連(社学同、社青同系)一、二〇〇名は、前夜東大駒場に泊り込み、午後一時頃、京浜急行蒲田駅に集結、デモ隊形をとり、大鳥居方向に向った。その途中蒲田署日の出通り派出所を投石と角材により襲撃、同派出所のガラスを破壊したほか、沿道の建材店から投石用の石塊やブロックを奪取し、大鳥居交差点に到着、同所に配備の警備部隊に雨あられの投石をくり返しながら襲撃した。

警備部隊の制圧により、一度は追い散らされた暴徒は、すばやく態勢をたて直すと、阻止線まで後退中であった部隊に喚声をあげながら突進した。

機動隊員達は、一瞬ろうばいの色を見せた。それまで後退の訓練などしたことがなかったからである。

角材と投石の直接攻撃をうけながらの後退は、たいへん困難なことであった。道路上のなにかにつまずき、ひとりが倒れると、後続部隊がバタバタと折り重なり、そこに暴徒が群らがり袋だたきにする。

このような状況下に、ガス使用の命令が下った。しかし、かれらが密着していてガス筒の使用ができない。後退中の隊員をかきわけながらひとりの隊員がガス筒に点火し暴徒に向けて投げつけた。

このガス筒がなかなか効果があがらないため、側方から検挙活動に入り、蒲田駅方向に規制排除した。しかし学生は、京浜蒲田駅付近で態勢をたて直し、再び大鳥居交差点に進み、部隊に対し激しい投石を行なった。

一方、別行動の構革系学生を含む反戦青年委約二、〇〇〇名は、大師橋方面から大鳥居方向に進み、革マル系学生約四〇〇名も加わって空港内進出を企てた。

これに対し、警備部隊は、体制を確立し、ガス筒を投きしながらこれを規制し、羽田消防支所前付近で捕捉規制し、萩中公園に押しやったため、午後三時半頃デモ隊は解散した。

この警備では、以上のように羽田地区で市街戦を展開したわけだが、警備部隊の壁は厚く、約七、〇〇〇名の暴徒は数時間で規制、排除された。ここで見逃すことができないのは、現在使用のものに近い大楯がはじめて使用され、威力を発揮したことだろう。

特別企画

機動隊員と会員の座談会

〈最終回〉

西本さん　デモ隊がね「お巡りさん助けてッ」って

榎谷さん　甘えるなって言いたいね

強い生きがいと使命感

司会　実際に訓練風景を見ますと、隊員の皆さんは、毎日の激務の中にもかかわらず、ひじょうに生き生きとしてやられているんですね。私いつも思うんだけれど、いわゆる奉仕精神とか使命感だけではなく、何か大きな生きがいのようなものを持っていらっしゃるんでしょうか。

岡本　私は、この仕事が、国のために、また世の中を明るくするために絶対必要なものだと思っています。ですからひとつの仕事をやり終えた充実感に一番の生きがいを感じますね。それと自分の将来に対する目標達成のための努力、そこにも生きがいを持っています。

司会　それはサラリーマンなどに比べてどうなんでしょう。

榎谷　やはり考えていることは同じだと思いますね。私たちだって、現在の仕事が、あらゆる意味で社会に貢献していると思うから、日々の生活に励みがでるんじゃないかな。ただ、隊員の皆さんとは、何かちょっと意気込みが違う感じはしますけどね。資質というのかな。そんなものが。

西田　先日、総会で若い隊員の方々と話しをして、その後会社に帰ったんですが、社員の顔を見ると、どうも何か締まりが違うんです。（笑）顔でわかるんだなあ、生きがいとか使命感をもっている人は。入隊してすぐ辞める方などほとんどいらっしゃらないんでしょうね。

木下　いないようですね。

西田　私どもの会社では三日、ぐらいで辞めていく人がいますよ、本当に多いんです（笑）

藤野　自衛隊の場合、機動隊と同じように集団行動をとっているわけですが、自衛隊員の意識調査を行なったところ、自分の職業に対して使命感を持っている人が、一割にも満たなかったそうです。

ところが、八機で隊長さんが個人的に意識調査されたら、逆に大多数の方が自分の仕事に使命感、充実感を持ってやっているとのことです。仕事の内容がだいぶ違うにしても、同じ若い人たちなのに、どうしてそういう差が出てくるのか、ひじょうに面白いと思いましたね。

増えた都会出身者

榎谷　警視庁機動隊の場合、隊員の方の出身地は東京近郊ではなく、地方の方が多いと聞きましたが。

西本　最近は東京が多いんです。三〇パーセントぐらい占めているんじゃないでしょうか。そもそも警察の組織は、自治体警察で成り立っているわけなんです。いわゆる住民自治のひとつの担当ということで、警視庁の場合、東京や関東地方の人が増えることはいい傾向ではないかと思いますね。

西田　昔の軍隊で言いますと、都会の軍隊はどういうわけか弱かったらしい。（笑）軍隊と比べるわけにはいかないけど、現在はむしろ精強ぞろいなんですね。

奥沢　西本さんが言われた通り、都会の出身者が増えてきたとすれば、いままでの学生運動などがちょうど過渡期的なところに来ているような気がしますね。それぞれがエゴに走っている時代が終焉しつつあるような……。

西田　不況のせいもあるんじゃないでしょうか。（笑）アメリカでは、いま警察官志望者が多いそうですよ。

水と安全はタダ？

司会　以前は、ひとつの風潮みたいなもので、確かに機動隊というと、体制のイヌだなどという人も少なくなかったと思うんです。でも現在はだいぶ見方が変ってきていますね。市民の認識が改められたというか。むしろ大多数の人は、機動隊に親しみをもち、ご苦労さんという気持を抱いていると思います。新聞の論調なんかも以前とは違いますよね。

西田　浅間山荘の時もテレビをずっと放映して、ひじょうに同情的になっていましたよ。

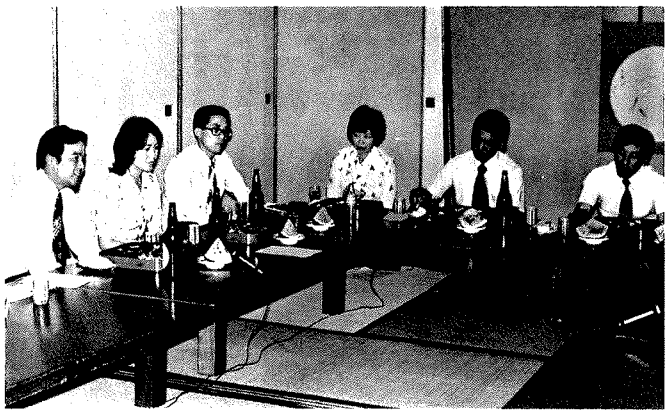
藤野　いまや過激分子は浮き上った存在ですよ、社会の指弾を浴びています。

鈴木　それだけ命を賭して職務を遂行なさっているのに、最悪の場合になると、一般の人は機動隊は何をしているんだって言いますね。先日、佐藤元総理の国民葬で三木総理がなぐられた不可抗力のような事件でも、責任をとるというのは、とってもつらいですね。

司会　それだけ頼りにしているわけです。アメリカでは、市民が自分で自分の身を守らなければならないそうですが、その点日本の警察ならどうにかしてくれるというので……。

榎谷　どうも日本人は〝水と安全〟はタダだという安易な考えをもっている人が多すぎるんじゃないかな。

西本　こういう経験があるんです。あれは第一次安保の時の警備でしたが、デモ隊とにらみ合った時、ものすごい悪態や雑言を浴びせられまったくいっていたんです。そこへ右翼と称するグループが突然飛び出してきて、デモ隊をたたき始めたんです。そうしたらいままで悪態の限りをついていた人たちが急に私たちにすがりつくんですよね。「お巡りさん、助けてッ」（笑）



榎谷　甘ったれるなと言いたかったでしょう。

西本　ええ。だけどその時は必死になって助けました。後で考えると、何でそんな切り替えができたのかと思ったほどです。（笑）職業意識で、暴漢から相手を守るということをやっていました。私だけじゃありません。その場に居合わせたみんなです。

鈴木　それが当たり前だと思ったら大きな間違いですよね。

西本　いつも女房と話しているんです。いま、日常の市民生活は、ますます平穏に過ごしているけど、いつそれが暴力などで壊されるかわからない。そうなったら市民は自分の力で生活を守っていかなければならない。お金のある人たちはガードマンでも雇うだろうけど、一般の人たちはどうするのだろう。その時になって、はじめて平和というものの意義を悟っても遅すぎるんじゃないだろうかって……。

マージャンだってやりますよ

司会　隊員の皆さんは、若い人数も多いので、芸人の方がたくさんいらっしゃるとか。趣味の豊かな方が多いんじゃないですか。

西本　趣味の多様化というんでしょうか。だいぶ幅ひろいようですね。でも、若い二四、五才の人、三〇代の人、そして私みたいに四〇の坂を越したグループで、価値感とか遊びについてのとらえ方が違います。私なんか遊びのとらえ方が下手ですけど、若い隊員はじつにうまいと思いますね。

鈴木　皆さん書道がとてもお上手ですね。

木下　週に二、三回、昼の休み時間を利用してやっています。

鈴木　講師をお招きして？

木下　いえ、隊の中に上手な者がおりますので、それを手本にしています。

西本　私は七機の書道クラブの副会長なんですが、月に三回、作品を提出しなければなりませんので、もう大変です。

鈴木　剣道、柔道は必修なんですか。

西本　どちらかを選択すればいいことになっています。

司会　一般の若いサラリーマンの楽しみというと、大体マージャンとか競馬といったとこなんですが、皆さんの場合はいかがですか。

一場　民間の会社に勤めたことはありませんが、そうですね、やはり同じようなものじゃないですか。

マージャンもやるし、碁や将棋に夢中になっている者もいますよ。

木下　制服を脱いだら一緒ですね。

機関誌の交流を

司会　話題はなかなか尽きそうにありませんが、最後に、この「励ます会」と機関紙について皆さんのご意見ご希望などがありましたらお聞かせ願いたいんですが。

西本　今日、私が出てくる時「主任、いい所へ行きますね」と皆が言うんです。会の存在についてはすべての隊員が知っています。大変ありがたいと思っているようです。人間は、やはり励ましてくれる、知っていてくれる人がいるということはひじょうに心強いし、またうれしいことなんです。仕事だからと言って割り切ってしまえばそれまでですが、仕事、仕事で全部割り切れないところもあるんです。いわゆる感情として残る問題について励ましをいただくことは私たちにとって、何よりもありがたいことです。

木下　機関紙についてなんですけど、各隊の機関紙との交流を計ったらいかがでしょうか。

西本　会員の方からの投稿などは、皆、喜ぶんじゃないかな。

榎谷　記事の交換などをやっても面白いでしょうね。

司会　そうですね。ぜひ実現させたいですね。

今日は皆さんお忙しい中をおいでいただきまして、まことにありがとうございました。今後ともご健康に留意されますますご活躍ください。

終り

出席者（敬称略）

西田　鉄男（警視庁第七機動隊）
榎谷　周二（編集委員）
藤野　富蔵（編集委員）
司会　高橋　繁（編集委員）
西本　篤弘（警視庁第七機動隊）
西本美智子（西本夫人）
木下　充郎（警視庁第三機動隊）
木下　周子（木下夫人）
岡本　久一（警視庁第一機動隊）
一場　武英（警視庁第一機動隊）
奥沢　明男（会員・会社役員）
鈴木多賀子（会員・主婦）
伊藤　宏（会員・会社員）
神田ゆかり（会員・OL）

祝勝会開催す

警視庁第一・第九機動隊

去る八月十六日及び二十二日の両日、第九機動隊・第一機動隊がそれぞれの隊舎にて来賓、関係者出席のもと、盛大に祝勝会を開催した。

これは七月十五日から三日間にわたって東京・千代田区にある日本武道館にて行なわれた警視庁恒例の「警視庁柔道・剣道大会」機動隊対抗試合において、柔道部門では第九機動隊が、また剣道部門では第一機動隊が優勝したのを祝すとともに出場各選手の健斗を讃えるために開催され、警備等により同日まで延期されていたもの。

同会は、選手表彰、来賓および関係者のあいさつ、懇談会と、およそ二時間三十分にわたって行なわれた。

50年度会員未更改の方へのお願い

昭和四十九年十二月末日までに入会された方で、新年度（昭和五十年度＝昭和五十年四月一日より昭和五十一年三月三十一日まで）の会員未更改の方につきまして、当会事務局より、個別に更改手続きの案内書を発送しております。

つきましては、本案内書が到着し次第、更改の手続きをされますようお願い申し上げます。

機動隊めぐり(16)
中国管区機動隊

広島市のど真中、元陸軍兵器廠の火薬庫の跡地。都会の中心地にしては、あまりにも静かで、俗化していない。

こんな環境の中に中国管区機動隊がある。

あたりの静寂を破り、早朝から同機動隊名物の〝かけ足〟がはじまる。朝の体操にひき続き一周三五〇メートルのグランドを七周するかけ足からはじまり、訓練が午前午後にわたる時は、一日五、〇〇〇メートル以上のマラソンになる。

中国管区機動隊は、三個中隊より成る一個大隊で編成され、第一中隊は中国の雄・広島県の三個小隊、第三中隊は、気はやさしくて力持ち、「桃太郎」で有名な岡山県の二個小隊と、「国はこまいが兵隊強い。砂丘できたえた足がある」と歌に聞こえた鳥取県の一個小隊、第三中隊は、明治維新の英傑の地、山口県の二個小隊と神話の国、島根県の一個小隊からなっている。

同機動隊隊長室には〝機敏〟〝融和〟〝忍耐〟の隊訓が隊員達を見おろしている。この三本柱に、最近「きびしさ、やる気、基本を守る」の三つが加えられたという。

――「きびしさ」とは、管区機動隊員という〝プロ〟として常にパーフェクトを求めて努力し耐え抜く、その厳しさをいいます。「やる気」とは、常に積極的に仕事をやり抜く意欲のことです。また「基本を守る」とは、名人といわれる人も、必ず基本から入り、さらに型を破る、応用へと進む、ということから警備実施の適正と、ひいては警察の各種事故の防止を図る見地から提唱し、これを実践しようというものです――と今まで柔和な目に、さらに笑みを浮かべていた同機動隊・中吉淳大隊長、この話になると、やさしさにあふれた目に一瞬するどい光がただよった。

――しかし、毎日の厳しい訓練の中にも、スポーツや寮生活などで隊員達は、心のゆとりはあるようです――

隊員寮は「若竹寮」と名付けられ、一部屋（一六畳）に五人入室し毎日を送っている。

隊員達に話を聞くと、各県の事情を聞き、いろいろな人と話し合い、視野も広まり、いい友達ができるので、たいへん楽しい寮生活だという。

――寮の近くの管区学校直営の店で広島名物「かき」をサカナに一パイやるのがひとつの楽しみです――とはある隊員の話。

最後に中吉大隊長は、こう結ばれた。

――地元警察や管区警察局、隊員派遣の各県が「管機のためなら」といろいろ気を使ってくれます。このようにみんなの厚い友情の中に育っていくわれわれは、なんとしても〝精強な管機〟にならなければと意を決しています――

警視庁
第九機動隊　われらがシンボル⑰

若さと速さを象徴する若鷲に勝利のシンボル、月桂樹をデザインしたもの。信玄公の「疾きこと風の如し」の訓えを若鷲に含蓄させている。

はげまし

はげまし　第17号
発行日　昭和50年11月4日
発行所　機動隊員を励ます会
東京都中央区八重洲5―1―28
〒104　ミツヤビル3F
☎03(272)3848

会員倍増の決意も固く

臨時総会と懇親パーティ開催す

さる十月二十三日、東京千代田区の半蔵門会館で、「機動隊員を励ます会」の臨時総会が開催された。

これは、総会としては今年の四月二十三日につぐ四回目のもので、設立当時三七八名だった会員数も、現在では五、三七六名、また、大阪、福岡、名古屋と支部も増えたことを反映して、盛大な総会となった。

なお、総会終了後ひき続いて、懇親パーティも開催され、なごやかな交歓風景が随所でみられた。

今月のことば

「有難み」に慣れきっている日本人

感謝の気持ちをもつということは、いつの時代、いかなる国においても最大の美徳である。

ところが、最近の世の中を見ていると、〝有難み〟を感じない人々が多いのを痛感する。ものの豊饒さが知らぬまに人の精神を腐蝕してしまったのだろうか、将来の日本に大きな精神的禍根を残すように思える。

過日、仕事の関係上、アメリカ・欧州・東南アジアなどの諸外国を回った際に、私は改めて〝日本の有難み〟ともいうべきことをいたく感じた。

なるほど、中近東諸国は石油という重要な資源を所有し、それこそ世界経済を牛耳ることもできよう。かの国々にとってはこの恵まれた資源はひじょうに有難いものであろうし、私たちから見れば羨望の的と映るのも無理からぬことである。また、欧米の秀れた諸技術、これも羨やましいと思えよう。しかしながら、わが国にもそれらに匹敵するものがある。それは、四季それぞれがおりなす自然の美しさ、それから得られる豊かな情緒などである。これらは他の国々には見られぬ、〝日本の有難み〟であろう。にもかかわらず、これらのことに〝慣れきっている〟私たち日本人は、従に他国の長所・美点にのみ目を奪われ、固有の有難みを感じない人々が多いと嘆くのは、単に感傷とか愛国心ばかりからではない。

〝一事が万事〟ではないが、日常生活に至っても同様なことがいえないだろうか。

先だって、〝ビッグ・シチー・プログラム〟と銘打って、アメリカと日本の市長らが北海道の札幌に会して意見交換をした。それによると、住まいを決めるとき、日本人は〝日当り〟と〝通勤時間〟を考え、アメリカ人は〝隣近所〟と〝安全〟を問題にするという。たしかに、アメリカと日本とはその法制度が異り、アメリカではおよそ四千万人が自己防衛あるいは他の理由で銃器を所持しているのに対し、わが国は銃剣類所持法のもとにその所持人数は比較にならないほど少ない。だが、こうしたことを認識しつつも、わが国における〝安全〟は、きわめて高い。極言すれば、この〝安全〟は人間が生存するための原点であり、なにものにも置換できない問題である。そして、この〝高い安全〟を維持し続けている警察、常にその第一線で活躍している機動隊員の方々を忘れてはならない思う。

他国のよいところばかりを羨やむ前に、日本の、いろいろな意味での〝有難み〟をいま一度、感謝の気持ちで考えてみる必要があるのではないだろうか。

× × × ×

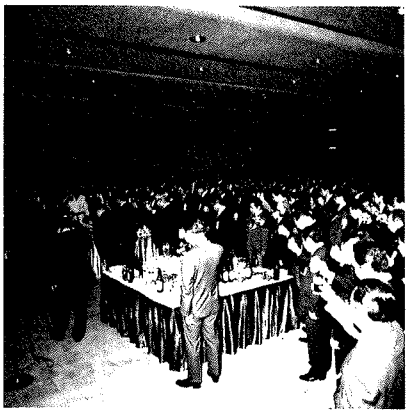
力強く会員倍増宣言

この日、半蔵門会館の五階大ホールは、予想を大幅に上回る三七三名もの会員で埋まった。

総会は、定刻の午後三時、東京世話人の鈴木実氏の司会によって開会、最初に会員を代表して世話人の大内俊司氏が

「現在の日本は、一見平和そうではあるが、何か大きな暗雲の傘に覆われている。ひとつ間違うと、大変な世の中になってしまう恐れがあるが、機動隊員の皆さんは日夜、影日向になって日本の平和と治安のために働いてくださっている。このような時節、私たち市民も、知らぬ存ぜぬといった考えを改め、自発的な行動によって、この会を全国的な運動に広げようではないか」

とあいさつを述べた。



この後、支部を代表して名古屋支部の宮崎清三郎氏があいさつ、続いて村山文雄氏が

「現在の会員数を飛躍的に倍増しよう」

と力強く会員倍増宣言を述べ、無事臨時総会を閉会した。

和気あいあいの懇親パーティ

総会終了後、ただちに懇親パーティに移り、土田警視総監をはじめ、警察庁、警視庁関係者と機動隊員七九名が、会員の万雷の拍手に迎えられて入場した。

まず会員を代表して大内俊司氏が

「平素の激務ご苦労さまです。今後もご健康に留意されて、日本の治安のため頑張っていただきたい」

とあいさつ、つぎに急用で出席できなかった浅沼警察庁長官に代って山本警察庁次長が、続いて土田警視総監が、

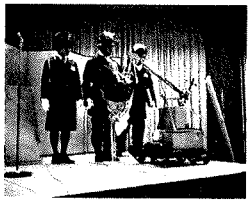
「会員の皆さまの励ましは機動隊員にとって何より励みとなります」

と答礼のあいさつを述べた。

この後、福岡支部の自見真清氏の音頭で、乾杯、ビュッフェ形式で並べられたテーブルを会員、機動隊員が思い思いに囲み、歓談の輪が広がった。

パーティが最高潮に達した頃、会場に特設された舞台で第一機から特科車両隊までの機動隊員が、各隊思い思いの趣向を凝らしたアトラクションを披露、そのユーモアにあふれた隊の紹介や歌、踊りに、爆笑の渦がわいた。

なかでも、第三機による桃太郎姿に変しての隊の紹介、ジェスチャーたっぷりに四機節を歌った第四機、「東京の灯よいつまでも」を歌い、その絶妙な節まわしに会場からやんやの喝采を浴びた第五機、そして特科車両隊による婦人警官に変装しての爆弾処理機の紹介には、しばし拍手が鳴りやまなかったほど。



夫人同伴で出席した男性会員は

「何人かの機動隊員の方と話をしましたが、とても有意義だった。女房もすっかり機動隊のファンになったようです。来年もぜひ出席したい」

と感激の面持ち。若い機動隊員も

「隊員になって以来、こんなうれしいことはない。隊に帰ったら皆に話して聞かせます」と語っていた。

パーティは、土田警視総監をはじめとする機動隊員の「出動の歌」合唱のあと、大阪支部の木村利秋氏による万才三唱を最後に閉会したが、それでもまだ、なごりを惜しんでか、立ち去らぬ会員も多く、再び機動隊員とともにテーブルを囲み、歌の交換や歓談にはずんでいる姿が印象的であった。

機動隊物語(16)

巨星逝く……

吉田茂元首相国葬警備

昭和四十二年十月二十日、戦後史にひときわ輝く巨星として、今もかすかの逸話が語られる吉田茂元首相は、国民の願いもむなしく、八九才の生涯の幕を降ろしたのである。

三日後の十月二十三日、故人の業績にふさわしく、閣議において国葬が決定され、十月三十一日、日本武道館で盛大に国葬が行なわれた。

当日は、警視庁本部に総合警備本部が設置され、機動隊は、この警備の中核として、金隊が出動を下命された。

この中で第四機動隊は、午前十時三十分、隊長指揮の三五個中隊で出動し、田安門から靖国神社にかけて沿道の警備にあたった。

同隊は、現地到着とともに、付近の検索を徹底し、パイプ柵の設置、ロープ展張等、一般弔問客に対する安全と、葬儀に対する妨害阻止に万全をつくした。

正午を過ぎた頃から一般見送人が沿道に参集しはじめ、葬儀列が通過する頃には、田安門交差点から竹橋付近までいっぱいとなっていた。杖にすがった老人もいた。派手な服装の若者もいた。老いも若きもそれぞれに哀悼の意を表わし、静かに遺体の到着を待った。

会場では、天皇陛下が行幸され、総理大臣をはじめ、各閣僚、世界各国の大公使、有名人、知名人の参列が相次ぎ、その数は、七、〇〇〇名余にも達した。午後二時頃、葬儀列は、白バイを先頭に田安門にさしかかった。一瞬、交差点を埋めつくした一般見送人のみならず、警備にあたる隊員達も深い悲しみにつつまれ、その中を霊柩車は、静かに武道館へと向った。

思えば、終戦後三代目の総理大臣として、昭和二十一年に第一次吉田内閣を組閣し、一時期選挙に敗れたものの再度政権を担当以来第五次まで約六年間、左翼陣営はもとより、鳩山、三木、河野など自分をかつぎ出した政治家にまでかみつき、けとばす大暴れをやってのけ、ワンマンの名を欲しいままにした。

一方では、占領軍のマッカーサー相手に敗者のヒケメも見せず、堂々と渡り合う武者ぶりを見せ、戦後の混乱から見事にわが国を立ち上らせた功績は忘れることはできない。

今日の経済大国日本を造り上げた立役者といっても過言ではあるまい。

日本武道館では、午後三時三十分頃から一般の献花が行なわれ、献花する人々の列は時が経つにつれて、その数を増し、神保町の交差点まで延延と続いたのである。

記録によると、参列者七、〇〇〇名、一般献花者三万五、〇〇〇名、沿道見送人七万、六〇〇名にも達したと伝えられている。

天皇・皇后両陛下ご訪米警備慰労

今年の五月七日にご訪日された英国女王エリザベス二世陛下・エジンバラ公の警衛警護警備は、今世紀最大のソフトな警備としてその成果を国内外に高く評価された。これに対し、このほどの天皇・皇后両陛下のご訪米に関する諸警備は、ご出発前から爆発事件や阻止闘争が連発し、不穏な空気が漂っていただけに、目立たない精神的な警備に終始した警備であった。このような神経のすり切れるような警備は、これまでも例が少ないだけに隊員らも多少のと惑いを感じつつも、日頃の警備訓練や教養訓練の成果をいかんなく発揮し、無事に任務を達成した。

当会は、大内俊司代表世話人をはじめ世話人各氏が、十月二十四日午後土田警視総監を訪れ、この天皇・皇后両陛下ご訪米警備に鋭意努力された機動隊員らを慰労した。

寄付金報告

去る十月二十三日に行なわれた当会臨時総会および懇親パーティーを祝して、匿名により一法人三個人の方々から合計五万五千円の寄付がありましたのでご報告申し上げます。

大阪支部秋季総会開会のお知らせ

本紙九月号紙上にてそのあらましをお伝えしました大阪支部秋季総会を左記の要領で開会いたしますので、支部所属会員は奮ってご出席下さいますようご案内申し上げます。

記

一日時　昭和五十年十一月二十日(木)
　　午後三時より午後五時まで
一場所　大阪商工会議所六Fニュー国際
　　〇六(九四二)六一五一
　　大阪市東区内本町橋詰町五八―七
一出席会費　千円

寄稿文

若人と機動隊員

第一機動隊　青木勝治

「〇〇大学で内ゲバ」(最近の新聞記事)「この世を花にするためにいのちを歌う機動隊」(歌・この世を花にするために一節)この相対する言葉、これが同じ世代の若人の生きる姿とは嘆き悲しまずにはいられない。いま民主主義の確立された現代において「内ゲバ」という新語が生れたことこそ悲しむべきであろうか。

私が機動隊に入隊したのは浅間山荘事件直前の昭和四十七年二月である。それまで刑事部門で勤務していた私は大事件発生のときなどに後方要員として検挙されてきた暴力学生の取り調べにあたっていたことがある。取り調べを担当した中には、新宿騒擾事件、東大事件等に関係した者もいたが、事実に対する自供は、ともかくもたび重なる取り調べのうちにお互いの心がうちとけよく生立ちなどについて話し合ったものである。そのとき私はなぜこの若人が事件に関係したのか、なぜ同じ若人同志が取り調べを受ける者、取り調べをする者として対決しなければならないかと思いなやんだものである。当時、私は現場をみていなかったので事実の認識に多少欠けるところはあったであろうと思う。しかし彼らは私達と同じ生立ちであり、現状をよりよくしようとする情熱のこもった若人で私達とかわるところがないのだ。ただ、次代を担う若人として最も大切な物の考え方の中に現実を直視しようとせず、ただただ幻想の世界に突走ることのみに若人の情熱を燃やしているところがあった。機動隊に入隊して私は若い同僚、若い部下を多くもつことができたが、機動隊はなんてすばらしい若人の集団であろうかと思う。制服につつんだがっちりした体、きりっとしまった口、輝く目、使命感に燃えた顔、顔、顔……。刈りこんだ頭とボサボサの長髪、背ずりのあごとボサボサにのばした口ひげ、輝く目とうつろな目、同じ若人としてこんなにもちがうものか……。

勿論これらの者は一部であって大多数の若人は立派な情熱に燃えた若人であるが……。この一部の若人も現実をよく見つめ、その情熱を私達と同じ方向に燃やすときこそよりよい社会建設への第一歩であろう。

その日のくることを願いながら私達機動隊員は平和な社会生活の防人として職務に邁進している。歌にもある「損はやめろと言われても信じているんだ大陽を」の如く。

盆おどり会と求美人(縁結び)作戦

岐阜県機動隊　巡査　仲野　博

第一回機動隊盆おどり会が、八月三十日に機動隊隊庭において開催された。初めは、隊員と隊員家族間の親睦をはかるためであったのが、日がおしせまるごとに、話がエスカレートし、遂には、機動隊主催の盆おどり会として、機動隊〇B・各警察署職員はもちろんのこと、町内の人々、更には、市内百貨店の女子従業員約六十人までの参加となった。こうなれば、我々主催者側の張り切りようは大変なもので、おどりは、もちろんであるが盆おどりに付きものの、みたらしだんご、金魚すくい等の屋台もだし、本物の野師顔負けの腕前で客を寄せ、みごとな手さばき、口さばきで、大繁盛であった。

みたらしだんごは、市内の店から看板の赤ちょうちんから、だんごを焼く焜炉、だんご、たれに至るまで、全部借りて来たものであった。このみたらしだんごは、普通一本三十円で売っているものを五本百円という、出血大サービスであったし、金魚すくいも一匹二十円する金魚を一回十円で、三匹まですくわせる等、子供の人気を一手に集め、大盛況で一時間たらずで品切れになる始末であった。

この盆おどり会を兼ねて、独身が過半数をしめる機動隊は、キューピット(求美人)作戦と題して、各署から参加してくれた女子職員、市内百貨店から参加してくれた女性達の中から、この機会に、何組かのカップルが生まれるのでは?、ということであった。

初めは、はずかしそうにしていた女性や隊員も、雰囲気に慣れるにしたがい、テーブルを囲んでの若者同志の花が咲き乱れ、また、おどりの輪も二重、三重となりなごやかな、おどりがつづいた。

午後七時から十時までという短い時間ではあったが、盆おどり会は大成功で終わった。

洋上大学参加隊員を激励

警視庁機動隊は、来る十一月六日より十六日までの一泊一〇日間、グァム・サイパン両島を回周して開催される洋上大学に、各隊より五〇名の隊員を参加させることを決めた。

洋上大学というのは、青年男女を対象に、多彩な講師陣を迎えて行なわれる研修会で、回を重ねること今年で六回目。

今回は、「創造と自由と友愛」をテーマに、社会・政治・経済・人間関係・リーダーシップ論など幅広く講義を受け、討論を行ないながら研修することになっている。また、講師陣には、東京大学・西義之教授、明治学院大学・富田信男教授らをはじめ、その著書「誰も書かなかったソ連」などで知られる評論家・鈴木俊子さんら多数が迎えられる。

当会は、出発に先立って十月八日、高橋繁氏ら世話人各氏が警視庁に赴き、洋上大学参加隊員らを激励した。

会員告知板

会員の皆様にお願い

皆様方の厚いご支援のもとに本会もいよいよ隆盛をきわめてまいりました。ここに深謝するとともに会員の方々に次のことをお願いいたします。

発送事務の都合上、移転、その他住所変更等がありましたらすみやかに本会事務局(本部　東京都中央区八重洲五ノ一ノ二八)までお知らせ下さい。

会員数状況

法人	二六三社
一般	四、五二〇名
特別	五六五名

(十月二十四日午前現在)
計　五、三四八名

寄稿歓迎

編集部では、常時、会員の皆様方からの寄稿をおまちしています。

会員として、また市民としての立場から機動隊についてのご意見、ご感想や機動隊とのかかわりがあった経験談、あるいは本会に関するご意見ご希望など、幅広くお寄せください。採用文については紙上でご紹介します。

なお、紙面の都合により、四〇〇字詰め原稿用紙で三枚以内とします。

●お断わり

臨時総会の記事掲載のため発行日が遅れたことをお断わりします。

お知らせ

機動隊行事参観希望者を募ります

機動隊で催されるいろいろな行事の参観にお出かけになりませんか。

今回は、左記の要領にて行なわれる「警視庁機動隊対抗柔剣道大会」の参観希望者を募ります。なお、参観人員の制約がありますので、希望者が多数の場合は、世話人にて調整のうえ、追って個別にご連絡申し上げます。

また、この他、会員が参観できる機動隊の行事を今後もその都度ご案内いたしますので、お見逃がしなきようお願い申し上げます。

記

一日時　昭和五十年十一月二十六日(水)
　　午前九時より
一場所　警視庁警察学校
　　(第二道場)
　　東京都中野区中野四―二―一
一申込期限　十一月二十日
一申込先　当会事務局
　　東京都中央区八重洲五―一―二八
　　ミツヤビル三F

機動隊めぐり(17)
警視庁第九機動隊

隊舎は、新宿区若松町にあり、プレハブの二階建て。ただいま、新隊舎建設を計画中という。そのプレハブ隊舎の一室に隊長室があり、部屋の入口には『主役たる活動』と壁紙が貼ってある。中に入ると、『至誠・団結・剛健』という三つの隊訓が額に納まっていた。

「法の執行に際しても、また市民との接触においても、隊員各自が誠実をもってすることが第一ですから」と隊長が説明してくれた。機動隊の存在意義とその機能を三つの隊訓を巧みに取り入れて隊員教育する隊長の信望は厚い。

今年の五月に行なわれた警視庁武道大会」における柔道グで第三位の好成績を残している。

最近の警備は、かつての諸種闘争に加え、爆弾闘争に見られるように、精神警備を要求されるようになってきた。この警備方法の変化に対応すべく、さらに団結を固め、「主役たる活動」の担い手として努力している。

最後に、天野隊長は抱負を次のように述べられた。

「機動隊である以上、従来の強い機動隊であることを大前提に、その能力を十分に発揮するには、全員のまとまりが必須条件。そして早く動くことが肝要であると考えている。」

発隊して七年目で歴史は浅いが、四十四年十一月の佐藤総理訪米阻止羽田闘争事件をはじめ、浅間山荘事件、成田闘争事件など、大警備に出動し、多くの成果を収めている。

「前職の警視庁第一機動隊管理官からここへ転任したのがこの八月ですから、まだ二カ月余りですけど、過去、第一機動隊に所属していたころ合同警備や諸行事などで交流があったので、隊のことは一応把握しています」という矢野博文隊長。その柔和な相貌からは、とても機動隊の隊長とは想像できないが、ひとたび警備服に身を包み、指揮棒を持った姿はきびしさそのもの。

都門で見事に優勝したのだが、「実力が接近している警視庁の十個隊の中で、団結の固さが優勝に結びついた」と隊訓の成果を強調された。

ところで、同隊のニックネーム「疾風の九機」の由来は、隊長によると、東京駅騒じょう事件や佐藤総理訪米阻止羽田事件などで、疾風のごとく現われ、機敏に違反者の逮捕に実を上げたのを、たまたま広島県警機動隊の幹部があわせ、この状況を見て「疾風の九機」というニックネームをつけたという。

本務外でのご自慢は四十六年に編成されたアメリカン・フットボールチームの活躍で、四十八年には関東社会人リー

はげまし

はげまし　第18号
発行日　昭和50年12月3日
発行所　機動隊員を励ます会
東京都中央区八重洲5―1―28
〒104　ミツヤビル3F
☎03(272)3848

大阪府警察第二機動隊　われらがシンボル⑱

第二機動隊は、一機同様㊙を中心に左右に流れる三本の線で構成される腕障をシンボルに、「結集される機動隊」をあらわしている。

さわやか秋の交歓

大阪支部秋季総会開く

去る十一月二十日午後三時より、大阪市東区にある大阪商工会議所のニュー国際ホールにて、大阪支部秋季総会が開催された。会場には関沢元弘近畿管区警察局長ならびに下稲葉耕吉大阪府警察本部長以下一一〇名の機動隊員・関係者および大内俊司代表世話人をはじめ、東京本部、名古屋・福岡両支部の世話人らあわせておよそ三五〇名が参集、深みゆく秋とともに本年最後の交歓のチャンスを心ゆくまで楽しんでいた。

「より多くの賛同者」を

この日の総会の司会を務めた大阪支部世話人の一人である高島浩一氏の合図で、招かれた大阪府警幹部および大阪府警察第一・第二両機動隊員らが入場、これによって秋季総会の幕がきって落された。

昨年の大阪支部発会式のときも流暢な司会ぶりを披露した高島浩一氏が口火を切って開会の挨拶を述べたあと、大内俊司代表世話人、関沢元弘近畿管区警察局長、下稲葉耕吉大阪府警察本部長らが次々に挨拶を行なった。

その挨拶の中で、大内俊司氏は、機動隊員の日頃の労苦をねぎらい、めざましい活躍に讃辞を送るとともに「かかる機動隊員諸君を励まそうとする当会が、より一層充実し、その活動を拡げてゆくためには、一人でも多くの賛同者を得、会員の倍増を達成することが急務である。その目的を遂行すべく、各世話人・会員諸氏の協力をお願いしたい」と述べ、万雷の拍手を浴びた。また、下稲葉大阪府警察本部長は、治安面からみた昨今の社会情勢を分析し、「『機動隊員を励ます会』の存在が機動隊員一人一人にとっていかに大きな心の支えになっているか、また、会員諸氏の温かい理解と励ましが警備にあたっている隊員にどれほどの勇気を与えるか、まことに筆舌に尽くし難い。『機動隊員を励ます会』の期待に応えるよう、隊員諸君は大いに頑張ってもらいたい」と述べ、喝采を浴びた。

世話人・来賓の挨拶が終わったところで東京本部世話人の嘉悦康人氏が音頭をとり一同乾杯。懇親パーティーに入るまでのしばしの間、隊員と会員との和やかな歓談が続いた。

機動隊は一つ

懇親パーティーに移ると、大阪府警察第一・第二両機動隊の紹介をかねて、両隊隊員による数々のアトラクションがくりひろげられ、参会者を大いに楽しませた。

司会も高島氏から第一機動隊・松本隊員の手へ移され、玄人はだしのその司会で次々と紹介されていく。唐手の型、「日本民謡巡り」、そして寮歌合唱。なかでも、ノドに自信のある隊員三名によって、リレー式に歌われた「日本民謡巡り」が大いに受け、一同の手拍子に合わせて見事に歌い上げた。

これらのアトラクションに気をとられて、テーブルに並べられた料理の方がお留守になった隊員や会員に、高島世話人が手をつけるようにうながし、隊の紹介を一時中断させるほど。

かわって、第二機動隊・張本隊員の司会によって第二機動隊の紹介がはじまった。圧巻だったのは宮本・原両隊員による棒術の型。片や真剣、片や護身棒。会場が一瞬鎮まり返った。息をのんで見守る中で、数種の型を披露し終えると、喚声が洩れ、すかさず潮騒のような大きな拍手が会場いっぱいに広がった。

続いて司会をしていた張本隊員がマイクの前に立った。弁説もさわやかにいまわしき“浅間山荘事件”を語りはじめた。一同は静かに傾聴する。

「……両親や親戚の必死の説得にもかかわらず、抵抗を止めようとしない犯人らに、殉死された警視庁第二機動隊内田隊長は、ついに二月二十八日午前一〇時、たてこもる山荘めがけて放水・ガス弾を発砲しながら人質救出に乗り出した。が、その時、犯人が発砲した一弾がにぶい音を立てて内田隊長に命中した……」

語り進むにつれ会場内は、感動的な雰囲気に包まれた。明日は我身と心に念じる隊員。治安のためなら、たとえ飛び交う弾丸の前に人垣となっても、市民を守ろうと身命を賭す機動隊員らに、心から感謝に耐えないと思う会員。張本隊員の弁説は、流暢に、しかも時にはこみ上げる感情を押えるようによどみつつも、さらに続いた。そして、最後に力強く、「地域により、管轄により機動隊は分かれても、有事に際しては我ら機動隊は常に一つである。いかに状況が悪条件下にあろうとも、我ら機動隊は一丸となって、たとえ生ける人垣となろうとも、明日の治安を守るため全力を注く覚悟である」としめくくり、ひときわ高い喝采を浴びた。

続いて、第二機動隊三中の瀬口隊員が、素晴らしい美声で詩吟「浅間山荘」を詠じ上げたあと、紹介の最後に、北原隊長を中央にスクラムを組んで、声高らかに隊歌を合唱して終えた。

最後に、大阪支部世話人川渕長一氏が万歳三唱の音頭をとって、盛大だった秋季総会に終止符を打った。

さわやかな機動隊にいま一度の拍手を

東京での臨時総会に次いで再び「会員倍増」を訴えた大内代表世話人の挨拶が注目を集めた。川渕氏もこれに呼応して万歳の音頭をとるにあたって「世の中は不況色一色に染られている。が、不況なればこそ、社会は犯罪が多発し、機動隊の活躍が期待される。だとすれば、こうした時期に一人でも多くの方に入会してもらい、激励していきたい」と述べた。いずれ、こうした趣旨は参会した各支部の世話人を通じてしだいに全会員に浸透、会の一層の発展へとつながっていくことであろう。

現にこの総会に出席した会員の多くは、「機動隊員は実にさわやかで、気持ちがいい」とその印象を述べており「さわやか機動隊」に惜しみのない拍手を送っていた。

今月のことば

険しい世相に備えて

石油ショックに由来する不況は、年とともに深刻さを加え、今日では、景気の浮揚の時期の目途もたちかねるありさまで、政府も躍起となって、財政に金融に、次々と施策を打ち出して有効需要の喚起に努力していますが、はたしていつこの泥沼のような不況の底から脱出できるのか、産業経済の前途は、極めて厳しく困難であると言わねばなりません。

この暗い不況ムードを反映するかのように世相も次第に険しさを増し、赤軍と自称する無法集団をはじめ過激派の活動は次第に陽動的となり、火炎ビンの投擲や爆弾の暴発事故が各地に頻発し、また他面法秩序無視の無頼の徒の銃撃事件の多発など、世相はまことに物情騒然たる状態となってきました。

このように、いつ不測の大事が突発するかも分かりかねる不安な社会情勢のもとにあって、市民の生活の安寧維持のため、真に頼りとなるのは、機動隊員の活動であります。

言うまでもなく、機動隊は、社会の秩序を守り、市民の安寧を堅持する使命を有するので、有事に備えて日夜激しい訓練を重ね、要すれば直ちに出動して警備に当り、ひとたび災害の発生ともなれば、あらゆる困難を排して懸命に救護活動に挺身するなどその責任は重大であります。

非常災害などの際、しばしば見聞きする、機動隊員の勇敢な犠牲的活動には唯々感謝と感激に胸うたれるのみです。

過激派のような不逞の徒は論外としても、現代の若い人々の中には、往々にして自由と放縦を混同し、権利のみを強調して義務を無視し、勤労を疎んじて怠惰に流れ、他の迷惑を顧みずに勝手気ままな行動をして憚らない利己主義者の多い中にあって、国の法秩序の維持を目的とする機動隊設置の趣旨を体し、忠実に職責を遂行するためその青春を捧げ、黙々として鍛錬し厳しい訓練を続ける隊員の真摯でひたむきな姿は、真に現代の日本の若人の鑑みとすべきであると思います。

どうかひとりでもより多くの人が、機動隊の存在の意義を改めて認識し、隊員と国民との間の理解と親睦をより一層深めて、隊員のご労苦に感謝する人々の幅広い共感に支えられた、大きな国民運動としての『機動隊員を励ます会』のますます発展しますことを心から願うとともに、隊員諸氏も国民の期待に応え、自重自要一層のご健闘を祈ってやみません。

機動隊物語(17)

ともに燃えた青春の血

ユニバシアード東京大会警備

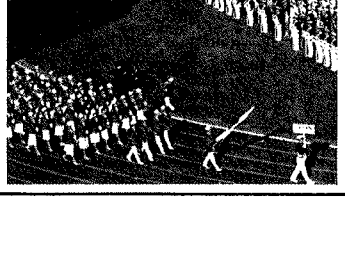
学生オリンピックと称され、世界中の若人が集うユニバシアード大会は、昭和四十二年八月二十六日から九月四日までの一〇日間、東京で開催された。この大会には三四か国、一、二八六名が参加、熱気にあふれる大会となった。

開会式当日の八月二十六日午後四時三〇分頃から雷を伴った雨は、激しさを加えてきた。観客はすべて回廊に待避していたため混乱状態は見られなかったが、午後五時になっても雨の勢いはいっこうに衰えないので、式を翌日に延期することとなった。

翌二十七日午後五時三〇分常陸宮両殿下がロイヤルボックスにご到着、開会式がはじまった。続いて皇太子殿下、妃殿下もご着席、場内観衆は約七万名とふくれ上った。

式は午後八時無事終了したが、この警備については機動隊員八五〇名を含め、合計一、二四六名をもって警備にあたった。

大会期間中の選手村警備については、村内に各機動隊ならびに公安部、刑事部の私服員、代々木警察署員、婦人警察官等から選抜された計七〇名の選手村警備隊を編成、それぞれ三交代制で勤務した。婦警部隊は、女子選手村を、警備小隊は、選手村外周の警ら、メインゲートおよび各ゲート周辺の交通整理にあたり村内は組織委員会側の自主警備として警戒にあたった。



警戒期間中における特異動向として、九月一日午後七時頃、朝鮮新報社員金孝鎮ほか一名は、関西大学スポーツ記者と身分を偽って入村し、韓国選手に対して取材中を韓国選手団員・駐日韓国大使館員李景植に発見され、スパイ工作をしているとして宿舎内に引き込まれた。

同所でつるし上げられているとの通報で、警備隊員が現場に急行した。現場で事情聴取の後、措置として規約違反による入村および外国人登録法違反として処理し、午後一〇時頃選手村から退去させた。

国立競技場では陸上競技が行なわれたが、競技日程が大幅に変更され、午後の部のみとなったため、警備計画も変更となり、部隊再編成に難渋した。

警備体制については、第四方面警備本部長指揮のもと、機動隊を中心に、四谷、原宿、赤坂署は指揮所をそれぞれ設置し、警備にあたった。

大会中、各機動隊は、開・閉会式をはじめ、国立競技場、東京体育館、国立代々木水泳場、同体育館、庭球場等の警備にあたり、延べ四、一一二名が派遣された。

この警備では、警備体制の変更などにより、スムーズなものとはいえなかったが、若い隊員達にとっては、選手達と同じように青春の血をたぎらせる楽しい警備でもあった。

寮祭シーズン来たる

警視庁第九機動隊　九桜寮寮祭

今年も余すところ一か月あまり。打ちつづく不況ムードのさ中、世間の表情は必ずしも明るくはないが、機動隊員の方々の相も変わらぬ第一線での活躍のおかげで、今年も国内治安はおおむね平静に保たれ、大禍なく一年を終えそうである。

さて、警視庁機動隊にとっては、一年の務めを無事に終えようとしているこの時期が楽しい寮祭シーズン。一年間の労苦を癒し、新年への鋭気を養うべく、各隊で趣向を凝らした寮祭が催されている。とくに、若い隊員にとっては、寮祭が生涯の伴侶を得る好機とあって張り切らざるを得ない様子。そんな一つ、九機名物の九桜寮寮祭をルポしてみた。

一〇〇名の参会者で盛大に

この寮祭シーズンのトップをきって、去る十一月十八日午後六時よりおよそ三時間あまりの間、東京の隼町にある半蔵門会館にて第九機動隊九桜寮寮祭が行なわれた。

会場には、天野博文隊長をはじめ、寮員らおよそ一三〇名と、上野服装学院などから招いた女性招待客およそ七〇名、また当会の世話人数名が出席、合わせて約二〇〇名の参加者が集まった。

寮祭は、まず天野隊長があいさつにたち、続いて赤荻正人寮長、当会の中野　進氏らが次々にあいさつを述べたあと、上野服装学院から天野隊長・赤荻寮長の二人に恒例の花束贈呈が行なわれた。この後、一同乾杯。そして、東京イエローシャトーの歌と演奏を聴きながらしばし歓談。

軽やかなステップにのって

歓談のあいだ、東京イエローシャトーによる歌と演奏と、ブルーナイトによる演奏が交互に行なわれた。

司会の山田英明隊員が、隊員や女性招待客にダンスをするよう呼びかけるが、フロアに立つカップルはなかなか見られない。その間、空演奏が続いた。ぼつぼつテーブルを離れて、二、三のカップルが踊りはじめたのは、かなり時間がたって、バンドがブルーナイトの演奏に替わったころ。それでも、隊員同志あるいは女性同志という不自然な組み合わせで、もうひとつ雰囲気がうちとけないでいた。

そうこうするうちに、天野隊長が夫人の手をとりつつフロアで踊りはじめた。おりしも、バンドは東京イエローシャトーの二回目の演奏に入った時だった。拍手と歓声が場内に湧きおこった。つられるように八尾副隊長もグラスを片手に軽やかにステップを踏む。

一曲、二曲……。隊員らもそれぞれのパートナーを連れてフロアに立つと、たちまち立錐の余地もないほどカップルでいっぱいになり、場内は和やかな雰囲気に包まれた。

「去年の寮祭でも、二、三組のカップルがめでたく結婚しました」とは天野隊長。日頃、若い女性と交際する機会に恵まれない寮員らに、こうした機会に一組でも多くのカップルが生まれてくれれば、子を思う親の気持ちで期待する天野隊長の思いやりがありありとうかがえた。

楽しく過ごす時間の流れは速く、やがてフィナーレ…。会場のそこかしこで、別れを惜しむカップルが目についた。

「楽しかったわ」

「またお会いしましょう」

こうして九機の九桜祭は無事に終った。それは、寮祭シーズンのトップを飾るのにふさわしい寮祭だったといえよう。

会員と隊員のひろば

バックボーン

東京・O生

うちの社員で、本会の会員でもある中嶋の話が、筆者には興味深ったので、今月はそれをご紹介しようと思う。

初秋の休日の午後。中嶋の畏友の息子である石井圭三君が、親友の土屋君と関君を伴って中嶋宅を訪れた。

中嶋はいつか石井君から、彼の幼友達に警視庁第〇機動隊の隊員がいると聞いて、「一度いっしょに遊びに来給え」と言ってあったという。

三人とも二十九才。石井君は柔道、土屋君は柔道と拳法、関君も大学時代はラクビーの選手だったというだけに、体格はいずれも立派で好感の持てる青年達だが、中嶋は紹介される前に土屋君が機動隊員であることを見抜いた。中嶋が機動隊員に対して抱いている先入感的好意を差引いても、土屋君には他の二人には無い何かがあった。厳しい訓練や規律から滲み出てきたものだけではない、何か―。

石井君は優秀な商社員、関君は公務員である。

談論風発……不況、政治不信、治安、商社批判等々から話題が青年の生き甲斐に及んだとき、石井君は組織のメカニズムと上役への不信に触れ、関君は職場内の無気力を嘆いたが、最後に土屋君が自分の職業感を素朴に語った。

「―つらいけど、これが僕等の使命なんですよ…」

さりげない言葉であったが、それは鋼鉄のような強烈な響きだった。今の日本人が失っている言葉であった。その爽やかな使命感には、いささかの迷いもてらいもなかった。

「淡しいなあ。こいつにはバックボーンがある」と関君。

「―出動していて、権力や資本家の番犬とか、税金泥棒などと罵られるときは、どんな気持かね」と中嶋が尋ねた。

「―悲しいですね。でも…彼等は極く一部の人種です。一時期増えることがあっても、日本人はそんな馬鹿ばかりじゃない筈です。それより、彼等と一緒になって、騒動がふくらむのを喜ぶ野次馬根性や、無責任な反体制派に甘いマスコミの方が、僕には我慢ならませんね」そして、土屋君はこうも言った。

「―平和や、正義は、自分達の手でかち取るものです」

話々と語る彼を見つめながら、中嶋は、「日本青年健在なり！」と思ったという。

敗戦後、日本人の価値感は大きく変った。愛国心や公徳心は薄れ、正義もヒューマニズムも地に堕ち、功利主義のあだ花だけが咲き狂って、経済大国が目標だ！というが、精神の支柱を持たずして、日本民族は何処へ行きつこうというのか。知識を詰めこむだけの教育では、片輪で無気力な人間しか育たない。

次代を担う青少年に使命感を持たせ、バックボーンを与えるものは何か―。政治の責任と、教育の重要性はいくら叫んでも叫びたりないのだ。

話が一段落したとき、中嶋は本会の会員証を出して来て、黙って土屋君の前に置いた。

「…こんな団体があるんですか！　聞いたことなかったなあ―。会長は誰なんです？」と、土屋君。「ハハハ―。すぐ会長は？とくる。日本人の悪い癖だ。この団体は会長なんて偉いのは置いていない。名を求めない市民有志の純粋な集りだよ」

中嶋の説明に刮目して頬を染めた土屋君の双眸に、そのとき、キラッと光るものがあふれた。（文中人物は仮名）

会員告知板

会員の皆様にお願い

皆様方の厚いご支援のもとに本会もいよいよ隆盛をきわめてまいりました。ここに深謝するとともに会員の方々に次のことをお願いいたします。

発送事務の都合上、移転、その他住所変更等がありましたらすみやかに本会事務局（本部　東京都中央区八重洲五ノ一ノ二八）までお知らせ下さい。

会員として、また市民としての立場から機動隊についてのご意見、ご感想や機動隊とのかかわりがあった経験談、あるいは本会に関するご意見ご希望など、幅広くお寄せください。採用文については紙上でご紹介します。

なお、紙面の都合により、四〇〇字詰め原稿用紙で三枚以内とします。

寄稿歓迎

編集部では、常時、会員の皆様方からの寄稿をおまちしています。

●お断わり

記事中、大阪支部総会の日時の都合上、発行日が遅れましたことをお断わり致します。

寄付金報告

十月三十一日、匿名で金百万円の温い寄付がありましたので、ご報告申し上げます。

河童の涙

第二機動隊　巡査部長　永峰　孝

「浦安水門付近で六歳の子供が川に転落、二機レスキューは現場へ」の緊急指令を受けたのは、七月十六日の午後六時八分であった。

現場は、すでに黒山の人だかり、早く救助しなくてはと、はやる心をおさえてボンベをつけ水中へ水しぶきをあげてザブン。

転落地点を中心に半円捜索を実施するも発見することができない。岸壁では子供の母親がなすすべもなくただ涙ぐみ伏している。さぞかしつらいであろう。よし、もう一回やりなおしだ。しかし、ようとして見つからない。時間は刻々と過ぎて行く、日は暮れて川面も暗くなってきた。正直いって発見しても、もう駄目であることは医学上からも明らかであった。私達もあきらめかけたとき、岸壁の母親が水面を指して叫んだ。「子供のくつです」と。母親の哀しい願いが通じたのか、私達の目前に子供の靴が浮いてきた。

六歳の、そのいたいけな子供が水死体となって漁民のすばりによって発見されたのは、捜索開始から一時間もたってのことであった。死んでいると知りながら呼気蘇生を試みる私達河童の目には、いつしか汗にかくされた涙があった。助けてやることができなかった申し訳けなさと、未熟な捜索技術を反省する涙が。

こんなつらい思いを何回くりかえしたであろうか、願わくばもうこんな現場には行きたくない、そんな思いの河童を乗せて青い水面のレスキューは墨東の街を今日も行く。この世を花にするために。

ちなみに私達の名は、警視庁第二機動隊水難救助隊である。皆様のご支援をよろしくお願いいたします。

機動隊めぐり(18)

大阪府警第二機動隊

取材が行なわれた十一月二十日は、ちょうど「公官労働者スト権奪還スト」のデモンストレーションが予定されていた。その警備にあわただしさを隠しきれない大阪府警察第二機動隊。

昭和四十四年四月に大阪府警察機動隊は第一機動隊と第二機動隊に分化再編成され、翌四十五年二月に現在の大阪市住之江区に隊舎を移した。

北原真行隊長以下三個中隊から編成される第二機動隊は、明るい性格の隊員が多く、まとめやすいという。

「一機とは昇任試験などの際、いい意味の競争相手であり」、互いに切磋琢磨に励んでいる。過去の警備実施では、フォード大統領訪日警備、中国展警備・万博警備など多数を数え、中でも、万博警備では、「太陽の塔」に登り、入場者を騒がせた事件を処理してその名を高めた。

また、昭和四十四年十月の大阪市大の封鎖解除に出動し、放水車の浴びせる放水で、寒さに身を震わせながら抵抗を続けた学生を、毛布をもって保護するように検挙した事件では、「人間機動隊」としての一面をうかがうことができる。

隊のご自慢の一つはボート部の活躍である。今年の九月に行なわれた国体に出場し、大いに活躍した。警視庁の第二機動隊が「カッパの二機」と異名をとるように、この隊では「水の二機」をめざして訓練に励んでいるという。

また、特務班を中心に実施した隊舎周囲の造園もご自慢の一つという。これは、「強い機動隊」にも花も実もあるということを市民に知ってもらうために隊員が一所懸命に造り上げたもので、四季の花が植えられ、なかには、コンクールに出展できそうなものも少なくないという。

ところで、年の瀬も日一日とせまったこの日、隊では恒例の「チャリティ餅つき大会」の準備にとりかかろうとしていた。これは、隊員が中心になり、恵まれない施設の子供らによい正月を迎えてもらえるようにと、近くにある「いわき学園」の生徒を招待して行なわれるものである。豊岡副隊長、「私達には、直接の広報機関はないが、このような本当の隊員の姿を広く社会の人々に見てもらいたい、と常々願っています」と語っていた。

――進取・己勝・団結。三つの隊訓を背に、常に警備の第一線で活躍する隊員。

豊岡副隊長は、さらに隊長の言葉を代弁して次のように語る。

「これまで、若い隊員の努力は、ややもするとさからうみを買ってきたが、『機動隊員を励ます会』の会員のように本当によき理解者が現われたのは心強い限りです」

はげまし

はげまし　第19号
発行日　昭和50年12月23日
発行所　機動隊員を励ます会
東京都中央区八重洲5―1―28
〒104　ミツヤビル3F
☎03(272)3848

警視庁特科車両隊　われらがシンボル⑲

虹は「技術」を示し、三台の車両を〝桜〟の前に前向きにデザインして、自主積極、融和団結を表わしている。車両は同隊の要目。

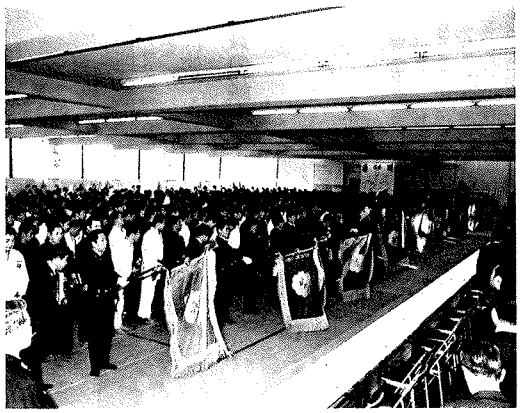
本年掉尾を飾る熱戦

警視庁機動隊対抗柔剣道大会開く

警視庁機動隊では、この一年を通じて、英国エリザベス二世陛下の訪日、皇太子殿下夫妻の沖縄訪問、そして天皇・皇后両陛下の訪米と、相次ぐ警衛警護にその大任を果たしてきた一方、寮祭・家族慰安会・弁論大会と、任務の合間をぬって各種の諸行事を行なうなど、若さにあふれた活発な行動を精力的に消化した実りある年を過ごせたといえよう。そして、諸行事の中でもとくに各隊が力を入れている機動隊対抗柔剣道大会が去る十一月二十六日に東京・中野にある警察学校で行なわれた。同大会は、本年の諸行事のフィナーレを飾るのにふさわしく、熱気のこもった大会となった。

壮観な開会式

この日の大会のために、各隊各様の練習を積んで臨んだ代表各選手は、そぼ降る雨と冷たい風をものともせず、早々と会場に集合、開会式がはじまるのを待ちのぞんでいた。



ところで、この大会の実施目的は、春秋の隊員の人事交流が行なわれ、各隊新陣容での柔剣道大会を実施し、平素の鍛練の成果を発揮させ、隊員の士気の高揚を図り、あわせて相互の隔和団結を図ることにあり、警備部長杯をかけて競うものである。

迫力満点の好試合の連続

柔道・剣道それぞれの試合場は、第一試合が開始される前からすでに熱気をはらんでいた。

各隊の出場選手は、柔道部門が主将および副主将、各一名のほか幹部隊員五名を含む合計二十五名のベストメンバー。また、剣道部門は、それぞれ一名の主将・副主将のほか幹部隊員七名を含む合計三十五名、そしてこれら正選手のほかに柔剣道とも幹部隊員二名を含む五名の補欠選手が控えており、両部門の全選手は合わせて七〇〇名にのぼる。

この出場選手の数からいってもいかに大きな大会であるか知ることができるよう。

また、試合方法は柔剣道とも一本勝負。試合時間は、柔道が四分間、剣道は三分間で、制限時間内に技が決まらない場合は、それぞれ優劣判定により勝者を決定していくというもの。従って、相手チームの主力選手にポイント（勝者一人につき一点）をとられないように、〝逃げ〟にまわって引き分けにする、というような小細工を使った作戦は通用しないことになる。

大会は、伊藤隆二管理官の開会宣言による開会式にはじまった。一同の国歌斉唱に続き前回の柔剣道各部門で優勝・準優勝を獲得した第六機動隊と第二機動隊および第九機動隊と第一機動隊がそれぞれ優勝旗・優勝杯ならびに準優勝トロフィーを返還した。

この後、村上　健警備部長が立って選手ならびに関係者に訓示を与えた。そして柔道部門の菅井主席師範、剣道部門の森島主席師範がそれぞれ試合上の注意を与えたあと、第六機動隊の佐藤正輝選手（柔道）が力強く選手宣誓を行なって開会式を終え、各選手は試合場へとむかった。

こうして次々に試合を進めて、柔道の場合は十三点、剣道の場合は十七点をあげたチームが上位に進出していく。

なお、対戦チームは第一回戦を抽選により決め、以後は勝者チームのトーナメントにより優勝を競う。

さて、いよいよ第一回戦。四面に区切られた道場に応援合戦も華々しく試合が開始された。出場選手は、主将や幹部隊員に励まされながら勇んで試合に臨む。自軍選手の勝敗に一喜一憂しながら見守る各チームの表情は真剣そのもの。「声を出していけ」、「気合負けするな」など、与えるアドバイスにも熱気がこもる。

こうして午前中の試合は終わり、午後からはじまる準決勝戦に勝ち残ったチームとその組み合わせは、柔道が第二機動隊×第六機動隊および第一機動隊×第八機動隊となり、また剣道では、第一機動隊×第八機動隊、第三機動隊×特科車両隊のそれぞれ四チームとなった。

午後一時、四面に区切っていた道場を二面にとり直し、準決勝に勝ち進んだ四チームがいよいよ熱戦の火ぶたを切って落した。

戦うことおよそ一時間半余り。随所に好試合を展開しながら、柔道は第六機動隊×第八機動隊が、また剣道では第一機動隊×特科車両隊がそれぞれ優勝決定戦に駒を進めた。

道場の化粧直しも終わり、各チームの選手が呼吸を整え直して左右に対峙したのが午後二時五十分頃。

警視庁機動隊全十個隊の柔剣道の実力は、いずれも紙一重と言われるだけに、勝つも負けるもッ々次第、決勝戦に勝ち進んできた各チームの中でもぬきんでた強運のチームのみが優勝の大旗を手中におさめることができるといえよう。

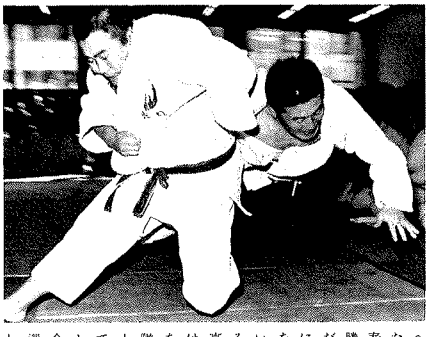
勝利の女神の思案のままに試合は早くも中盤を過ぎ、後半に賭ける各チームの意気ごみがいやがうえにも高まる。応援合戦も一段とエキサイトしてきた。

「勝負あり！」。勝負審判も真剣だ。一戦一戦を厳しく、しかも的確に判定していく。

一方、額に汗を流しながら激しく動き続ける選手の姿。この静と動の対比は、自然と武道の真髄を現わしているようだった。

こうして、柔剣道大会は無事に終了。結果は、柔道部門では第六機動隊、剣道部門では第六機動隊が見事に優勝した。そして、第六機動隊は春秋二連続優勝を遂げ、大いに気をはいた。

大会後、各優勝チームの主将にインタビューをこころみた。第一機動隊の佐伯勝行隊員は、「早朝の練習が自信につながり、その自信が優勝への原動力となった。準決勝・決勝とも逆転勝利できたのは本当に喜しい」と語った。また第六機動隊の佐藤正輝隊員は、「チームの団結力が優勝へ結びついたと思う。春・秋二連勝したわけだが、さらに連勝記録を伸ばしたい」と述べるとともに高橋孝隊員は「柔剣道を通じて全隊的なモラールを高めていきたい」と語り同大会の意義の深さを強調していた。



今月のことば

『ランブイエ宣言』に想う

今年も機動隊の諸兄とお互いに励まし励まされ、年の瀬を間近に迎える事ができたが、まことに激動の一年であった。

会社の経営では大きく思考の転換を求められ低成長期に備える体制に移りつつあるが、もともと借金経営の日本の企業が現在の不況を乗り越え業績を回復するまでにはまだまだ時間がかかるだろう。世界経済も非常時の域を脱していないというが、それでも世界の中にはボツボツ回復に向かいつつある国が出て来ていることは喜ばしいことである。日本もその一国といえると思う。

それにつけても敗戦後の混乱時から今日までを振り返る時、日本は何と天佑に恵まれたものかと痛感せざるを得ないが、日本人の心の中にも脈々と流れる何かがあるのであろう。

先般先進六ヵ国の首脳が『ランブイエ宣言』を行なったことは耳新しいニュースである。新聞で知った限りでは、世界経済再建のための行動プログラムを決め、日本は欧米先進国主導の世界経済再建のために、アジア・太平洋の一国として一役担うということである。従って今後日本の行動はアジア・太平洋諸国ではもちろん、世界的立場で真の国際性を求められることになるといえよう。日本は明治以来ヨーロッパ文明をとり入れ、戦後は急速にアメリカナイズして今日に至ったがこの機会に日本人の国際感覚を改めて考えてみる必要があろう。

過去の日本の国際進出の仕方を見ると、とかく人の邪魔をしても自分だけはよくなりたいという日本人の協調性の弱さを認めざるを得ない。アジアに占める日本は言語一つを取っても中国語とも、またその他アジア諸国の言葉ともあまりに親近性がない。ヨーロッパではスラブ系を別とすればラテン系とゲルマン系の言葉に分かれるが両者はいずれもラテン文字を使っている。お互いに他国の言葉を習得するに苦しまない。アジアはどう見てもヨーロッパのような一つの世界にはなり得ないようである。日本としては人種、言語の違いを認めた上で同じ国際社会の中で平和に暮らして行く方法を見出すことが何としても大切なことだと思う。

戦後の急速な復興により平和国家を再建した日本はしばしば西独のそれに比較されるが、個人主義と人間尊重という面では何とも頭が上らない。かつてはドイツの医学、文学、音楽等に傾倒した日本人は、戦後にわかに自由の中に投げ出されてその主体性を弱めたのではなかろうか。日本企業の過当競争を見ても、集団的海外旅行ブームを見ても、ゴルフの普及振りを見ても日本人が単一民族、単一文化、単一言語の国民である弱味を露所で現わしているようである。

『ランブイエの宣言』を静かに読む時、日本人の弱みを率直に認め相手の立場を認めまたその遠いを乗り越えて共同行為を進めるにはどうしたらよいかという発想から始めることが大切ではあるまいか。

機動隊の諸兄が国のためまたこの世の中を明るくするための使命感を持って奉仕している姿を見る時、このようなことが果して可能であろうかと今日この頃である。

機動隊物語(18)

米軍王子病院設置反対闘争警備

昭和四十三年二月二十日から十二月八日の十か月間の長きにわたる王子病院設置反対闘争が、北区労連主催による反対闘争を皮切りに幕が切って降ろされた。この間、十二月八日まで、なんと八八日間にわたる長期警備となった。

この中でも、とくに都知事の病院設置反対声明や、政府自民党の移転方針発表後の三月二十八日には、東京反戦青年委員会主催の集会、デモに三派系全学連が参加して激しい街頭武装闘争を展開した。

この日、三派系全学連は、中核派学生を中心として昼間から違法のかぎりをつくしていた。手に手に角棒を持っている者、あるいは投石をする者で、国鉄王子駅周辺は騒然としていた。

夜に入ると、極左暴力学生集団は、申請されたデモコースに従って王子本町付近までやって来た。情報によると、白ヘルメットの学生達は、全員タオルで覆面し、手に手に角棒を所持しているとのことであった。そこで機動隊員達は、王子交差点内において路線変更に備えていたが、テレビカメラの設置などから、こ

これに投石が加わるとともに、別部隊四十九名は、午後三時四〇分ごろキャンプ東側のコンクリート塀上の有刺鉄線を約三〇メートル切断、病院敷地内に乱入し、将校宿舎の入口ドアー、窓ガラス等をこわすなどの不法行為を行なったが、配備部隊がこれを全員検挙した。

これに続く四月一日の反戦青年委員会主催の集会、デモにも三派系学生等一、二〇〇人が参加、阻止運動を行なったが、デモ途中、ヤジ馬二、〇〇〇人を巻き込み、部隊に石塊、ビールビン、牛乳びん、鉄片等を投げつけ、襲いかかるほか、午後九時頃、音無橋上で警察車両（赤羽分駐の PC）を横転炎上させたのをはじめ、本町派出所を襲撃、占拠して備品を焼き払う等の不法行為を午後一時過ぎまで続行した。

この間、部隊はガス筒を使用して制圧、検挙活動を行ない、数多い不法行為者を検挙した。

その後、王子病院設置反対闘争は、いくたびか続けられたが、いずれも、三派系学生等は、付近のヤジ馬を巻き込んだ路上の武装闘争をくり広げた。

しかし、そのたびに警察部隊は、ヤジ馬が混じるという困難な警備環境の中にあっても、これを的確に排除し、規制に努めたのである。

寮祭シーズン佳境へ

警視庁第五機動隊　服遠寮寮祭

去る十二月八日午後六時過ぎより、東京・千代田区にある麹町会館において、寮員および招待客らあわせて二〇〇名参集のもとに警視庁第五機動隊の服遠寮寮祭が開催された。

この日はあいにくの雨模様だったため、参会者の出足こそにぶかったが、それでも定刻の午後六時を少々まわったころには、会場はほぼ満員になり、関係者をホッとさせた。

なお、当会からも世話人がかけつけ、祝辞を述べた。

お祝いの花束にほぐれる寮員

会場内は、準備されたテーブルを花や料理できれいにデコレイトし、柔らかな雰囲気を待つばかり。

ややたって、進行係の郡司光志隊員が開会の辞を述べたのが午後六時を少しまわったころ。

岩永勝敏第一服遠寮寮長の挨拶のあと、西海　弘隊長が、要旨次のように述べた。

「今年一年間をかえりみるに、近来まれに見る警備の年となった。幸い、残り一ヵ月足らずとなったいまは、歳末特別警戒警備を残すだけとなり、おおむね順調に本年も終える見通しとなった。今青は、多数の若く美しい女性招待客も参会しているので、ともども大いに楽しく時を過ごし、きたるべき新年の任務を完遂できるよう鋭気を養って欲しい」

続いて九島賢一郎参事官をはじめ、提正雄第五方面本部長、沢野充夫氏　当会の中野進氏らが次々と祝辞を述べたあと、招待された上野服装学院の院生二名が岩永・影山両寮長に花束を贈呈、会場内に大きな拍手が湧きおこった。

そして坂和明吾副隊長の音頭で一同が乾杯。同隊のバンド・ファイブスターの演奏とともに小宴に入った。

笑顔の絶えぬ寮員の顔……

日頃の勤務にあっても、まさに隊庭などにおける訓練時に、多おいても、濃紺の出動服常用の寮員らにとって、およそ若い女性とは無縁であるが、この日ばかりはいつもと様相が違う。それぞれが背広にネクタイ、あるいはジャケットと、思い思いの私服で参会している。

談笑の続くさ中、松旭斉八重さんの曲芸が数々披露され、その見事さに惜しみない拍手が送られた。

歓談の輪から、進行係の郡司光志隊員が、会場前方にあるフロアーでダンスをして楽しむように声をかけると、早速いく組かのカップルが踊り出し、和気あいあいの雰囲気で、場内はどちらを向いても笑顔でいっぱいだった。

西海隊長、坂和副隊長も寮員や招待客らに和し、ダンスをしたり、歓談したりと、日頃の鬼隊長ぶりがまるで仮面のよう。

こうしておよそ三時間あまりにわたって行なわれた寮祭は無事に終了した。

先にお伝えした警視庁第九機動隊の九桜寮々祭、また今後も引き続き行なわれる各隊の寮祭ともども、いよいよ寮祭シーズンも佳境に入ったといえよう。

会員と隊員のひろば

〝責　任〟

伊藤　宏

「機動隊員を励ます会」の会員となって以来隊員の方々と何度か話しをする機会に恵まれましたが、その都度、感じた事は、隊員の方々の使命感に燃えた目つきです。

明朗で規律正しく、責任感を持ち、目的に向って進む若者の顔、そのものです。

こういう顔つきをした若者は、他の社会には、ほとんど見られなくなりましたので、より強い印象を受けると同時に、他の若者達には、なぜこのような使命感、責任感、正義感に燃えている者が少ないのだろうか、と思わざるを得ません。

戦後、三十年が経過し、我が国は経済大国にのし上り敗戦の傷跡は全く感じられなくなり、自由を謳歌できるようになりました。

欧米の物質文明をいち早く取り入れ、国民の所得水準も向上し、経済的には非常に恵まれてきています。しかし精神的な面においては、まだまだ未発達な部分が多く、物と精神との間に、アンバランスが生じた社会情勢にあります。

一連の過激派学生の暴走や内ゲバ騒ぎ、最も悪質な連続企業爆破事件等、非常に効率で未熟児的自己満足に浸っている者による事件が後を絶つ事なく起こっています。その背景には若者達は自由であり平等であるという民主主義の一面だけを受け入れ、社会生活を前提とした個人の自由、平等、という事を忘れて、利己主義的、〝自由〟〝平等〟を強調する思想があると思います。自分の失敗を社会のせいにしたり、他の迷惑も考えずに起こす行動など自由という言葉の裏にある意味が全く忘れられています。

自由であるという事には責任が伴ない、平等であるという事には差別が伴なっています。

我々は自由に行動を起こす事ができるが、それは必らず責任ある行動でなければならないし、また平等に権利を持っているが、働かなければ公平に差別されても、しかたがないのです。このような当然な民主主義のルールが理解されないで、自由と平等、権利の主張ばかりを要求する傾向になっています。

戦後の教育が受験のための勉強に終始し、人間形成や高度な道徳を養うという面に欠けた結果ではないかと思います。この精神的な面の人間形成や高度な道徳教育が十分なされなければ、いつまでたっても社会秩序や責任感のない若者がなくなりません。

知識を得るだけの教育ではなく、人間形成や高度な道徳教育を行ない、民主主義のルールにそった若者もつくりだし、早く機動隊の方々のような使命感、責任感、正義感、を持った顔つきをした若者を街中で見られるように期待したいものです。

天皇皇后両陛下ご訪米警備を終えて

特科車両隊　小野徳三

年が改まり一九七〇年代後半を迎えた。昨年を振り返って見ると、一昨年の企業連続爆破事件に伴う警戒警備、フォード大統領来日警備等の特異警備に引き続き、昨年は、エリザベス女王来日警備、沖縄国際海洋博警備、天皇皇后両陛下ご訪米警備等かつてないような大警備のすべてに私達は従事できた。

なかでも印象的なのは、天皇皇后両陛下ご訪米に伴う警衛警備であった。

天皇皇后両陛下のご訪米は、日米両国にとって大きな意義を持つものであり、全世界注目の的であったと言っても過言ではあるまい。

一方においては、自己顕示欲の強い暴走族のような極左暴力集団各派は、年頭から〝天皇訪米絶対阻止〟を唱え、ご訪米当日の九月三〇日を最大の「総決起戦の日」と照準を定め、異常な盛り上りをみせていた。

即ちこれら各派は、先陣争いをするように七月十二日の皇居坂下門突入事件、同月十七日の沖縄ひめゆりの塔での火炎びん投てき事件に続き、警察施設に仕掛けた爆弾事件、防衛庁施設や、内外要人邸に対する火炎びん投てき、さらには横須賀での大型爆弾爆発とこれに関連する東京御所脇で悪質な事件（検挙）等、極めて悪質な事件は、日を追うにつれて激化し、我々にとっては緊迫の連日であった。

そのような状況下にあったこの警備は、あらゆる場面を想定して、訓練に次ぐ訓練を重ねてもなお不安のつきまとうものであった。

九月二十九日、当隊の担当地区は東京国際空港雑づめ、ご出発二四時間前、即ち徹夜での警備のため隊庭に整列する。この日隊員は、真新しい肌着に身をつつんでいた。

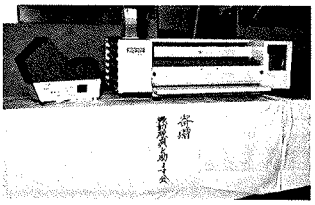
隊長の「今まで積み重ねてきた訓練の成果を発揮する時が来た。どんなさいなミスも許されない。悔のない警備で万全をつくそう」という力強い訓示に咳一つなく緊張感がみなぎる。僚友の眼には、

「よーし、やるぞ!!」

という決意がうかがわれた。

午前十時三〇分本隊出発、十二時三〇分から一斉検索が始まる。目の届く範囲内は勿論、小さな植込み、側溝の中まで紙くず、コーラー、ジュースの空缶まできれいに取払う徹底した大掃除以上の検索である。

夜にはいって二二時から徹夜検問の態勢に入る。刻々入る不隠な情報に、それこそ蟻の這い入る隙もないという態勢で、車両はもちろん歩行者に至るまで、不審者は絶対に見逃すまいという意気込みである。



折り悪く夕刻から降り出した雨は、夜半になって激しさを増した。頬にしたたり落ちる雫をぬぐおうともせず、体全体から立ち昇る湯気が示すように、〝やるぞ!!〟という我々の熱気に押されてか、雨は三時すぎに小降りとなり、三〇日朝は、日の出とともにからりと晴れ上り、天皇皇后両陛下の歴史的行事を祝福するかごとく雲一つない日本晴れとなった。

九月三〇日午前零時を期して、陸、海、空から空港内に一斉突入を図るという極左暴力集団の不隠な情報も、我々の完璧な警備に何らなすすべもなく三〇日の夜が明けた。

内心ほっとする心を押え、あと一息〟と思うと改めて気力が湧く。

六時三〇分からは、空港内に入る全車両の検問である。この検問も、受ける人々はそのほとんどが善良な市民である。従ってそれら人々にとっては検問を受け、あるいは受けるために待たされることはなはだに迷惑なことだと思うと遠慮がちになる。

しかしこの消極的になりがちな気持を振い立たせてくれたのが、検問を受けた多くの人々からの

「ご苦労さん、しっかりやって下さい」

「陛下のご出発は間もなくですね、もう少しだから頑張って下さい」

という温かい励ましの言葉であった。

この短かい一言は、雨の徹夜警戒の苦労も疲労もいっぺんに吹き飛ばし、勇気を与えてくれたのである。

両陛下は予定どおり皇居ご出門、何の支障もなく九時三〇分定刻どおり訪米の途につかれた。受令機から流れてくるいつもとは違う浮ずった声

「九時三〇分、お召機離陸!!」

その瞬間、歓声ともつかぬ

「おおっ!!」

という声が一斉にもれる。同僚の顔は、その朝の天候のように晴々としている。

それぞれ持場持場の責任を果たし得たという男の顔だ。実にすがすがしい気持だ。

この警衛警備を見事に完遂した喜びと、その気にさえなれば何でもできるという自信をつけて帰隊に向った。

いつの場合でもそうであるが、我々の仕事は完全に遂行して当たり前、少しのミスも許されない。そういう期待される職場に奉ずることが私達の生き甲斐でもあるが、このような立場をより理解し、支援してくれる大多数の人々、そして「機動隊員を励ます会」の存在が心強く、明日の仕事への意欲をかりたててくれるのである。

とくに機動隊員を励ます会の方々からは、いろいろな機会に、いろいろな形でご支援をいただいているが、この度も、「両陛下ご訪米警備ご苦労様」と慰労金のご寄贈をいただいた。当隊では、会の方々のご好意を、隊全員の心の支えとするため、その趣旨を銘記して全員が利用する視写機を購入し、今日もまた有効に活用させていただいている。

会員告知板

会員の皆様にお願い

皆様方の厚いご支援のもとに本会もいよいよ隆盛をきわめてまいりました。ここに深謝するとともに会員の方々に次のことをお願いいたします。

発送事務の都合上、移転、その他住所変更等がありましたらすみやかに本会事務局（本部　東京都中央区八重洲五ノ一ノ二八）までお知らせ下さい。

寄稿歓迎

編集部では、常時、会員の皆様方からの寄稿をおまちしています。

会員として、また市民としての立場から機動隊についてのご意見、ご感想や機動隊とのかかわりがあった経験談、あるいは本会に関するご意見ご希望など、幅広くお寄せください。採用文については紙上でご紹介します。

なお、紙面の都合により、四〇〇字詰め原稿用紙で三枚以内とします。

会員増幅状況

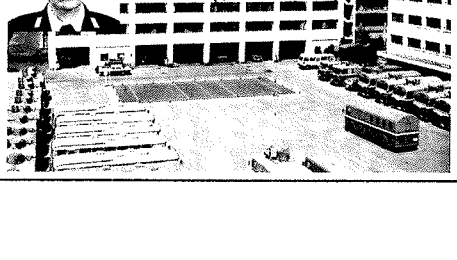
一般個人会員	四、八〇四名
特別個人会員	五八二名
法人会員	二六〇〇社
合計	五、六四六名

（十二月十八日現在）

機動隊めぐり(19)
警視庁 特科車両隊

ここ東京・市ヶ谷本村町にある警視庁特科車両隊は、その行動半径二、五〇〇キロメートルを股にかけ、「支援の特車」のニックネームに違わぬ活躍を続けている。現在、四代目佐藤益雄隊長が率いる同隊は、初代中村克巳隊長のもとで創案された「融和団結、創意練成・自主積極」の三つの隊訓を受け継ぎつつ、数々の輝やかしい警備実績をもっている。その一部を紹介すると、最近では五月に行なわれた英国エリザベス女王陛下来日警備をはじめ、沖縄海洋博警備、フォード米国大統領来日警備、天皇・皇后両陛下ご訪米警備など。

佐藤隊長は、これら一連のところで、十二月になると、諸外国の警察当局から視察団が訪隊することである。部隊運用方法や警備訓練もさることながら、警備車両に高い関心を寄せているようである。六月には、フランス空港警察署長、九月はオーストラリア警察本部長らが訪隊し、〝ワンダフル〟を連発して帰国したという。



諸警備のなかでも、とくに天皇・皇后両陛下のご訪米警備が印象深いと、次のように語った。

「この警備の性格は、一言でいえば〝精神警備〟ということである。羽田空港へ向う人々の中には、狩猟に行く人もあり、当然そういう人は猟銃を所持しているわけで、それらの人をチェックして、途中でその猟銃を奪われ、悪用されないように係官が同乗して空港まで行くなど、これまでの〝力の警備〟とは異質な性格のものでした」

同隊の特徴は、まず三十一種類ほどの特殊車両を含む一一〇台余りの車両を有し、ほぼ全隊員が大型車両のドライバー・ライセンスを所持していることがあげられる。この規模は全国機動隊の中でもナンバーワンである。

また、装備や警備技術開発に優れた功績をあげていること。企業爆破事件が続く折、「爆発物処理機」を開発し、大きな期待が寄せられている。

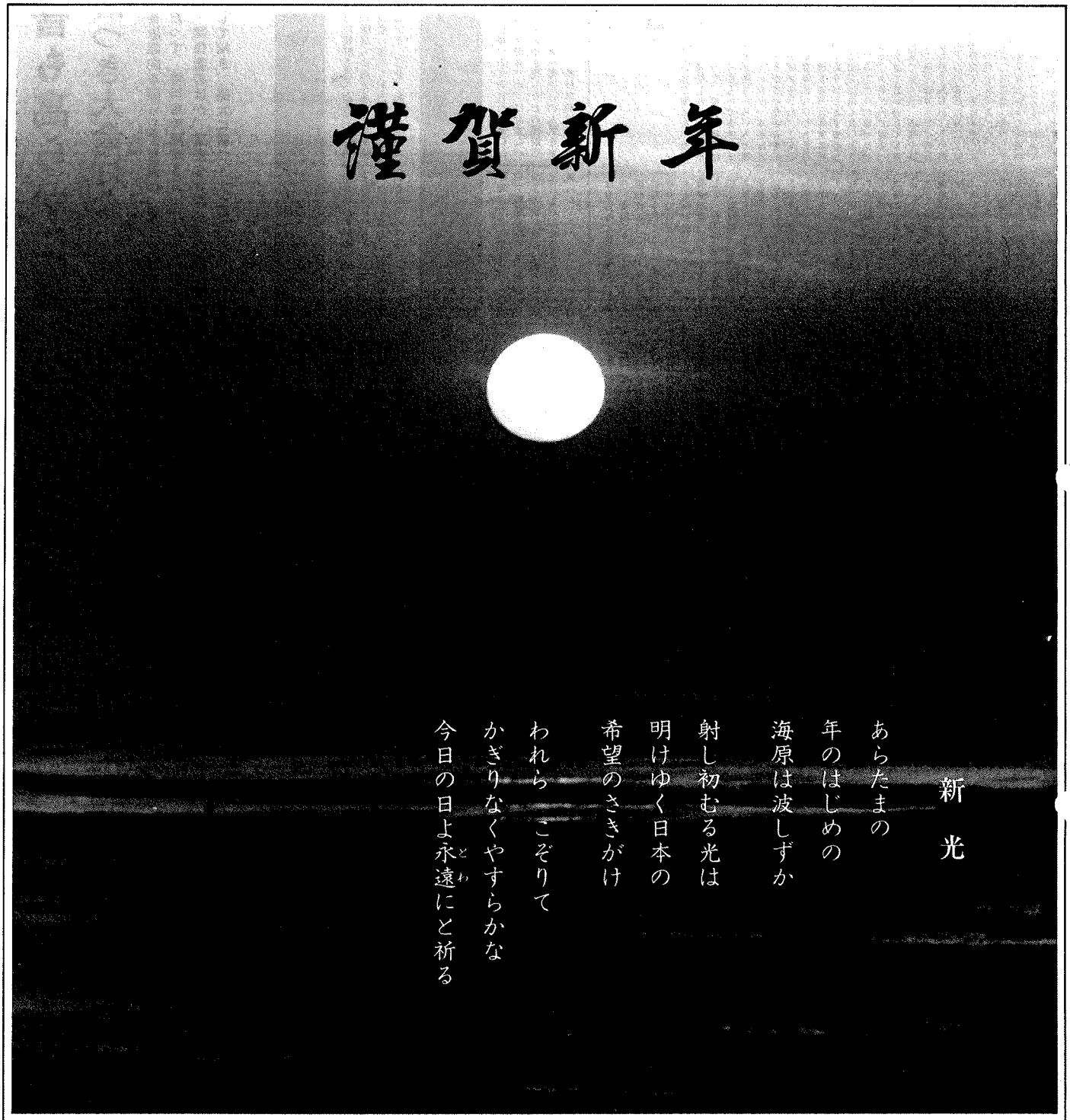
そして三番目の特徴は、諸恒例の特車名物「放水納め餅つき大会」が行なわれる。これは放水車が七色の放水を行ない、当年の放水納めとするとともによりよい正月を迎えられるようにと餅つきを合わせる行事である。

以上紹介したのは特科車両隊のごく一部であるが、紙面も残り少なくなってしまった。最後に、取材に応じていただいた佐藤隊長は、「浅間山荘事件で高見繁光警視正が殉職されたことは深い悲しみとするところである。氏の遺徳は今日も、また永遠に本隊に受け継がれると信じている。最後に、全国の機動隊へ、本隊が協力できることがあれば、同じ機動隊として喜んで協力したい」と語った。

長らくご愛読いただきました「機動隊めぐり」同様「われらがシンボル」もしばらくお休みさせていただき、次回からのこの欄は新企画を掲載します。
ご期待下さい。

はげまし

はげまし　第20号
発行日　昭和51年1月17日
発行所　機動隊員を励ます会
東京都中央区八重洲5—1—28
〒104　ミツヤビル3F
☎03(272)3848



機動隊員の皆様ご苦労さま　≪賀正≫　本年もよろしく

宮崎精鋼株式会社	平井達三	自見眞清	川渕長一	株式会社 小澤製線所	小川甫三	岡部 株式会社	大内俊司	伊藤 稔	市原澤次

杵の音も高らかに

警視庁特科車両隊　餅つき大会行なわれる

警視庁機動隊では、各隊趣向を凝らして恒例の「餅つき大会」が行なわれる。これに先だって、特科車両隊がさる十二月十九日、隊庭において多数の来賓・関係者のほか、東京愛育園および錦華学園の園児を特別招待者として招き、盛大に餅つき大会を行なったのでルポしてみた。

「わが隊の元気あるところをお見せしよう」

午前十一時、予定通り「餅つき大会」を開会。佐藤益雄隊長は、「質量ともにかつてないほどの警備が続いたが、隊員諸君の若さと団結力で無事に乗り切れたことにいっそう、自信を深めた。その若さと団結力を今日の『餅つき大会』に来られた来賓の方々や東京愛育園、錦華学園両園のよい子にも見ていただこう」と挨拶、続いて九島賢一郎参事官、提　正雄第五方面本部長、当会の中野　進氏らが次々に祝辞を述べたあと、参会の隊員らに迎えられて特別招待者の園児らが入場。その間、およそ二〇分。来賓・隊長らがお揃いの絆纏を着て、それぞれ臼につき、いっせいに杵入れをしたあと、餅つきが開始された。

「柔道世界チャンピオンとともに餅をつこう」

会場にあてられた隊庭には綿飴や焼きソバ、はたまたバナナの叩き売りなどの模擬店が軒を並べ園児らの人気を集めていた。特科車両隊は、毎年施設などの恵まれない子供で、これではすぐに空腹になり困ってしまうのではないかと聞いたところが、そんな事はない、これで充分栄養になるのだという答であった。なるほどこれで一ラウンド廻ったがとくに空腹感はなかった。またキャディーさんは十八才位であったが皆理知的で姿もスラリとしてまったく快活である。職業意識が旺盛できびきびと動いてくれるし、愉快に応待してくれる。その

を基にこの大会を開催している。その意味で、プログラムの内容も各中隊別に趣向を凝らした「見せる餅つき」に終始した。

まず、第一中隊による『花咲じいさん』をもじった呼称で、ついた餅が大判、小判に変わるというもの。

そのあと、順次第二・第三第四各中隊がそれぞれ『インディアン餅』『かち餅』『スポーツ餅』と題した餅つき演技を披露、参会者の爆笑と喝采を浴びた。

アトラクションが終わると、佐藤隊長から東京愛育園・錦華学園両園の園児に記念品が贈呈された。そして最後に、隊歌を合唱して閉会した。

今回の餅つき大会に、特科車両隊が誇る柔道世界チャンピオンの遠藤選手が参加、大会に花を添えた。

令月のことば

『諸　感』

機動隊の諸君のたくましく信念に満ちた様子を我々は常に見て、誠に頼もしいかぎりで、胸の中がスッキリするような気持を抱いておるのであるが、その根源は何であろうか。自信と信念とそして絶え間なく受けた厳しい訓練につちかわれた強い使命感ではないであろうか。それについては、さか感想を述べてみたいと思う。

私は最近取引先の船会社に招待されて釜山に数日間行ってきた。戦前、朝鮮半島には何回も仕事で行ったが、当時は波の荒い玄海灘を船で長い時間をかけて行かなければならなかった。しかし今日では、大阪空港から空路約一時間足らずで釜山に着く。わずかに一時間であるから昔とは比較にならないほど楽になった。

戦前の情勢しか知らない小生にとって、現在の韓国はどのようなものであり、また対日感情もいろいろと聞かされていたが、本当はどうであるかと少なからず不安と興味があった。こうして釜山空港についたところが、入国審査等は非常に好意的でありひとまず安心して、釜山では最も良いとされているホテルに着いたのである。ホテル内ではすべて日本語で話が通じて非常に便宜であった。所用を済ましては翌日はゴルフに招待されたのであるが、その朝のホテルの食事は井にご飯が半分位で、半搗き米と麦と豆の混合食であった。一週間に二日位は「米なしデー」があるということを聞かされたのである。おかずはもちろん質素なものであり、食糧不足によるものと思われる。これでは戦時中の日本のように、国民は皆やせているのではなかろうかと街に出てみると、若い青年男女はいずれもたくましく、とくに男子は肩幅が広く筋肉隆々、女子も足が、スラリとして顔だちも生き生きとしている。何かいかにも自信に満ちあふれているように見受けられた。ゴルフ場での昼食は、朝鮮そばであったが、丼に半分位

中の数人は日本語がうまいので聞いてみたら第二外国語として日本語を習っているとのことであった。ここで一番私の胸に応える言葉を聞いたのである。

純情な少女であるから政治的発言ではない。それは、「日本人は非常に富んでおり、勇気があって、そのうえ非常に勤勉である。自分達も見習うべきである」というのである。

これをかわいらしい真面目な韓国少女から聞かされて、最近の日本人の姿を考えてまったく首をうなだれてしまった。資源乱費と功利的で自分勝手、しかも弱い者には、威張るなど、とても勤勉とは思えないほど大きく変容した世相を考えて、たった一時間位の距離の所にこのような真剣な気持の国民と国家があることに深く考えこんでしまったのである。

ところで、韓国青年の体格の良いのは、成長期に事ならないほど豊かになった。戦前の情勢しか知らない小生にとって、現在の韓国はどのようなものであり、また対日感情もいろいろと聞かされていたが、本当はどうであるかと少なからず不安と興味があった。こうして釜山空港についたところが、入国審査等は非常に好意的でありひとまず安心して、釜山では最も良いとされているホテルに着いたのである。ホテル内ではすべて日本語で話が通じて非常に便宜であった。所用を済ましては翌日はゴルフに招待されたのであるが、その朝のホテルの食事は井にご飯が半分位で、半搗き米と麦と豆の混合食であった。一週間に二日位は「米なしデー」があるということを聞かされたのである。おかずはもちろん質素なものであり、食糧不足によるものと思われる。これでは戦時中の日本のように、国民は皆やせているのではなかろうかと街に出てみると、若い青年男女はいずれもたくましく、とくに男子は肩幅が広く筋肉隆々、女子も足が、スラリとして顔だちも生き生きとしている。何かいかにも自信に満ちあふれているように見受けられた。ゴルフ場での昼食は、朝鮮そばであったが、丼に半分位で、これではすぐに空腹になり困ってしまうのではないかと聞いたところが、そんな事はない、これで充分栄養になるのだという答であった。なるほどこれで一ラウンド廻ったがとくに空腹感はなかった。またキャディーさんは十八才位であったが皆理知的で姿もスラリとしてまったく快活である。職業意識が旺盛できびきびと動いてくれるし、愉快に応待してくれる。その中の数人は日本語がうまいので聞いてみたら第二外国語として日本語を習っているとのことであった。ここで一番私の胸に応える言葉を聞いたのである。

純情な少女であるから政治的発言ではない。それは、「日本人は非常に富んでおり、勇気があって、そのうえ非常に勤勉である。自分達も見習うべきである」というのである。

これをかわいらしい真面目な韓国少女から聞かされて、最近の日本人の姿を考えてまったく首をうなだれてしまった。資源乱費と功利的で自分勝手、しかも弱い者には、威張るなど、とても勤勉とは思えないほど大きく変容した世相を考えて、たった一時間位の距離の所にこのような真剣な気持の国民と国家があることに深く考えこんでしまったのである。

ところで、韓国青年の体格の良いのは、成長期に事ならないほど豊かになった。戦前の情勢しか知らない小生にとって、現在の韓国はどのようなものであり、また対日感情もいろいろと聞かされていたが、本当はどうであるかと少なからず不安と興味があった。こうして釜山空港についたところが、入国審査等は非常に好意的でありひとまず安心して、釜山では最も良いとされているホテルに着いたのである。ホテル内ではすべて日本語で話が通じて非常に便宜であった。所用を済ましては翌日はゴルフに招待されたのであるが、その朝のホテルの食事は井にご飯が半分位で、半搗き米と麦と豆の混合食であった。一週間に二日位は「米なしデー」があるということを聞かされたのである。おかず

隊に入って数年間十分に鍛え上げられるからである。日本の大学生のあのか細い足腰を、またきたなくのばした髪や弱々しい肩幅を見ると、後ろからでは男女の区別すらつきかねる。

そして学生で税金は一銭も払っていないにもかかわらず、やたらと権利を主張して義務を忘れている。三千数百万人の韓国人の真剣な姿をみていると一億一千万といわれる日本人は韓国人の期待にそえるのであろうかどうか。

私は機動隊の諸君をみてまだ日本は大丈夫であるという気持になれた。何とかして若い青年を機動隊員諸君のようにりっぱな体格の使命感にあふれた生き生きとした人間にできる方法はないであろうか。機動隊に対して、我々はその行動を感謝するとともに、それ以上にその精神的なバックボーンに深く期待するものである。

会員と隊員のひろば

治安維持のために

東京　H・M

連想ゲームではないが、「機動隊」と言えば、直ちに「デモ」と答が返ってくるほど、デモ隊と機動隊の結びつきが強く、私たち一般市民にとっては、デモ警備取締り任務のみが、あたかも機動隊の代名詞とさえなっているようである。

とくに最近における一連のデモやテロ行為などは、一部の少数過激派の活動により、ますます、悪質、凶悪化の傾向のため、ことがあるごとに機動隊員は完全重装備をもって、デモやテロなどの最前の局面に接し、激しいゲバ棒や投石、ときには火炎ビンなどの矢弾を受けながらも、強い信念と勇気そして使命感と正義感をもって勇猛果敢に、暴徒に立ち向い、一糸乱れず団結して鎮圧や取締りの激務に対し、「機動隊員を励ます会」の一会員として各隊員の活躍や苦労に何時もながら感謝している次第である。

しかしながら、皮肉的な見方をすれば、デモにかぎらず、機動隊の精鋭精強をもって、日本各地を北へ南へまたは東や西で頻繁に活躍しなければならないと言う事は、それだけ政情不安が深まり、世相や公安が乱れていると言わざるを得ない。

昨年度の「治安白書」によると、今年は、各過激派の爆弾闘争がエスカレートし、爆弾も大型化しているため、破壊力や危険度が大きくなっていることや各派組織の非公然軍事や過激的な思想者を出さないことが肝要である。そして今後とも機動隊と会員の交流を一層盛んにし、お互いの立場で協力体制を緊密にしてときにはお互いに励まし、励ましあいながら、天下太平の世の中を築き上げるため努力しようではありませんか。

警視庁ラグビー部員として

三機　水野裕人

警察官のスポーツとして、柔剣道と同じように心身を鍛えるスポーツは他にないものだろうか、ということで当時（昭和三十七年三月）の高橋警備部長の熱意により、機動隊員もラグビーをやることになった。

一個の楕円のボールを追って、肉弾相撃つラグビーには強靱な体力と不撓不屈の精神が必要であるとともに、「友情と犠牲」、「フェアプレー」が不可欠である。これが、ラグビースピリットであり、機動隊精神でもある。

高橋警備部長から「捨て石になれ」「花を咲かせるこやしになれ」と訓示されてから十数年、雨の日も風の日も、また警備から帰った非番の日もただひたすらに楕円のボールを追い続ける。連日連夜の警備のため、練習時間は、ほとんどなく公式戦を数試合棄権したこともあった。

夜間の警備終了後の一二時ころ近くの公園までボールを持って街路灯の薄明りの下で練習したり、また隊庭で投光車の光りの中で、大きな長い影が行ったり来たりしたこともあった。

ボールに白ペンキを塗り、パスワークやキックの練習をしたこともあった。

しかし、そこには、いつかきっと試合ができる。思いきり試合ができる。そのことだけを生きがいとして、毎日毎日、少しずつ、つみ重ねていった。

そんな困難な時、苦境の時ほど部員一同の結束が固かったことはいうまでもない。

また、仕事上、完全装備で駈け回る私達にとって、任事即ラグビーの練習につながっていた。

ところで、ラグビーには、女性フィンランドの人がいるが、我がチームにも宿敵チームの選手の妹さんとか、女子社員との激しい恋愛の末結ばれたカップルもいる。

それもグランドでのフェアプレーの精神で他チームとの交流や、ノーサイド後の選手同志の互いの健闘を讃えた結果、友情がめばえるというホピースエピソードもある。

我がラグビー部は、諸先輩が捨て石となって頑張った努力を無駄にしないように、警視庁ラグビー部の部訓である、

精魂尽くして颯爽たり
省みる時の微笑み

を常に、チームの心の糧として、全国制覇を目指して、今日もまた、困難にタックルし真の勝利をつかむため、トライを積み重ねたい。

会員告知板

●昭和五十一年度会員更改および会費納付について

きたる三月三十一日をもって昭和五十年度の会員資格が切れますので、同五十一年度の会費を納付されるとともに会員更改されますようお願い申し上げます。

なお、詳細につきましては、本紙二十一号紙上にてお知らせいたしますが、会員各位におきましては、できるだけ今年度内に手続きされますよう合わせてお願い申し上げます。

●会員増幅状況

法人会員	二六一社
特別会員	五八三名
一般会員	四、八四一名
合計	五、六八五名

（一月七日現在）

福岡支部総会開会のお知らせ

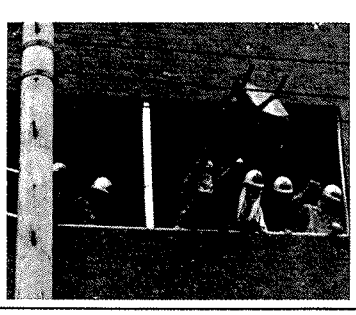
きたる三月一日、福岡支部の総会を開催いたします。同支部に所属する会員各位は奮って、参会されますようお願い申し上げます。

なお、詳細につきましては、本紙二十一号（二月発行予定）紙上にてご案内申し上げますので、お見のがしなきようご注意下さい。

機動隊物語(19)

――鉄壁のバリケード――

日大仮処分執行に伴う警備



わが国における数多い大学紛争の中でも、もっとも異質なのが、昭和四十三年九月に起きた日本大学における紛争であろう。

約二〇億円の使途不明金問題に端を発したこの紛争は、全学共闘会議の学生が校舎を占拠するという形で進められた。これに対し、大学側は東京地裁の仮処分決定に基づき、日大本校・法学部、経済学部を占拠している学生の実力排除を九月四日午前五時から行なった。

しかし、占拠学生は執行官の通告も、また大学職員の再三にわたる立退き警告を無視し、全員ヘルメット、覆面スタイルで、これらに罵声を浴びせ応じなかった。

このため、作業員がバリケードを撤去すべく作業にとりかかるや、学生達は、投石、放水、消火剤の放散等でこれを妨害したため、午前五時二〇分、執行官から警察部隊へ排除応援要請がなされた。

要請をうけた部隊は、法学部、経済学部において活動を開始した。二機、五機が経済学部、三機が法学部の封鎖解除に当った。法学部においては、同館の四方を固め、中央部正面入口より突入を試みたが、机、椅子等で固められたバリケードは厚く、二階、三階、四階からは敷石、ブロック、椅子等が、雨のように投げられ、バリケードを排除しなければ、正面入口、側面入口からの突入は不可能であった。部隊は催涙ガスを使用したが、ベランダのところで覚ロッカー等で目かくしてあるため、それに当ってはね返ってくるだけで、教室内に打ち込むのはなかなかむずかしく、その効果はほとんど見られなかった。

そこで、放水によって学生の抵抗を弱め、その際にバリケードを撤去しようと、大型放水車が出動した。

この戦略は見事功を奏し、部隊は館内に入ることに成功、なお続く占拠学生の妨害を排しつつ、館内のバリケード撤去とともに検挙活動に入った。

しかし、経済学部においても活動中、五機の分隊長が、投石をうけて重傷を負ったとの情報が届いた時、隊員達の目に一瞬怒りの色があふれた。

検挙活動では七時半頃までに一三〇余名の学生を検挙したが、重傷を負った五機の西条分隊長は、遂に手当てのかいもなく三四才という若さで帰らぬ人となった。

同分隊長は、負傷した部下を防護するため、自分の楯を部下にかぶせ、がんばれと激励した瞬間、経済学部の本館階上から投げられた人頭大の大石をヘルメット左頭部に受けたのであった。しかし、この使命感、人間愛は、その後の機動隊員達の大きな心の支えとなったのである。